

立山町文化財調査報告書第18冊

ASHIKURAJI MURODO SITE

# 芦嶺寺室堂遺跡

— 立山信仰の考古学的研究 —

立山町教育委員会

1994年3月



立山賦一首 拜 謹詔  
此立山者、有

(訓読)

立山の賦一首 新川郡にあり

天離る 離院に名懸かす 越の中

国内ごとく 山はしも 繁にあれども

川はしも 多に行けども すめ神の

領き坐す 新川の その立山に

常夏に 雪降り敷きて 帯ばせる

多都奇利能 於毛比須賀未夜 安里我欲比

伊夜登之能播に 金増能未母 布利佐氣見都々

金呂豆餘能 可多良比具佐等 伊東太見奴

多都奇利能 於登能未毛 名能未母伎吉底

多知夜麻今 布里於家流由伎乎 登己奈都余

見礼等母 安可受 加武良賀奈良之

可多加比能 可波龍漸伎欲久 由久美豆能

多由流許登 奈久

安里我欲比見牟

人にも告げむ 音のみも 名のみも聞きて

善しうるがね

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽か

ず神からならし

片貝の川の瀬清く行く水の絶ゆることなく

あり通ひ見む

四月二十七日 大伴宿祢家持作れり。

ASHIKURAJI MURODO SITE

# 芦嶺寺室堂遺跡

—立山信仰の考古学的研究—

立山町教育委員会

1994年3月

# 序

立山は、富士山・白山とともに古来「日本三靈山」の一つとして世に名高く、明治以降は動・植物など自然の宝庫として広く世界中に知られ、また近代登山挿籠の地としても著名で、富山県人が長く誇りとし、心の支えとしてきた山です。

このたび調査の行われた芦嶺寺室堂遺跡は、近世以前には山上における唯一の宿泊施設であり、立山全体の宗教的活動の拠点として重要な位置を占めていたと考えられている遺跡です。

今回、ここに史上初めて本格的発掘調査の手が入り、近世初期の礎石や古代以来の遺物など、他には求め得ない貴重な資料を得ることができました。これらの資料は、立山の歴史を解明するためのみならず、日本人の精神史を知るための大きな手がかりとなるでしょう。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた環境庁並びに富山県立山博物館と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1994年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

## 例　　言

- 1 本書は富山県立山町教育委員会が平成4年度、5年度に国庫補助事業として実施した立山町芦崎寺（あしくらじ）所在芦崎寺室堂遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査に際しては、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、富山県文化振興財團、富山大学人文学部考古学研究室、富山県立山博物館の協力を得て後記の調査団を編成して調査を実施した。
- 3 遺物の復原・実測、図面の整理・製図は調査参加者全員が協力しておこなった。
- 4 本文は宇野隆夫（富山大学人文学部教授）、前川　要（富山大学人文学部助教授）、大野淳也、大泰司統、大高政史、大平愛子、尾野寺克実、河合　忍、佐藤聖子、武田昌明、中田書矢、野中山希子、福海貴子、松原和也（富山大学人文学部考古学研究室）が分担して執筆し、宇野・前川が記述内容の統一をはかった。また、電気探査については酒井英男氏（富山大学理学部助教授）にお願いした。なお執筆の分担は目次に記し、必要な場合は文末にも付した。
- 5 参考文献は本文末にまとめ、通し番号を付した。遺物番号は通し番号を付し、実測図と写真的番号を統一した。
- 6 第2次調査分の土層の色調については、『新版・標準土色帖』（農林水産技術会議事務局1976年）を使用した。
- 7 編集は宇野・前川・三鍋が協力して行い、大野・中田・大平・尾野寺がこれを助けた。
- 8 玉殿窟・虚空蔵窟の三次元実測の基本データ作成については、日本テクニカルセンターの協力を得た。
- 9 本書の作成に際して、佐伯　昇（室堂山荘）、佐伯定義（雷鳥社）、谷江秀夫（広貫堂）、上野辛夫・後藤玉樹（財團法人 文化財建造物保存協会）、西井龍儀・舟崎久雄・宮田進一・酒井重洋（富山考古学会）、京田良志（高岡高校）、山元重男（大山町議会事務局長）、吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）、桙山林維（国学院大学文学部）、茂木雅博（茨城大学人文学部）、菅谷文則（なら・シルクロード博記念国際交流財團）、橋本裕之（奈良県立橿原考古学研究所）、時枝　務（東京国立博物館）、兼康保明（滋賀県埋蔵文化財保存協会）、小沢　毅（奈良国立文化財研究所）、森下恵介（奈良市）、小田木治太郎（天理大学参考館）、亀井　聰（大阪文化財センター）をはじめとする方々からご協力および貴重なご教示を得た。また、芦崎寺室堂現状写真については、有限会社　真陽社より提供を受けた。記して厚く御礼申し上げる。
- 10 出土遺物・記録書類は、立山町教育委員会で保管・公開している。

# 目 次

	頁
第1章 調査の概要 .....	三鍋秀典 ..... 1
1 調査の目的 .....	1
2 調査に至る経緯 .....	1
第2章 芦嶺寺室堂の歴史的環境と立地 .....	大野淳也 ..... 3
1 歴史的環境 .....	3
2 遺跡の立地 .....	10
第3章 芦嶺寺室堂発掘調査及び玉殿窟・虚空藏窟測量調査の成果 大野淳也・大平愛子・尾野寺克実・河合 忍・佐藤聖子・ 武田昌明・中田書矢・野中由希子・福海貴子・松原和也 .....	12
1 調査前の知見 .....	12
2 北室と周辺の発掘調査 .....	12
(a) 調査の方法 .....	12
(b) 遺構 .....	13
(c) 遺物 .....	15
3 南室と周辺の発掘調査 .....	17
(a) 調査の方法 .....	17
(b) 遺構 .....	17
(c) 遺物 .....	19
4 玉殿窟・虚空藏窟測量調査 .....	32
(a) 測量の方法 .....	32
(b) 測量調査の成果 .....	33
第4章 考 察 .....	35
1 遺物 .....	中田書矢 ..... 35
2 遺構 .....	大野淳也 ..... 44
3 立山信仰の時期区分 .....	大野淳也 ..... 48
4 結語 .....	宇野隆夫・前川 委・三鍋秀典 ..... 50
付 章 自然科学的調査の成果 .....	55

参考文献	56
ENGLISH SUMMARY	58

## 図版目次

	関連頁
卷首図版 立山雄山全景写真	3
図版1 調査地域航空写真	12
図版2 周辺遺跡位置図	大野製図 3
図版3 芦崎寺室堂全景	
1 室堂全景写真（南西より）	真陽社提供 12
2 室堂北室写真（北東より）	真陽社提供 12
図版4 調査区周辺の地形と発掘区位置図	福海製図 12
図版5 遺跡周辺関連遺構(1)	
1 立山雄山遠景写真（西より）	前川撮影 5
2 真言石写真（西より）	前川撮影 6
図版6 遺跡周辺関連遺構(2)	
1 神内石造仏写真（北より）	宇野撮影 6
2 宝篋印塔残欠写真（北より）	宇野撮影 6
図版7 遺跡周辺関連遺構(3)	
1 玉殿窟全景写真（東より）	宇野撮影 32
2 虚空蔵窟全景写真（東より）	宇野撮影 32
図版8 室堂建物内	
1 北室建物内写真（東北より）	真陽社提供 12
2 南室建物内写真（南東より）	真陽社提供 12
図版9 第1次調査地区上面遺構	
1 北室全景写真（東より）	前川撮影 13
2 北室完掘写真（東より）	前川撮影 14
図版10 第1次調査地区上層断面・下層遺構	
1 土層断面写真（東より）	前川撮影 13
2 下層遺構基礎石写真（東より）	前川撮影 14

# 目 次

	頁
第1章 調査の概要 .....	三鍋秀典 ..... 1
1 調査の目的 .....	1
2 調査に至る経緯 .....	1
第2章 芦崎寺室堂の歴史的環境と立地 .....	大野淳也 ..... 3
1 歴史的環境 .....	3
2 遺跡の立地 .....	10
第3章 芦崎寺室堂発掘調査及び玉殿窟・虚空蔵窟測量調査の成果 大野淳也・大平愛子・尾野寺克実・河合忍・佐藤聖子・ 武田昌明・中田書矢・野中由希子・福海貴子・松原和也 .....	12
1 調査前の知見 .....	12
2 北室と周辺の発掘調査 .....	12
(a) 調査の方法 .....	12
(b) 遺構 .....	13
(c) 遺物 .....	15
3 南室と周辺の発掘調査 .....	17
(a) 調査の方法 .....	17
(b) 遺構 .....	17
(c) 遺物 .....	19
4 玉殿窟・虚空蔵窟測量調査 .....	32
(a) 測量の方法 .....	32
(b) 測量調査の成果 .....	33
第4章 考 察 .....	35
1 遺物 .....	中田書矢 ..... 35
2 遺構 .....	大野淳也 ..... 44
3 立山信仰の時期区分 .....	大野淳也 ..... 48
4 結語 .....	宇野隆夫・前川要・三鍋秀典 ..... 50
付 章 自然科学的調査の成果 .....	55

参考文献	56
ENGLISH SUMMARY	58

## 図版目次

	関連頁
卷首図版 立山雄山全景写真	3
図版1 調査地域航空写真	12
図版2 周辺遺跡位置図	大野製図 3
図版3 芦嶋寺室堂全景	
1 室堂全景写真（南西より）	真陽社提供 12
2 室堂北室写真（北東より）	真陽社提供 12
図版4 調査区周辺の地形と発掘区位置図	福海製図 12
図版5 遺跡周辺関連遺構(1)	
1 立山雄山遠景写真（西より）	前川撮影 5
2 真言石写真（西より）	前川撮影 6
図版6 遺跡周辺関連遺構(2)	
1 祇内石造仏写真（北より）	宇野撮影 6
2 宝筐印塔残欠写真（北より）	宇野撮影 6
図版7 遺跡周辺関連遺構(3)	
1 玉殿窟全景写真（東より）	宇野撮影 32
2 虚空藏窟全景写真（東より）	宇野撮影 32
図版8 室堂建物内	
1 北室建物内写真（東北より）	真陽社提供 12
2 南室建物内写真（南東より）	真陽社提供 12
図版9 第1次調査地区上面遺構	
1 北室全景写真（東より）	前川撮影 13
2 北室完掘写真（東より）	前川撮影 14
図版10 第1次調査地区土層断面・下層遺構	
1 土層断面写真（東より）	前川撮影 13
2 下層遺構礎石写真（東より）	前川撮影 14

図版11 第1次調査地区石垣・上間	
1 石垣裏込完掘写真（東より）	前川撮影 14
2 上間完掘写真（東より）	前川撮影 13
図版12 第1次調査地区礎石	
1 礎石掘形半掘写真（東より）	前川撮影 13
2 礎石掘形全掘写真（東より）	前川撮影 13
図版13 第2次調査地区遺構	
1 南室全景写真（東より）	宇野撮影 17
2 南室礎石掘形写真（東より）	宇野撮影 18
図版14 第2次調査地区石垣(1)	
1 調査前写真（東北より）	宇野撮影 18
2 茶褐色粘質土除去後写真（西より）	宇野撮影 18
図版15 第2次調査地区石垣(2)	
1 土層断面写真（東より）	宇野撮影 18
2 石垣裏込完掘写真（西より）	宇野撮影 18
図版16 第2次調査地区石垣(3)	
1 石垣裏込写真（南より）	宇野撮影 18
2 石垣裏込土層断面写真（南より）	宇野撮影 18
図版17 第2次調査地区東トレンチ	
1 木桶検出写真（北東より）	宇野撮影 21
2 土坑1（SK1）検出上面写真（北東より）	宇野撮影 20
図版18 遺構(1)	
1 北室・南室遺構平面図・土層断面図	中田製図 12
図版19 遺構(2)	
1 南室掘形全掘平面図	武田製図 17
図版20 遺構(3)	
1 北室礎石建物掘形土層断面図	中田製図 14
図版21 遺構(4)	
1 南室礎石建物掘形南北土層断面図	尾野寺製図 18
図版22 遺構(5)	
1 南室礎石掘形東西土層断面図	尾野寺製図 18
図版23 遺構(6)	
1 北室下層遺構平面図	松原製図 14

図版24 遺構(7)

- 1 南室炉跡平面図・エレベーション図 ..... 中田製図 ..... 18

図版25 遺構(8)

- 1 第2次調査石垣トレンチ北壁土層断面図 ..... 松原製図 ..... 18

- 2 第2次調査石垣トレンチ上層断面図 ..... 松原製図 ..... 18

- 3 第1次調査石垣トレンチ土層断面図 ..... 松原製図 ..... 14

図版26 遺構(9)

- 1 東トレンチ遺構平面図・土層断面図 ..... 尾野寺製図 ..... 18

図版27 遺構(10)

- 1 西トレンチ北壁土層断面図 ..... 大平製図 ..... 18

- 2 南トレンチ東壁土層断面図 ..... 大平製図 ..... 18

- 3 北トレンチ東壁土層断面図 ..... 大平製図 ..... 18

図版28 遺跡周辺関連遺構(4)

- 1 玉殿窟平面図・エレベーション図 ..... 野中製図 ..... 33

図版29 遺跡周辺関連遺構(5)

- 1 虚空蔵窟平面図・エレベーション図 ..... 野中製図 ..... 33

図版30 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(1) ..... 大野製図 ..... 15

図版31 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(2) ..... 大平・尾野寺製図 ..... 19

図版32 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(3) ..... 佐藤製図 ..... 21

図版33 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(4) ..... 武田製図 ..... 25

図版34 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(5) ..... 河合・福海製図 ..... 28

図版35 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(6) ..... 中田・松原製図 ..... 30

図版36 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(7) ..... 中田製図 ..... 21

図版37 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(1) ..... 三鍋撮影 ..... 15

図版38 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(2) ..... 三鍋撮影 ..... 15

図版39 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(3) ..... 三鍋撮影 ..... 19

図版40 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(4) ..... 三鍋撮影 ..... 19

図版41 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(5) ..... 三鍋撮影 ..... 21

図版42 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(6) ..... 三鍋撮影 ..... 21

図版43 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(7) ..... 三鍋撮影 ..... 25

図版44 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(8) ..... 三鍋撮影 ..... 25

図版45 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(9) ..... 三鍋撮影 ..... 25

図版46 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物写真(10) ..... 三鍋撮影 ..... 28

図版47	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(1)	三鍋撮影	28
図版48	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(2)	三鍋撮影	30
図版49	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(3)	三鍋撮影	30
図版50	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(4)	三鍋撮影	30
図版51	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(5)	三鍋撮影	30
図版52	芦嶺寺室堂遺跡出土遺物写真(6)	三鍋撮影	32

## 挿図目次

第1図	1991・1992年度調査参加者写真		11
第2図	室堂遺跡出土土師器皿の成形技法（個体数）	中田作成	39
第3図	煤付着土師器皿の比率（個体数）	中田作成	39
第4図	石垣層位毎の近世土師器の分類別比率（個体数）	中田作成	39
第5図	造構・層位別の土器構成比（個体数）	中田作成	40
第6図	室堂遺跡の時期別遺物出土量（破片数）	中田作成	40
第7図	室堂遺跡の時期別遺物出土量（個体数）	中田作成	40
第8図	立山曼陀羅（玉林坊本写真）		47
第9図	立山曼陀羅（玉林坊本部分拡大写真）		47

## 表目次

第1表	室堂遺跡出土食器の種類器種別組成表（12世紀～15世紀）	中田作成	36
第2表	室堂遺跡出土食器の種類用途別組成表（12世紀～15世紀）	中田作成	36
第3表	室堂遺跡出土食器の種類器種別組成表（17世紀～19世紀）	中山作成	37
第4表	室堂遺跡出土食器の用途別組成表（17世紀～19世紀）	中田作成	38

# 第1章 調査の概要

## 1 調査の目的

富山県の東に屹立する立山は、日本三霊山の一つとされ、古来より人々の信仰の対象とされてきた。縁起によれば、大宝元年（701年）慈興上人により開かれたと伝えられているが、山岳修験が盛んになった9世紀中頃から10世紀初頭にかけて開山されたものと考えられている。しかし開山以前の奈良～平安時代にも山中修行者のいたことが、御岳・大日岳から発見された錫杖頭などにより推測されており、開山の時期について考古学的にどこまで迫れるか、信仰の山としての始源を探りうるかが調査の目的の一つである。

中世には『伊呂波類集抄』や『今昔物語集』によって、立山山中に「阿弥陀淨土」「地獄」があると広く喧伝され、近世になると庶民による「立山禪定」の最盛期を迎える。

この「立山禪定」において、立山山中における唯一の宿泊施設が「室堂小屋」であり、当時の名称は地名と同じ「室堂」であった。現在のところ「室堂」に関する最古の文献は、『加賀藩史料』2に「元和3年（1617年）前藩主前田利長夫人正泉院が立山室堂を再興した」というもので、それ以前の「室堂」については一切不明である。この「室堂」創建時期とその内容を考古学的手法により解明し、併せて創建以前の宿泊施設との比較検討を行うことによって、立山における山岳信仰の形態的変遷を明らかにすることが、今回の発掘調査の主目的である。

## 2 調査に至る経緯

「室堂小屋」は、現存する日本最古の山岳宿泊施設で、立山における信仰・民俗の旧態を探るためにも、きわめて貴重な建造物と言える。しかし、標高2,500mという風雨厳しく冬季には10mもの豪雪地帯という環境下にあり、くわえて老朽化の進行もあって、近年になって倒壊を心配されていた。このような声を受けて、平成4年度より「室堂小屋」の解体修理が実施された。

この解体修理実施に伴い、これを契機として「室堂」の歴史的変遷を探る資料を得るために発掘調査を実施することとなった。

調査の実施に当たっては、「芦嶋寺室堂遺跡調査指導委員会」を結成し、平成4年8月20日に室堂の現地において、調査の目的・方法等について検討を行っていただき、その指導のもとに調査を実施した。

## 芦嶋寺室堂遺跡

### 芦嶋寺室堂遺跡調査指導委員会

委員長　湊　晨　富山県文化財審議委員、富山考古学会会長  
委員　桃野　真見　富山県埋蔵文化財センター所長  
　　宇野　隆夫　富山大学人文学部教授  
　　安田　良栄　立山町文化財保護審議委員

発掘調査は、平成4年(1992)8月24日から同年9月2日までと、平成5年(1993)8月20日から同年8月30までの2回に分けて実施した。

平成4年度には南北2棟間の土間、平成5年度には南室と西側石垣下及び建物敷地南側の広場を調査した。なお、敷地南側の広場を調査範囲に含めた理由は、「立山曼荼羅」において「室堂」は常に3棟として描かれていること、『岩崎寺文書』の文政9年(1826)3月の条に「一室堂三つ、内也つ中絶」とあることなどから、「室堂」はかつて3棟あったと考えられるが、現在は2棟しかないため、あと1棟の所在が問題となり、敷地南側の広場が最も可能性が高かったためである。

### 調査組織

調査員　宇野　隆夫　富山大学人文学部教授  
　　前川　要　富山大学人文学部助教授  
　　三鍋　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事  
調査補助員　亀井　聰、高橋　浩二、鈴木　和子(富山大学人文学部大学院考古学専攻)  
発掘作業員　野村　祐一、河合　君近、片岡　英子、角田　隆志、浜木さおり、  
　　宮沢　京子、森田知香子、大知　正枝、大野　淳也、小野木　学、  
　　海道　順子、柳原　滋高、島崎　久恵、中村　大介、野川　裕二、  
　　長谷川幸志、松田　留美、松山　温代、宮田　明、柳沼　弥生、  
　　大平　愛子、尾野寺克実、河合　忍、佐藤　雅子、武田　昌明、  
　　松原　和也、鶴松　晋、中田　青矢、野中由希子、福海　貴子  
(富山大学人文学部考古学専攻)  
事務局　聞上　寛　立山町教育委員会社会教育課課長  
　　佐伯　外宣　立山町教育委員会社会教育課庶務・文化振興係長  
　　松井　君子　立山町教育委員会社会教育課主任(平成4年度)  
　　黒田　愛子　立山町教育委員会社会教育課主任(平成5年度)  
　　三鍋　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

## 第2章 芦嶋寺室堂遺跡の歴史的環境と立地

### 1 歴史的環境

#### (a) 立山信仰略史

越中の立山は、駿河の富士山、加賀の白山と共に「日本の三靈山」の一つに数えられる山岳宗教の山である。その信仰が、その当初「神の宿る山」としてその麓、または平野部から崇める「遙拝信仰」の形態をとっていたことが『万葉集』に収録された大伴家持の「たち山の賦」あるいは民俗学による靈山の研究から推定されている。その「遙拝信仰」に仏教的な要素や道教の思想が加わって、実際に山に入って修行する「登拝信仰」が行われるようになったのは、大日岳や剣岳から発見された錫杖頭などによって、8世紀後半～9世紀初めのことと考えられる。

立山の開山については様々な縁起書が伝えられているが、資料によって登頂者や開峰年代に相違がある。しかしその多くのものは、文武天皇の大宝元年（701）の頃に、佐伯有若（あるいは有賴）という者がおり、その人が開山したとしている。佐伯有若という人物は『隨心院文書』のなかの「佐伯院付属状」に越中守從五位下佐伯宿祢有若という署名をのこしており、延喜五年（905）のころ実在した人物であることが判明している。

また『師資相承次第』という文献には昌泰二年（899）に七十二歳で入滅した天台宗寺門派の祖、康済律師の業績として「越中立山建立」という記述がある。この「立山建立」が堂社の建立を指すものか、信仰の確立を指すものは明らかではないが、佐伯有若と康済という二人の人物が実在した時代9世紀末～10世紀初頭の頃に何らかの宗教的変革による「開山」があったものであろう。

平安時代の中期以降、浄土思想のひろがりと共に、立山の地獄谷の存在が立山地獄として中央でも広く知られるようになっていったことを、『本朝法華駿記』や『今昔物語』の説話によって知ることができる。また、この地獄の世界の対立者として、立山が浄土の山であるという想定がなされるようになったと考えられている。

中世になると、立山信仰を支える宗教組織としての芦嶋寺・岩嶋寺衆徒が、かなりの勢力を有していたことが文献資料によって知られる。正平八年（1353）の桃井直信の合力催促状を始めとして、椎名氏、神保氏などが芦嶋寺に援助を求めたり、年貢錢の免除を約束したことを記す文書が残っている。また、至徳元年（1384）の『京都鹿王院文書』には、北朝宮が宣旨を下して山城の鹿王院に、井波荘立山寺領内寺田岩嶋の諸役などを免除した下文を載せている。

近世には、芦崎・岩崎は加賀前田家の庇護のもと、より一層の繁栄をみせるようになる。前田家は、岩崎の立山寺・芦崎の仲宮寺を歴代の祈願所として、多くの寄進を行なった。これらによって、立山山中の草社や山麓寺院の整備が進み、また芦崎・岩崎の衆徒による布教活動もあって、立山信仰は全国各地に広がっていった。

こうして隆盛を極めた立山信仰であったが、明治維新の廃仏毀釈・宗教改革によって、従来の信仰を否定され、芦崎寺では鐘堂をはじめ帝釈堂、布橋などの建物が破却された。また、加賀藩から寄進されていた神供米も家禄も廢止されることとなり、仏教的色彩を除去された岡崎は、雄山神社と改称して神道を前面に出して生き延びることになった。こうして立山は、信仰の山から観光の山へと変わっていたのである。

#### (b) 信仰関係遺構・遺物（図版2）

**劍岳山頂遺跡**：標高2998mの剣岳山頂部に所在する遺跡である。1907年に銅製錫杖頭と刀子が発見されている。錫杖頭は鍛銅製であり、長さが13.4cm、心葉形の外輪に6個の金剛杵がつき、外輪とは逆方向の心葉形をなす内輪の中心に宝瓶形をつける。また、内輪の二つの頂点には宝珠形をつける。その形態からみて8世紀代の製作と推定される（大和久1990）。また、次に記す大日岳出土錫杖頭の年代ともあわせて、8世紀後半～9世紀初めの頃にこの遺跡が形成されたとみるのが妥当であろう。また、遺物が発見された地点から、やや離れた場所に岩窟があり、そこからは木炭が発見されている。遺物とも合わせ、修行が行われた場であると考えられる。1909年にも、刀子と小仏像が発見されたというが、その出土地点、現在の所在は共に不明である（廣瀬1984）。

**大日岳山中の遺跡**：大日岳は大日岳(2498m)・中大日岳(2500m)・奥大日岳(2605.9m)の三山からなり、立山山脈から西へ突出した支脈を形成している。大日岳は尾根伝いの立山入峰道の途中にあたり、その広い山中からはいくつかの遺物が発見されている。

1893年に発見された銅製錫杖頭は、奥大日岳の東麓にある俗称「行者窟」という岩窟から出土したといわれているが、詳細は明らかではない。この錫杖頭は鍛銅製であり、長さが17cm、丸みを帯びた心葉形の外輪に4個の爪をつけ、輪頂には蓮華坐宝瓶をとする。輪内の紫手は竜頭形をなし、その頭上には宝珠形をつける。柄の先端には蓮華台宝瓶がつき、柄の下部には竹の節状の繋縛を刻む。これに類似したものに栃木県輪王寺蔵の楳首飾錫杖頭があり、その年代は8世紀末に比定されている（大和久1989）。このことから、大日岳の錫杖頭は8世紀末ないしは9世紀初めの作と考えられる。この錫杖頭が行者窟から発見されたとするならば、行者窟は奈良末・平安初期の頃からの龍山修業の場であったと推察できる。なお、この窟は1961年に発掘調査され、少量の須恵器・土簡器が発見されたとあるが、その遺物の詳細、現在の所在は不明である。

さらに、中大日岳の東稜線に七福園と呼ばれる場所があり、ここにある俗称「七福園岩

「屋」という岩窟からは、1934年に修業者が岩場に使用したと思われる鎧や刀子が、1961年には平安期の須恵器破片などが発見されている。なお、1961年発見の遺物はその詳細・所在が不明である。

また、大日岳の山頂にある大日社堂跡からは、1934年に青磁の底部破片が発見されたが、これもその詳細・現在の所在は不明である。

**玉殿窟・虚空藏窟遺跡**：室堂平の東端、立山三山の一峰淨土山の裾にあたるところにある二つの岩窟遺跡である。この二つの岩窟のうち、玉殿窟は、「立山開山の祖といわれる佐伯有若（あるいはその子・有頼）が、立山の神が阿弥陀如来であると感得した」という伝説の舞台として、立山信仰の聖地の一つに数えられていた。また、室堂に宿泊施設が設置される以前には、越中一箇国の大日堂が玉殿窟に、他国の登拝者は虚空藏窟に宿泊したという伝承が残っている。

両窟は、1962年に発掘調査が行なわれ、少量の土器、古銭（治平元宝・至和元宝の北宋銭や寛永通宝）等が出土したことが報告されているほか（富山県教育委員会1971）、明治初年に両窟から発見されたと伝えられる懸仏の破片や鉄仏、和鏡の破片などが芦崎寺や岩峰寺の雄山神社に分蔵されている。これらの遺物から、両窟は平安時代にはすでに登拝者たちによって使用されていたと推察されている。なお、現在両窟内には、近世期に奉納された石仏が立ち並んでいる。

**雄山の遺跡**：立山信仰において、主峰と仰がれた雄山に対する独立した登拝信仰が、いつの頃から始まったのかは、現在のところ明らかではない。しかし、その軌跡を辿ることができる遺物が、少量ながら発見されている。

室堂平から雄山頂上へ至る道筋の途中、一の越からの急斜面をしばらく登ったところに、斜面が緩やかになった場所があり、三の越と呼ばれている。1992年に、この場所から寛永通宝、土器破片が採集されている（宮本1993）。土器破片は珠洲焼の経筒外容器の底部とみられ、12~13世紀のものと考えられる。これらの遺物から、三の越には中世初期の頃に経塚が築造され、その後も祠のようなものが建立されていた可能性があると考えられる。

雄山頂上には、雄山神社の峰本社がある。この社の創建は明らかではないが、1928年に、峰本社の棟木破損部から、大永四年（1524）在銘の、金銅製法華經納札が発見されている。また寛永17年以降、数回にわたる本社の修築を『岩崎寺中道坊文書』が伝えていて現在の建物は万延元年（1860）四月二十六日の再建になる。頂上直下の地点からは、1992年に角釣、頭巻釣、かすがいが採集されているが（宮本1993）、これは万延元年以前の本社の、破棄された残欠であると考えられる。頂上付近からはこの他にも、鐵礫、寛永通宝とみられる古銭が採集されている（廣瀬1984）。

**大汝山頂廐祠遺跡**：雄山から北に連なる、立山連峰の最高峰・大汝山（3015m）の山頂

からも、角釘、奉納用模擬例、土器破片などが採集されている。これらの遺跡は、L字型に組まれた石垣や柱根などの遺構に伴って散布しており、周辺には祠の残欠とみられる木材の破片が散乱していたと報告されている。また、その状況から祠は複数あったものとみられ、それらが大汝山本来の祠（大汝神または白山観音を祠った祠）と雄山頂上社殿改築の際の仮遷座の祠であったことが推察されている（廣瀬1984）。

その他の山中発見の遺物：この他の山中発見遺物としてはミクリガ池・池の地蔵堂跡から、室町期の青銅製陀羅尼地蔵尊、東觀世音菩薩の懸仏が、地獄谷の伽羅陀山からは室町鏡などが出土していると報告されているが（『立山町史』1977），詳細は明らかではない。

室堂平・地獄谷とその周辺の石造仏：室堂平や地獄谷とその周辺には、かなりの数の石仏・石塔などが存在する。このうちの大多数は、江戸時代後期から明治にかけてのものであるが、13~14世紀にまで遡ることのできるものも少数ながら見られる。

室堂平の室堂遺跡近辺では、宝篋印塔の基礎三石、塔身二石、笠二石が集積した状態で発見されており、これを組合わせると、高さ50数cmになる。塔身には、地蔵菩薩の種子「イ」と見られる梵字が刻まれている。室町時代の作と推定されるが、この近辺は観光開発のために地形が改変されており、その元所在地は不明となっている（京田1977）。

室堂遺跡の近辺では更に、梵字を刻んだ名号碑と真言石が発見されている。名号碑は板碑状で、地表からの高さは130cm、幅は基部80cm、頂部は20cmの変三角形、厚さは基部10cm、頂部は20cm。裏はノミのあととの残る荒仕上げだが、表は平たく削られ。中央に「ナ・モ・ア・ミ・ダ・ブ」(na・mo・a・mi・dha・bun) の6つの梵字が薬研彫りされ、左わきに「奥州仙台観音寺快山法印筆」と小さく刻まれている（高木1980）。このことから、奥州からの寄進によって建てられた碑であると考えられるが、年記等がないため建立年代を求めることは難しい。

真言石は高さ140cm、幅150cmの巨大な自然石であり、中央に上から「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」(a・vi・ra・hum・kham) の5つの梵字が薬研彫りされている（図版2）。「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」は一般に「阿鞞羅吽欽」と書かれる胎藏界大日如來の真言であるが、大日經によると、「地・水・火・風・空」の五大（世の中のすべてのものを構成する要素）を表している。真言石のそばには立山信仰の聖地とされた玉殿窟へと向かう道が通じており、この石は参拝者の道標となっていたと考えられる。なお、この自然石に梵字が刻まれた年代については不明であるが、文字の風化状態、周辺に室町時代の石塔があることなどから中世期に遡ることが推察されている（高木1980）。

地獄谷からも宝篋印塔の基礎と笠が発見されている。基礎は幅24cm、高さは14cmで、側面に三茎蓮華文を浮彫する。笠は、幅24cm、高さは16.5cmであり四隅に三弧の隅飾がある。三茎蓮華文は13世紀半ばに近江で発生した側面飾りであり、近江との関係が推察されてお

り、14世紀前半まで遡る遺物であると考えられている（京田1977）。なお、この宝篋印塔は現在、伽羅陀山山頂の小堂に保管されている。

伽羅陀山山頂には、もう一基、基礎・塔身・笠の揃った宝篋印塔がある。笠上端までの高さは77.5cm、幅は基礎33cm、塔身20cm、笠34cmであり、塔上積式の基礎は、地覆部・羽目束部・葛と段型の三石から、笠も二石から成っている。このような組合せ式は、運搬の便をよくするためと考えられ、立山独特のものである（京田1977）。また、この塔は15世紀ごろのものと推察されている。

この他の古い石造物としては、伽羅陀山の青石地蔵があげられる。この石仏は、関東地方の板碑によくみられる石材である青石を用いた一石一尊形式の立像であり、遅くとも14世紀の成立と考えられる（京田1977）。

**旧登山道沿いの石造物**：岩崎寺から雄山に向かう旧登山道沿いには、五輪塔・宝篋印塔・地蔵や観音菩薩の石仏等が供養や登拝者のための道標として安置されている。このうち、岩崎寺から室堂までのあいだに「西岡三十三番札所觀世音菩薩靈場」の分靈場としておかれた石仏は、文化年間（1804～1817）に全国の立山信徒の寄進によって完成されたものであることが、その銘文から読み取られる。また、この觀世音石仏のうちほとんどのものには「於尾州城内志」または「尾州城内御女中志」などの文字が彫刻されていることから、この石仏設置計画を熱心に支持し、財源を寄せて実現させた中心は、全国でも立山信仰が盛んだったことで知られる尾州藩だったと考えられる（京田1977）。

**常願寺川南岸の遺跡・遺物**：現在、大山町に属する、常願寺川南岸沿いの地域にも立山信仰に關係すると思われる遺跡・遺物が存在する。鎌倉時代に編纂された『伊呂波宇類抄』（10巻本）には、立山の開山時、常願寺川を挟んだ北と南に三所ずつ（北三所は芦崎寺根本中宮・上戸山禪光寺・岩崎寺、南三所は本宮・光明山・報恩寺）、六寺院が建立されたことが記されているが、そのうちの南三所がこの地域に存在したものと推定されている。

本宮と光明山が所在したと推定されている、原村から本宮村にかけてとその周辺の地域からは、1960年に幾つかの礎石群と、室町時代末期のものと考えられる「即庵」と刻した角錐形板碑、それと同期のものと考えられる、梵字（大日如来）を示す板碑が発見されている。また、「本宮」という堂社が実在したことを示すものの一つに、「立山本宮」と針書の銘のある六器一口があげられている（山元1990）。この六器は二口出土したらしいが、現在は一口が残るのみである。また、1960年には説法ヶ原より銅製の仏納碗が発見されているが、その所在は現在不明である。現在の本宮村には立藏神社があって、いくつかの木彫神像がみられるが、そのうちには鎌倉期と推定されるものが一体、南北朝に近い作と推定されているものが一体ある。

報恩寺が所在したと推定されている文殊寺の地域（石原1964）には、現在、武部神社と

## 芦崎守室堂遺跡

金城寺宝寿院（真言宗）がある。武部神社には、平安時代藤原期のものと考えられている女神像が伝わっており、宝寿院からは、岩崎立山寺のものと考えられる応仁元年（1467）銘の棟札が発見されている。

**芦崎寺集落の遺物：**芦崎寺集落は、北三所のうちの根本仲宮のあった場所であり、その寺名は江戸時代に芦崎寺と呼ばれるようになった。芦崎寺は明治の神仏分離・廢仏毀釈のために、多くの堂社を破却され、現在は雄山神社祈願殿として、その一部を残すのみとなっている。しかし、立山信仰の拠点として栄えたこの集落には、その往時を偲ぶ遺物が、僅かながら残されている。

芦崎寺の衆徒の間には「長官香炉」と呼ばれる青磁香炉が伝わっており、衆徒の最高職とされる長官職を継いだ者が、それを所持する習わしであったという。この香炉は、口径21.1cm、器高14.1cmの、俗に祐青磁と呼ばれる中国の南宋龍泉窓系の青磁で、その形式は一重口、三足、口縁部外面に二条、底部付近に一条の沈線をめぐらし、胴部には牡丹唐草文の浮き彫りを施している。室町幕府足利將軍からの寄進と伝えられるが、詳細は不明である。

天文16年（1547）の銘をもつ黄銅製仏龕鉢三個もまた、伝世品として残っている。蓋付で、蓋は口径18.0cm、高さ5.5cm、身は体径18.9cm、高さ10.3cmである。蓋には二条の同心円が刻まれ、その円内には、「寺崎孫兵衛尉職恵」と陰刻されている。また、身の外面には「葦崎 御本尊 為現当二世 悉地成就也 護持施主 一光道本禪定門 天文十六丁未 歲三月八日」と刻まれている。なお蓋には寄進者である職恵の名を挟んだ右と左に、「葦崎鑄」、「御本尊」の二行の陰刻があつたらしいが、現在は辛うじて判読できるのみである。これらの銘文から、この仏龕鉢は天文16年に、寺崎職恵が一光道本禪定門の追善または逆修のために、芦崎中宮寺の本堂とされる傭堂の本尊に寄進したものであることが知られる。

花蝶雀文鏡は、現在、雄山神社祈願殿に保管されているが、もとは明治の初めに、祈願殿の奥にある大宮の社殿裏の窟から発見されたものと伝えられる。これは、直径20cm、厚さ7mmの青銅製の和鏡で、奉納鏡として神前に奉掲されていたことを示すものであろう釘穴が一つ、隅の部分に開けられている。鋳形の崩れが無いことなどから、13世紀頃のものと考えられている（富山県教育委員会1971）。

木像も數体残されている。まずは、祈願殿の開山堂に安置されていた慈惠上人坐像であるが、これは立山を開山したと伝えられる佐伯宿祢有若（あるいはその子有頼）が出家した姿であるといわれる、杉材寄木造りの像で、丈は87.5cmを測る。鎌倉初期の頃の作と考えられるが（富山県教育委員会1971）、銘文等が無いため明確ではない。闇魔堂と呼ばれる小堂には、廢仏毀釈による破壊・散逸を免れたその他の木造の仏像群が安置されている。そのなかには、平安中期頃のものかと考えられる不動明王の頭部も有るが（立山町1977）、

多くは南北町期のものか、江戸期のものである。閻魔堂の木造仏のうち、婬尊坐像五軀は、  
鐘堂と呼ばれる堂舎に安置されていたものである。鐘堂は、芦崎寺集落のはずれの、鐘堂川  
という小さな川の対岸にあったが、明治の魔仏毀釈の際、仏教的施設の中心とみなされ  
破却された。鐘堂川は三途の川とされ、魔仏毀釈以前には、布橋と呼ばれる橋を渡って鐘  
堂に至り、そこに籠って修業する「布橋大漁頭」という女人救済のための儀式が行われて  
いた。鐘堂内には、中央に本尊としての三婬尊がまつられ、そのまわりには六十六体の婬  
尊像が安置されていたというが、現在残るのは、五軀のみである。そのうちの一軀には、  
永和元年（1375）の墨書銘があり、婬尊信仰の実年代を知る好資料となっている。閻魔堂  
内には、この他に閻魔王坐像（南北町期）などが安置されている。

**岩崎寺の遺物：**岩崎寺は、北三所のうちの立山寺があった場所である（なお、北三所の  
うちの上戸山禪光寺については、千頃の地にあったとする説などがあるが、明確には  
なっていない）。立山寺は、江戸時代に岩崎寺と改称し、現在は雄山神社前立社壇と称する。  
岩崎寺の前立社壇には、室町期の様式を残す重要文化財の本殿を除くと、玉殿窟出土と伝  
えられる懸仏の破片（鎌倉～室町期）などの極く少量の遺物しか残されていない。しかし  
ながら、1940年に、前立社壇の境内から大量の人骨及び骸骨器と考えられる素焼甕・陶製  
甕が出土したことは、高野山等の靈山にみられる納骨信仰が、立山にも及んでいたことの  
一つの現れとみられる（富山県教育委員会1971）、立山に於ける信仰形態を考える上で重要  
な事例であると思われる（この際に出土した遺物は出土後すぐに他の場所に改葬され、そ  
の年代等を明らかにするものは現在残されてない）。

また、前立社壇の近辺、大山町上流にある曹洞宗大川寺には、薬師岳信仰に関係したと  
される遺物（薬師如来像、木製漆塗瓶子、「兜權現」と呼ばれる懸仏、等）が伝えられて  
いる。これらは元々、薬師岳山麓の有峰村に所蔵されていたが、1919年、ダム建設のため  
に村が解散する際に、大川寺にその保管が委託されたといわれるものであり、その多くは  
室町時代の作と推察されている（富山県教育委員会1971）。

**その他の山麓の遺跡・遺物：**上市町大岩にある日石寺磨崖仏と京ヶ峰経塚もまた、立山  
信仰に関係するものと考えられている。日石寺磨崖仏は、大岩の山腹に露出する巨岩の一  
面に刻まれた不動明王坐像、翁羯羅童子立像、制吒迦童子立像、阿弥陀如来像、僧形坐像の  
計5軀からなる仏像群であり、現在、磨崖仏を中心として、大岩山日石寺という真言宗  
の寺院が形成されていることからこの名で呼ばれる。仏像群の主尊である不動明王坐像は、  
総高約3mの中肉彫像で、その彫刻様式などから11世紀～12世紀半ばに東密系の人々によ  
って作られたものであると考えられている（京田1976）。

日石寺裏山の京ヶ峰（経ヶ峰）山頂からは昭和29年に銅製經筒と和鏡（菊枝双雀文鏡）、  
經筒の外容器とその蓋として使用された珠洲焼の壺とすり鉢が出土し、経塚が築造されて

### 芦岐寺室堂遺跡

いたことが確認された。経筒の中からは巻物の軸木8本と紙の炭化したものが発見され、これによって『法華經』八巻が納められていたことが知られた。また、経筒の外面には「仁安二年丁亥八月十日甲辰」「願主相存」という銘文が刻まれており、仁安2年（1167）に相存という人物によって納経が行われたことが判明した。現在の上市町の方面から、上市川や大岩川を遡上して大岩山に至り、浅生・種・高峰山・大辻山を経て大日岳に達する行者道がかつて存在し、大岩の地がそのルート上に位置することや、(立山町1977)、経塚が修験と関係深いものであるという推察がなされている(石山1957)ことなどから、これらの磨崖仏や経塚をつくり出したのは立山信仰に関係した修業者達だったのではないかと考えられている。

## 2 遺跡の立地

芦岐寺室堂遺跡は、北アルプス立山連峰の一峰、浄土山の麓にひろがる室堂平と呼ばれる溶岩台地の東端、標高約2450mの地点に立地する。東には浄土沢カール（園谷）を挟んで、立山連峰の主峰・雄山（3003m）から大汝山（3015m）、富士ノ折立（2999m）と続く山並が間近に望まれ、南には浄土山、北には劍御前、と三方を高山に囲まれた地形であり、西には立山火山の水蒸気爆発による爆裂火口といわれるミクリガ池や地獄谷がある。

室堂平は、平野部からみると、美女平から下ノ子平、上ノ子平、弥陀ヶ原、天狗平と階段状に続く溶岩台地の最奥部に位置し、雄山を目指す登山者にとっては最後の大きな平坦地となっている。この室堂平の東端、浄土沢の断崖上に本遺跡が形成された背景には、雄山に対する遙拝の場として、また、浄土沢の雪渓から飲料水が得られることから、登山基地として、この地が最適であるという意識があったものと考えられる。 (大野淳也)



第1図 調査参加者写真（上、1991年度、下、1992年度、西から）

## 第3章 芦嶺寺室堂遺跡発掘調査及び玉殿窟・虚空藏窟測量調査の成果

### 1 調査前の知見（図版3・8）

富山県芦嶺寺室堂は、江戸時代の修験道に関連する山小屋として富山県の文化財として指定されている。文化財としては、日本最高所に位置し他の地域の建築に見られない構造を持つ。富山県内の青少年にとって、立山登山は通過儀礼の一つになっており、多くの県民が室堂を利用していた。1986年に、隣接地で「室堂山荘」が建設され、室堂は使われなくなった。川上賀氏と後藤玉樹氏が詳細に建築史学的検討を行なっている（川上1987、後藤1993）。

それによると、室堂は南室と北室の2棟を南北に長く配置し、ともに切り妻造り、桁行き5間、梁行き4間の礎石総柱建てであり、妻部分を向い合せて立つ。両棟の間は、約2.4mの間隔をあけて妻部分を合せている。その部分は、近代には入口になっており、東半分は土間である。柱位置は、桁行き・梁行きとも心心六尺の等間隔であり、建物内にも等間隔で割り付けられている。梁行きの中心線の柱が全て棟木を受けている。明治9年払い下げ願い書きに付載された平面図によると、当時は北室と南室の入口は、それぞれ東通りの北から3つ目、2つ目を使用しており、炉跡は北室では2箇所に設けられ、南室では屋内東西隅の桁行き3間、梁行き2間を間仕切りで仕切り、その内側南端に1箇所、間仕切り外に1箇所存在したことが示されている。

建物の北、東、西を取り巻く形で南北方向に長さ約40m、高さ約2.5m程度の石垣が造られており、建物に沿って直角に屈曲している。室堂の立地は、風雪に耐えるため淨土沢の断崖の隆起した端部を大きく掘削しており、その内側に石垣を積み上げている。

これ以外の詳細については、今年度立山町教育委員会によって発行される解体修理報告書を参照して頂きたい。

### 2 北室と周辺の発掘調査

#### （a）調査の方法

以上の調査前の知見にもとづき、立山関係の古文書や立山曼陀羅に描かれる室堂の実態と変遷を確認するための資料を得ることを主な目的として調査を実施した。

測量原点Oは、標高2445.602mを示す北室東側のベンチマーク杭上に設置し、北室と南室主軸に沿って東西をX軸、南北をY軸とした。測量原点Oから北東方向を第1象限、北

西方向を第2象限、南西方向を第3象限、南東方向を第4象限として、北方向、東方向に正値を示す形でグリッドを設定した（図版4）。そして、20m間隔で杭を設置した。

以上の測量原点間の水平距離を光波測距儀を使用して計測し、これを基準として縮尺百分の一、等高線25cm間隔の平板測量図を作成した。

発掘調査区は、グリッド軸に沿った形で、北室および南に隣接する土間状遺構、北室と東石垣の間に設定して、下面造構が想定された場合は、必要な部分のみ試掘坑を設定して調査した。石垣の調査は、Y=-4ライン上で南に1m幅で東西約2mの試掘坑を設定した。

なお、北室の主軸は、磁北から26度30分東へ振る。

#### (b) 遺構

**基本層序**（図版10の1・図版18）：グリッドX=-8.3、Y=-4に沿って十字に層位観察用吐を設定し、Y=-4にそって南から観察した。上から、第1層黒褐色土、第2層赤茶褐色土、第3層明黄茶褐色土、第4層地山である。第1層の黒褐色土が遺物検出面である。大きくみて、後述する遺物から、第1層=表土層、第2層=近世、第3層=それ以前と位置付けできる。

（河合 忍）

**礎石建物**（図版9・18）：礎石は全て残存していた。礎石は概ね東西南北方向に建物を沿わせている。建物規模は桁行き五間梁行き四間の平面長方形である。初期段階では中央の二間×三間に建物があり、後に四間×五間の純柱建物に拡張している。それぞれの礎石の呼称を以下のように行なう。北室最北端東西通りをイ、一本由の通りをロとし、最東端南北通りを1、さらに一本西を2とした。例えば、北東隅の礎石はイ1とする。

初期の建物の礎石のうちロ4、ニ二、ホ三、ホ四是灰がつまつた状態で検出され、地鎮祭祀と考えられる。そして、それを切って礎石が据えられている。ニ三は建物の重みによって礎石が破損している。礎石は一辺100cmから40cm前後の小型のものまで多様であるが、外周の通りのものは、掘形も小さく、礎石の規模も小さい。長方形や三角形に近い形状のものなど様々であるが、比較的長方形のものが多く見受けられる。礎石の下に10cm大の根石を敷くものが多い。外周の通りのものは、根石の入れかたがあまり丁寧ではない。一間の幅は約184cmであり、6尺と想定する。土層からすると北室中央部分はもともと平坦であったが東西両端は地形的に下がっており、そこに土盛りをして全体を平坦化している。礎石イー、イ二、ハ一の間に浅い溝状遺構を検出したが、遺物は出土しなかった。地震の噴砂の可能性がある。

（武田昌明）

**土間状遺構**（図版11の2・18）：南室と北室の間に位置する土間状遺構である。石列により四方を囲み、その方位は両礎石建物の方位に概ね一致する。東西4.7m、南北2mの平面長方形を呈する。石列に用いた石は10cm～20cm大の大きさであり、形は多様である。土間面において遺構内に南北方向の浅い溝状遺構を検出した、検出長2.56m、幅は0.12m

をはかる。

土間の深さは15cm前後であり、層位は11層にわかれ、上から第1層黄茶褐色土、第2層炭混暗茶褐色土、第3層濃茶褐色土、第4層黄褐色土、第5層明黄褐色土、第6層暗黃褐色土、第7層暗茶褐色土、第8層炭混濃茶褐色土、第9層炭混明茶褐色土、第10層炭混黃褐色土、第11層明黃褐色土である。第9層及び第10層は溝の埋土である。第11層明黃褐色土は強く踏み固められており溝はこの第11層を掘り込んでいる。

同一面上で数箇所の不明のビットを検出した。ビットの規模は直径60cm前後のものが最大であり、小は10cmのものもある。

第5層～第7層が18世紀の、第11層が17世紀初頭の面と考えられる。出土遺物としては紐付の寛永通宝などがある。  
(中田書矢)

**北室下層礎石建物** (図版10の2・23)：上層の礎石を除去し、さらに下層の黄褐色土層内より礎石を検出した。個々の礎石は15cm前後～60cm程度であり、上層のものに比べかなり小さく偏差も大きい。建物は1間が約1.5m間隔であり、2間×2間の総柱のものが一棟配置されている。そのほか東側約2mの位置に平行する形であり、2間×1間あるいはそれ以上の建物が1棟想定できる。いずれの礎石建物も上層の建物以前のものと考えられる。年代は、15世紀末～16世紀初め頃である。

か跡が、建物の南東で検出された。西からみると、土層は4層に分離できる。第1層は黒褐色土、第2層は赤茶褐色土、第3層は明灰白色土、第4層は明黄茶褐色土であり、第3層が灰がたまつた地床炉の断面である。第4層を掘り込んでいる。  
(松原和也)

**北室堀形** (図版20)：イーは2層に分かれている。上層が炭混暗黒褐色土、下層が赤橙褐色土である。ローは断面西側の堀形を調査していないが、東側が2層に分かれている。上層が炭混暗灰色土、下層が赤橙褐色土である。ハーは、4層に分かれている。第1層が炭混暗黒褐色土、第2層が灰白色土、第3層が暗灰色土、第4層が灰黄褐色土である。二ーは上層が炭混暗黒褐色土、下層が明茶褐色土である。ホーは炭混暗黒褐色土のみである。ヘー、イ四はともに2層に分かれている。どちらとも上層は炭混暗黒褐色土であるが、ヘーの下層は明茶褐色土、イ四の下層は赤橙褐色土である。ロ四は暗黒茶褐色土である。ハ四も4層に分かれしており、上から炭混暗黒褐色土、暗黒茶褐色土、赤褐色土、明黄褐色土である。ニ四は2層に大別でき、上層が暗黒茶褐色土、下層が明黄褐色土であるが、埴方の西側には暗黒茶褐色土と明黄褐色土の間に上から炭混黒色土、灰黄色土が混入している。ホ四も2層に分かれ、上層は暗黒茶褐色土、下層は明黄褐色土である。

**北室西側石垣** (図版11の3)：層位は、上から表土である暗褐色土、淡茶褐色土、炭混暗褐色土、黄褐色土である。時代は、遺物から淡茶褐色土が18世紀、炭混暗褐色土が17世紀初頭、黄褐色土が13世紀初頭と比定できる。  
(佐藤聖子)

## (c) 遺 物

## 礎石壠形 (図版30の1~9)

**土師器皿** (1~12) : 1~12は手づくね成形の土師器皿である。口縁部に一段の撫で調整を施し、端部を尖らせる。体部外面下半に指押え痕が残る。2は口径約17cm・器厚約7mmをはかる大型品であり、口縁部に一段の撫で調整を施し外反させる。端部は撫で調整により尖らせる。3・7は口縁部に一段の撫で調整を施す。口径はそれぞれ約10cm・11cmである。4・5は器厚が厚く小型のものである。焼成はいずれも不良である。5は口縁部内面にタール状煤が付着しているため灯明皿として使われたと考えられる。口径は4は約8cm、5は約10cmである。6は口縁部をゆるく外反させるものであり、口径は約15cmである。

## 銅鏡 (8) : 8は洪武通宝であり、その初鋳年は1368年である。

**銅製品** (9) : 9は銅製の金具で詳細は不明であるが、白山比咩神社奥宮所蔵・御前峰採集銅製品の中に類似したものがある。

## ホ四灰堆積土壙 (図版30の10~15)

**土師器皿** (10~14) : 10~14は手づくね成形の土師器皿である。10は薄手のつくりで口縁部外面に指あて痕がある。口径は約11cmである。11~14は口縁部に一段撫で成形がみられるタイプである。口径はそれぞれ約11cm・10cmである。12は口縁部をゆるく外反させるタイプである。内外面に煤が付着がする。口径は約11cmである。13は口縁部の強い撫で調整のために端部が鋭くなっているものであり、口径は約11cmである。

**越中瀬戸** (15) : 15は越中瀬戸の花瓶の頸部破片である。内外面に鉄軸を施す。焼成は良好である。

## 明黄褐色土 (図版30の16)

**土師器皿** (16) : 16は手づくね成形の土師器であり口縁端部を少しつまみ上げている。口縁部に二段の撫で調整をほどこす。口径は約12cmである。

## 灰白色土 (図版30の17~20)

**銅鏡** (17~20) : 17~20は寛永通宝であり9枚が一括紐付きの状態で灰層から出土したが、ここではそのうち遺存状態の良いものを4枚図示した。

## 黄褐色土 (図版30の21)

**京焼系陶器** (21) : 21は京焼系陶器の碗である。内外面に灰釉を施す。口径は約8cmである。

## 炭混黒色土 (図版30の22~27)

**土師器皿** (22~26) : 22~26は手づくね成形の土師器皿である。22・23・26は口縁部に一段の撫で調整がみられ、口径はそれぞれ約10cm・11cm・14cmである。24・25は口縁部をゆるく外反させるものであり、24は端部において撫で調整により鋭くしあげる。25は端部撫で

## 芦辨寺室堂遺跡

調整により内面に面をとる。口径は約15cm・14cmである。

**越中瀬戸** (27) : 27は越中瀬戸の碗である。

**暗茶褐色土** (図版30の28~40)

**越中瀬戸** (28~31) : 28は越中瀬戸の灰釉皿である。釉調は淡緑色を呈し、見込み部から口縁部外面にかけて施す。口唇部を中心に釉の剥落が目立つ。底部は範削りによる平底であり、体部外面の露胎部には範削り痕が顕著に残る。口径は約10cmである。29は越中瀬戸の碗である。外面口縁部下に指頭圧痕をめぐらし、内外面に鉄釉を施している。口径は約11cmである。30は越中瀬戸の碗である。内外面に鉄釉を施している。口径は約9.5cmである。31は越中瀬戸すり鉢の体部破片である。内外面に鉄釉を施す。

**銅鏡** (32~40) : 32~40は寛永通宝であり、括紐付きの状態で出土したものである。

**黒褐色土** (図版30の41~49)

**越中瀬戸** (41~43) : 41は越中瀬戸碗の底部破片である。内外面に鉄釉を施す。釉調は黒色に近く、光沢がある。底部は削り出し高台である。42は無釉越中瀬戸皿の底部破片である。底面に回転糸切り裏を残す。43は越中瀬戸碗である。内面は一面に鉄釉を施しており、外面は底部露胎であり体部上半にピラ掛けにした鉄釉による紋様を施している。内面の釉調は黒色に近く、光沢がある。外面では黒色に部分的に茶色が混ざる。口径は約9.5cmである。

**鉄製品** (44・45) : 44・45は鉄製角釘である。44は頭部が残存しているが45は欠損している。

**焼印** (46~48) : 46~48は焼印である。いずれも印部が銅製であり持手部は鉄製である。46・47は「立山室堂」と読め、48は一部欠損しているが残存する部分から「剣山頂上」と読める。

**鉄鍋** (49) : 49は鉄鍋の口縁部破片である。直に立つ体部から口縁部が短く外反する。

**石垣内暗褐色土** (図版30の50~53)

**珠洲** (50) : 50は珠洲のすり鉢である。器壁が薄く口縁端部が外傾し、珠洲Ⅱ期に相当するものである。口径は約32cmである。

**越中瀬戸** (51) : 51は越中瀬戸の碗である。内外面に鉄釉を施し、釉調は黒色であり光沢がある。口径約9cmである。

**土師器皿** (52) : 52は上師器皿であり、薄手で口縁端部が鋭くとがるタイプのものである。口径約12cmである。

**その他** (図版30の53~55)

いずれも表面採集資料である。

**珠洲** (53) : 53は北室内で採集した珠洲すり鉢の体部破片である。

**懸仏頭部** (54) : 54は虚空蔵窟の入口付近で採集した懸仏の頭部破片である。鼻の部分を打ち出しによって表現しているほかは摩滅によって判然としない。

**土師器皿** (55) : 55は室堂から玉殿窟へ向る道の途中にある戸石の上(納骨遺跡)において、人骨と共に採集した土師器皿の口縁部破片である。口縁端部を丸くおさめるタイプのものであり口径は約11cmである。

(大野淳也)

### 3 南室と周辺の発掘調査

#### (a) 調査の方法(図版4)

第1次調査の知見にもとづき、南室の成立年代、南室以前の下層遺構、石垣の成立年代、北室・南室以外の建物遺構の存否を確認するための資料を得ることを主な目的とした。

第1次調査で設定した軸を南に延長する形でグリッド設定した。

発掘調査区は、グリッド軸に沿った形で、南室に設定して、北室・南室以外の場所に建物の有無を確認するために、東、西、南、北と南端の試掘坑を設定して調査した。さらに下層遺構の有無を確認するための試掘坑を十字状に設定した。石垣の調査は、横形状になった入口の年代を確定するために、Y=-9ライン上で南に4m幅で東西約4mの試掘坑を設定した。なお、南室の主軸は、北室同様、磁北から約26度30分東へ振る。

#### (b) 遺構

**基本層序**(図版18)：グリッドX=-8, Y=-17に沿って十字の上層観察用畦を設定し、層位の観察を行なった。南北畦は上から第1層黒褐色土、第2層黄褐色埴土、第3層黄褐色土、第4層擾乱層(暗褐色土)、第5層砂混黑色土、第6層暗褐色土、第7層砂混暗褐色土、第8層黄褐色土、第9層地山(疊混明黄褐色土)、第10層暗褐色土、第11層暗灰色土。第1層の黒褐色土が遺物検出面である。東西畦は上から、第1層擾乱層(暗褐色土)、第2層黒褐色土、第3層黄褐色土、第4層地山(疊混明黄褐色土)、第5層暗灰色土である。第2層の黒褐色土が遺物検出面である。第1層の擾乱層は表土を剥いだ際に残った部分である。

(尾野寺克実)

#### 礎石建物(図版13の1)

礎石は全て残存していた。他に、石列によって四方を囲んだ炉跡を検出した。建物は概ね東西南北方向に沿わせており、北室の方位とも一致する。建物規模は桁行き五間梁行き四間の平面長方形である。礎石の大きさは大きいものは一辺80cmから40cm前後の小型のものまで一定ではない。形も長方形、三角形、など様々であるが、長方形のものが多く見受けられる。礎石の下に10cm大の根石を敷くものが多い。各礎石の上面は平坦である。礎石ル五、ヲ五、ヲ四の間に浅い溝状遺構を検出した。ル五、ヲ五間の南北方向の溝は検出長76cm、幅14cmをはかり、ヲ五、ヲ四間の東西方向の溝は検出長76cm、幅13cmをはかる。

### 芦崎寺宝堂遺跡

いずれの溝も礎石壠形との切れ合い関係ははっきりしない。溝状遺構からの遺物の出土はなかった。その他、敷地内に不明のピットを数箇所検出した。炉跡は礎石チ三、リ三、チ四、リ四に囲まれる形で存在し、敷地内北西に位置する。各辺180cm程度の正方形を呈する。石列の周辺に多くの灰がつまた状態で検出された。石列と他の礎石の比高差はほとんどない。

南室中央の東西南北に十字のトレンチを設定し掘り下げを行なったが、現存遺構より下層の遺構及び遺物は確認できなかった。  
(中田吉矢)

**南室礎石壠形** (国版13の2) :層位は全て単層である。トーレト五、チーチ五、リーリ五、ヌーヌ五、ル一、ル三、ル五、ヲ一ヲ三は暗灰色土であり、ル二、ル四、ヲ四、ヲ五は炭混黒褐色土である。

**東トレンチ** (国版17) :南室発掘区の南に設定した十字にきったトレンチの内の東の区画である。木桶壠形はSK1をきっており、木桶の番付けから考えて、近代のものであろう。さらに木桶壠形をきる形で、土坑が存在し、土坑内には現代の板状遺物が木桶に被さる形で、検出された。

**基本層位** (国版26) :上から、第1層黒褐色土、第2層炭混黒褐色土、第3層灰褐色砂質土、第4層炭混暗黒褐色土、第5層埋設管理土、第6層台所基礎 (礎混黄褐色土)、第7層暗褐色土、第8層地山 (明黄褐色土) である。第1層の黒褐色土が遺物検出面である。

**SK1** (国版26) :東トレンチ内から検出された甕窯土坑であり、径130cm、深さ13cmの円形をなしている。覆土から多量の中世の遺物が出土している。木桶壠形によって壠りこまれている。  
(尾野寺克実)

**西トレンチ** (国版27) :西トレンチ北壁の層位は上から、第1層黄褐色盛土、第2層暗褐色土、第3層礎混明黄褐色地山である。顕著な遺構は検出されず遺物も出土しなかった。

**北トレンチ** (国版27) :北トレンチ東壁の層位は上から、第1層黄褐色土、第2層暗褐色土、第3層暗褐色土、第4層暗褐色土、第5層鈍黄褐色土、第6層礎混明黄褐色地山である。

**南トレンチ** (国版27) :南トレンチ東壁の層位は、第1層黄褐色盛土、第2層暗褐色土、第3層礎混明黄褐色地山、第4層暗褐色土、第5層砂利混暗褐色土である。第5層は搅乱層である。

**南端トレンチ** :図示しないが、第1層黄褐色盛土で地山が約20cm程で検出された。

**石垣** (国版14~16) :礎石建物裏側、南北にのびる石垣に約2×4mのトレンチを設定した。層位は9層に分れ、上から第1層黄褐色土 (表土)、第2層茶褐色粘質土、第3層黒褐色粘質土、第4層炭混黒褐色粘質土、第5層黄褐色粘質土、第6層暗茶褐色粘質土、第7層小石混黄褐色粘質土、第8層赤褐色粘質土、第9層小石混灰褐色粘質土である。

石垣石積みは8段程度確認することができ、その部分で基礎からの高さ約1mを測る。石の面は比較的そろえられている。石材は縦8~20cm、横20~40cmを測る。第9層の小石混灰褐色粘質土から第7層の小石混黄褐色粘質土までは地山である。その上の第6層暗茶褐色粘質土に石垣裏込めの根石があり、第5層黄褐色粘質土を石と同時につけ、石垣を構築している。

第5層では数点の土師器が出土している。第4層では確かに混じて多量の炭、土師器が出土しており、石垣上で何等かの地鎮祭が行なわれたものと想定できる。第3層黒茶褐色粘質土は近世後期のものであり、この時期に多量の石を土と共に積み上げている。第2層は現代の面であり、ガラス、ビール瓶等も出土している。石垣以外の明確な遺構は検出できなかった。

(中田書矢)

### (c) 遺物

#### S K 1 埋土中世遺物 (岡版31の56~99)

土師器皿 (56~97) : 大半が手づくね成形 (56~94) であり、輪轉成形のものは3点 (95~97) である。法量は口径約10~14cmの大型品と、口径約7~10cmの小型品に大別できる。大型品は10cmのもの、小型品は8cmのものが主である。

56~59 (大型品)、74 (小型品) は、二段撫で成形がなされており12世紀代のものと考えられる。口縁端部が丸いもの (56) が古く、面取りを施したもの (57~59・74) が新しいと考えられる。56の口縁部には煤が付着している。57には口縁外側にはっきりと横撫で調整を施している。

60~67 (大型品)、75~82 (小型品) は、一段撫で調整を施し、口縁端部は面取りし、12世紀末~13世紀中頃のものと考えられる。口縁部がやや内湾ぎみに緩やかに立ち上がるもの (60~67・75~78・82) と、底部からやや直線的にひらくもの (79~81) がある。

68~70 (大型品)、83~86 (小型品) は、一段撫で調整を施し、口縁端部が丸く、13世紀後半~14世紀代のものと考えられる。68の口縁端部には煤が、85の口縁端部には煤・タールが付着している。84は器厚が薄い。口縁部が底部から緩やかに直線的に開くもの (68・84)、口縁部がやや内湾しながら緩やかに立ち上がるもの (69・70・83)、口縁部が短く、器厚がやや厚いもの (85・86) がある。

71~73は、口縁部と底部との間に強い段ができる、15世紀代のものと考えられる。71の口縁端部には、煤・タールが付着している。72は底部の方が出ており、71・73は底部と口縁部の境が凹んで段になっている。

87~94は、口縁部が立ち上がるものの、外反するもの、また薄く平に広がる器形のものなど、15世紀代のものと考えられる。87・89・90は、口縁部が短く厚く、底部から脇部に掛けて屈曲して立ち上がっている。88は、口縁部と底部との境がくぼんで強い段になつていい

る。92・93・94は薄く平に広がる器形である。

95～97は輦轂成形の土師器皿である。95は12世紀代のものと考えられる。

**珠洲** (98・図版34の356, 357, 358) : 98は珠洲の壺の底部であり、底径は約15cm程度である。焼成は還元硬質、色調は黒灰色を呈し、胎土は緻密である。356はすり鉢の体部である。卸し目は2帯確認でき、1帯当たりの条数は9条である。357はすり鉢の底部から体部にかけての破片である。卸し目は5帯確認でき、1帯当たりの条数は9条である。357, 358はともに珠洲Ⅳ期に相当する。358は壺の体部である。体部外面に櫛目文を施す。珠洲Ⅰ期に相当する。

**懸仏用獅子壇座型釣金具** (99) : 99は懸仏用獅子壇座型釣金具の一部である。鋳銅製で顔面中央に御正体に取り付けるための孔がある。把手部分の孔は、通常両側面の2個所にあけるが、この場合は両側面の他に正面にも1個所孔があり、合計3個所の孔をあけている。

#### S K 1 埋土上面近世遺物 (図版31の100～107)

**土師器皿** (100・101) : 100・101は土師器皿である。法量は、口径がそれぞれ約16cm, 13cmと大型である。口縁部は底部から緩やかに開いている。100の口縁部はやや直線的であり、口縁端部は丸い。101の口縁部はやや外反し、口縁端部は引出されている。

**越中瀬戸** (102～104) : 102は碗の口縁部である。口径は約9cmで、内外面に暗茶褐色の鉄釉が薄くかかる。色調は茶褐色を呈し、胎土は緻密である。103は碗の口縁部である。口径は約10cmで、内外面に黒褐色の鉄釉が薄くかかる。色調は灰褐色を呈し、胎土は緻密で砂粒を少し含む。104は碗の口縁部である。口径は約8cmで、内面上部、外面に黄褐色の灰釉がかかる。色調は灰茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

**銅鏡** (105・106) : 105は寛永通宝であるが、106は判読不能である。

**鉄製品** (107) : 107は鉄釘である。断面の形状は四角である。

(大平愛子)

#### 東トレンチ炭混黒褐色土 (図版31の108～147)

**土師器皿** (108～142) : 108・109は12世紀代のものであり、手づくね成形のち口縁部に二段撫で調整を施し端部を丸く仕上げる。108は口径約14cm・109は約12cmの大型品である。109は内面に煤が付着する。110～114・117は12世紀末～13世紀中葉のものであり、手づくね成形のちに口縁部に一段撫で調整を施し端部をつまみ上げて面取りする。110～114は口径約12～14cmの大型品であり、118は約9cmの小型品である。115・116・118～126は13世紀後葉のものであり、手づくね成形のちに口縁部に一段撫で調整を施し端部を丸く仕上げる。115・116は口径約11cmの大型品であり、118～127は約8～10cmの小型品である。119は胴部外面に120は口縁部内外面に煤が付着する。122・126は胴部の立ち上がりが強く、胴部外面に強い撫で調整を施し、底部と胴部の境に棱を形成する。123は内面に刷

毛状工具痕が明瞭に見られる。127～139は手づくね成形であり14世紀以降のものである。127～130は口径約8cm前後の小型品であり、131～139は約14cm前後の大型品である。127は胴部が垂直に近く立ち上がる。128・138は胴部の立ち上がりが強く、胴部外面に強い撫で調整を施し、底部と胴部の境に稜をつくる。129～131・134・136は口径端部を丸くし上げる。132は口径部が外反し、胴部外面に縁が付着している。133・139は胴部がやや外反ぎみに立ち上がる。135は器壁がやや厚く、胴部外面に強い撫で調整を施す。内面には刷毛状工具痕を明瞭に残す。137は底径が小さく丸底である。胴部外面に指押さえ痕が3箇所認められる。140～142は輻轂成形である。140は12世紀中葉以降のものである。内外面に縁が付着する。141は12世紀後葉のもの。内面には刷毛状工具痕を明瞭に残す。

**珠洲** (143・144) : 143・144は珠洲の壺もしくは壺の胴部の破片である。

**越中瀬戸** (145) : 145は越中瀬戸の匣鉢である。暗茶褐色の錫釉がかかり、口径部の一部に透明の自然釉がかかっている。胎土は淡灰色で0.1cm前後の砂粒を含む。

**その他** (146・147) : 146は青銅の壺の耳と思われる。縁青がふく。147は一分金である。

(尾野寺克実)

**木橋** (図版36) : 北、東トレンチにまたがる状態で出土した。全長は4.6mをはかる。中間で木製接合部を用いて2本の竹をつないでおり、両端にも接合部が残存していることから出土したのは接合部の2区画分で、旧状は同様の方式で約2mごとに接合部があったものと考えられる。木製接合部はいずれも中心に径7cm程度の穴を開け、そこに竹を差込む。大きさは東トレンチ側の26×13×10cm、中間の22×12×6cm、北トレンチ側の14×16×9cmとまちまちである。用いられた竹は平均約7cmの太さをしているが、中間部接合部付近は腐食が著しく残存が良くなかった。また東トレンチ側接合部近くの部分には北を上として、小さく「二〇」の文字が彫られていたが、他の接合部付近では確認できなかった。出土標高は東に比して、北が高く東方面に水が流れる仕組みになっている。近代以降、上水道施設として使用されたものと考えられる。

(中田吉矢)

**礎石掘形** (図版32の148～221、図版33の222～231)

**トニ埋土暗灰色土** (図版32の148)

**土師器皿** (148) : 土師器皿2片が出土している。いずれも手づくね成形である。そのうち1点のみを図示した。

**ト三埋土暗灰色土** (図版32の149、150)

**越中瀬戸** (149) : 149は越中瀬戸の皿であり、内外面とも口径部端部から縁青色の灰釉を薄く施しており、外面下半は露胎である。口径は11.5cmである。体部外面に範削り調整を施す。

**鉄製品** (150) : 150は鉄釘である

## 芦原寺宝堂遺跡

### ト四埋土暗灰色土（図版32の151～153）

越中瀬戸（151）：151は無釉の碗である。体部内外面ともに輪転回転撫で調整が顕著である。

### 銅鏡（152・153）：152・153は寛永通宝である。

### ト五埋土暗灰色土（図版32の154・155）

### 鉄製品（154・155）：154・155は長さ約5cmの鉄釘である。

### チニ埋土暗灰色土（図版32の156・157）

越中瀬戸（156）：156は無釉越中瀬戸の碗の底部破片である。内外面とも輪転調整が顕著であり、底部は同転糸切り痕を残す。色調は外面は茶褐色で内面は灰白色を呈する。胎土は緻密である。

### 銅鏡（157）：157は寛永通宝である。

### チ三埋土暗灰色土（図版32の158）

土師器皿1片、越中瀬戸2片、鉄製品1片が出土している。越中瀬戸は2点とも無釉であり、暗茶褐色を呈し、器壁は厚く内外面に回転撫で調整を施す。

### 鉄製品（158）：158は鉄釘である。

### チ四埋土暗灰色土（図版32の159～174）

土師器皿18片、越中瀬戸5片、須恵器1片、鉄製品7片、銅製品3片（170・172・173）、寛永通宝2点（167・168）詳細不明の銅鏡2片が出土している。

土師器皿（159～163）：159～163は土師器皿である。159は手づくね成形であり、口径約10cmである。口縁端部に一段の横撫で調整を行う。160・161は口径約10cmであり、体部外面に回転撫で調整調整痕が残る回転輪轍成形である。160は口縁部が大きく開く浅いものである。161は腹部で屈曲してわずかに稜をなし口縁端部は丸くおさめている。162は手づくね成形であり、口径約12cmである。口縁端部に一段の横撫で調整を行う。腹部で屈曲してわずかに稜をなし、口縁端部は尖らせている。163は手づくね成形で、口径約14cm。体部下半には指押さえ痕が残り、口縁端部に一段の横撫で調整を行なう。

越中瀬戸（164・165）：164は越中瀬戸の壺の口縁部破片である。口径は約11cm。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。体部の内外面に回転撫で調整を施す。色調は暗灰色を呈す。165は越中瀬戸の碗の口縁部破片である。口径は約9cmであり、内外面ともに薄く鉄釉を施す。

須恵器（166）：166は須恵器の杯の口縁部破片である。色調は暗灰色を呈す。口縁端部外面の黒褐色は重ね焼きの際にできたムラである。立山町の上末窯の9～10世紀代のものと考えられる。

鉄製品（169・171・174）：169・171・174は鉄製品であり、鉄釘と思われる。

**銅製品** (170・172・173) : 170・172・173は銅製品である。170は横に広がる五角形をなす板状のものであり、172・173は端辺がほぼ垂直に立ち上がる板状のものである。板面上の模様は不鮮明である。

**チ五埋土暗灰色土** (図版32の175～176)

土師器皿 5片、鉄製品 5片、寛永通宝 1点 (176) が出土している。

**土師器皿** (175) : 175は土師器皿で手づくね成形である。口径は約10cmであり、口縁端部に一段の横撫で調整を施す。外面下半に煤痕がある。

**リ一埋土暗灰色土** (図版32の177・178)

鉄製品 1片 (177)、寛永通宝 1点 (178) が出土している。

**リニ埋土黒褐色土** (図版32の179)

**越中瀬戸** (179) : 179は無釉越中瀬戸碗の底部破片であり、底部は回転糸切り痕を残す。色調は暗褐色である。

**リ三埋土黒褐色土** (図版32の180・181)

土師器皿 3片、越中瀬戸 2片、鉄製品 1片が出土している。

**越中瀬戸** (180) : 180は無釉越中瀬戸壺である。口径は約12cm。内外面とも回転撫で調整が顕著である。口縁端部は水平に面取りしている。色調は暗茶褐色であり、胎土は緻密である。

**鉄製品** (181) : 181は幅2.3cmの鉄片の破片であり、用途は不明である。

**リ五埋土暗灰色土** (図版32の182・183)

土師器皿 5片が出土している。

**土師器皿** (182・183) : 182は手づくね成形であり、内外面とも撫で調整を施す。口縁部内外面に煤が付着している。183の底部は窓削り痕を残す。体部外面は横撫で調整により稜ができる。胎土は粗い。

**ヌ一埋土暗灰色土** (図版32の184・185)

土師器皿 9片、鉄製品 1片、寛永通宝 1点 (185) が出土している。

**土師器皿** (184) : 184は輪廻成形の土師器皿である。内外面ともに回転撫で調整が顕著であり、そのため外面に稜ができる。

鉄製品は用途不明である。

**ヌ二埋土暗灰色土** (図版32の186)

土師器皿 3片が出土している。

**土師器皿** (186) : 186は手づくね成形の土師器皿である。外面に若干撫で調整を施し、口縁端部を上方に向かって尖りぎみにおさえている。

**ヌ三埋土暗灰色土** (図版32の187)

鉄製品 1 片 (187) が出土している。

ヌ四埋土暗灰色土 (図版32の188)

土師器皿 8 片、越中瀬戸 1 片、鉄製品 8 片、木炭少量が出土している。

越中瀬戸 (188) : 188は越中瀬戸の楕の口縁部破片である。内面と外面上部に緑灰色の灰釉を施している。外面下半は露胎であり、範削り痕がみられる。色調は茶褐色であり、胎土は緻密である。口縁部は外反し、端部は尖らせてある。

ヌ五埋土暗灰色土 (図版32の189~191)

土師器皿 5 片、越中瀬戸 2 片、鉄製品 2 片が出土している。

土師器皿 (189・190) : 189・190は土師器皿である。189は手づくね成形であり、内面と外面の口縁下部に撫で調整を若干施す。口縁端部は尖らせる。190は手づくね成形であり口縁端部に一段の撫で調整がみられる。色調は乳茶褐色で胎土は粗い。

越中瀬戸は 2 点とも破片であり、内外面ともに鉄釉を施す。

鉄製品 (191・192) : 191・192は鉄釘である。

(野中由希子)

ルニ埋土炭混黒褐色土 (図版32の193)

越中瀬戸 1 片、鉄製品 1 片が出土している。

越中瀬戸 (193) : 193は越中瀬戸の楕の口縁部破片であり、内外面に口縁端部から茶色に発色する鉄釉を施している。口径は約 8 cm である。胎土は緻密であり、口縁端部は丸くおさめている。

ル三埋土炭混暗灰色土 (図版32の194~203)

土師器皿 10 片、鉄製品 20 片、寛永通宝 3 点が出土している。

土師器皿 (194~197) : 194から197はすべて手づくね成形の土師器皿である。194は口径約 6 cm であり、口縁端部外面に撫で調整を施している。195は口径約 12 cm である。196は口径約 10 cm であり、内外面に撫で調整を施しており、口縁端部は丸くおさめている。197は内面ほか外面口縁端部に撫で調整をおこない、口縁端部で段をなしている。口径は約 9 cm である。

鉄製品 (198・199・203) : 198・199は鉄釘、203は約 17 cm を測る鎌である。

銅銭 (200~202) : 200~203は寛永通宝である。

ル四埋土炭混黒褐色土 (図版32の204~216)

土師器皿 21 片、鉄製品 8 片が出土している。

土師器皿 (204~216) : 204から216は、すべて手づくね成形の土師器皿である。204は内面から外面口縁端部にかけ撫で調整を施し、口縁端部は段をなしている。口径は約 7 cm である。205・206は口径約 8 cm であり、口縁端部はややとがっている。205の撫で調整は、204のそれと同様であるが、口縁端部で段をなしていない。207・208・209の口径は約 10 cm

であり、208・209の口縁はやや尖っているが、207の口縁は丸みをおびている。207は内面と外面の一部に、209は口縁端部の内外面に撫で調整を施している。210も内面と外面の口縁端部に撫で調整を施している。口径は約14cmである。211は土師器皿の底部であり、底部外面には煤が付着している。212は内外面を撫で調整した口径約9cmのもの、213は口縁部をとがらせ外面に綻および横方向に撫で調整を施した口径約10cmのものである。214・215は口径がともに約7cmのものである。214は口縁端部をとがらせており、215は丸くおさめてある。どちらも撫で調整は観察できない。216はかなり口縁端部をとがらせたものである。口径は約6cmであり、撫で調整は観察できない。

ヲ五埋土暗灰色土（図版32の217～221）

土師器皿14片、越中瀬戸2片、白磁1片、鉄製品1片が出土している。

土師器皿（217・220）：217・220は土師器皿である。217は外面に撫で調整を施し、口縁部をかなりとがらせる。口径は約8cmである。220は内面と外面口縁端部に撫で調整を施していることから、口縁端部よりややさがったところで段をなしている。口径は約12cmであり、口縁端部は丸くおさめる。

越中瀬戸（219・221）：219は越中瀬戸の皿の底部であり、221は越中瀬戸の碗の口縁部破片である。219は底径約5cmであり、内面に鉄釉を施している。また、底部外面には煤が付着している。221は外面に鉄釉を施している。口径は約13cmである。

ヲ三埋土暗灰色土（図版33の222～224）

土師器皿4片、越中瀬戸3片、鉄製品1片が出土している。

越中瀬戸（222・223）：222・223は越中瀬戸の皿であり、内外面には撫で調整を施している。222は口径約11cmであり、口縁端部を尖らせていて、胴部で段をなす。223は口縁端部が内側に尖らせる。また、口縁端部で段をなす。口径は約9cmであり、底部外面に糸切り痕を残す。

鉄製品（224）：224は鉄釘である。

ヲ四炭混黒褐色土（図版33の225～228）

土師器皿10片、鉄製品4片が出土している。

土師器皿（225）：225は土師器皿であり、口縁端部は丸く内面には撫で調整を施す。

鉄製品：（226～228）

ヲ五埋土暗灰色土（図版33の229～231）

土師器皿10片、越中瀬戸2片が出土している。

越中瀬戸（229・231）：229・231は越中瀬戸であり、229は口径約8cmの皿である。外面に施している釉は、灰釉が被熱して白くなったものと考えられる。231は口径約7cmの壺（茶入れ）である。外面には、茶色に発色する鉄釉を施している。

### 芦原寺宝堂遺跡

**土師器皿** (230) : 230は手づくね成形の土師器皿である。内外面ともに撫で調整をおこない、口縁端部は尖らせる。口径は約12cmである。  
(佐藤聖子)

### 南室表採 (図版33の232～234)

232は表土より出土。神仏に奉納する模擬刀である。最大長34cm、最大幅4cm、最大厚0.6cmを測る。

233は表土より出土。神仏に奉納する模擬刀の柄の部分と考えられる。最大長6.2cm、最大幅3.2cm、最大厚0.5cmを測る。

234は表土より出土。銅製の飾り金具である。

### 北トレンチ表採 (図版33の235)

235は表土より出土。和鏡の縁部破片である。中縁の松鶴文鏡と考えられる。推定直径約12cm、鏡体の厚さ約2mm、鏡縁は高さ約7mm、最大厚4.5mmを測りやや内傾している。白銅質である。13世紀の初めを中心とする時期のものであろう。  
(河合 忍)

### 南室黒褐色土 (図版33の236～245)

**土師器皿** (236～239) : 239以外はすべて手づくね成形である。236は口径約9cmである。平底状の底部から内輪気味にゆるやかに立ち上がる口縁端部を一段の横撫でによって外反させる。胎土・焼成は良好で明褐色を呈する。237は丸底で口縁部の垂みが著しい。色調は灰褐色。238は器厚が約8mmと厚く、口径約13cmをはかる。口縁部下で外反させ端部を丸くおさめる。239のみ轆轤成形によるものであり、口径約7cm、体部内外面に回転撫で調整、底部には回転糸切り痕が残る。焼成はあまり良くななく色調は灰白色である。

**越中瀬戸** (240～243) : 240は灰釉の越中瀬戸小皿である。二次焼成を受けたものと考えられ、釉が剥落して施釉部が白色を呈する。底部は削り出し高台、いわゆる碁笥底で露胎である。17世紀前半のものと考えられる。241は鉄釉碗である。釉調は光沢のある黒褐色であり、内外面に施釉する。242は無釉の皿で色調は明褐色、体部には轆轤による回転撫で調整が顕著であり、直線的に開く。243は灰釉を施す瓶の底部である。釉調は緑灰色に近く、内面にも施している。底部露胎で回転糸切り痕を残す。いずれも胎土・焼成とともに良好である。

**瀬戸美濃** (244) : 灰釉を施す香炉の口縁部破片である。釉調は淡緑色に近く、口唇部内面の釉だまりは深緑色を呈す。体部下半が露胎で施釉剤であり、調整痕を残す。

**珠洲** (245) : 口径約27cmのすり鉢である。轆轤水挽き成形。器体はほぼ直線的に開き、口縁内端面に広く面をとり幅約2.5cmの口縁帯を形成する。15世紀の年代を与えることができる。  
(中田書矢)

**石垣灰褐色粘質土**（図版33の246～271）

**土師器皿**（246～255）：246～251は土師器皿の小型品の口縁部破片である。いずれも手づくね成形である。外面に撫でを施し、撫での部分が外反する。色調は橙色を呈し、胎土は緻密である。246は口径約8cmを測る。外面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。247は口径約10cmを測る。内外面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。248は口径約10cmを測る。内外面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、外面に釉を施す。胎土は緻密である。249は口径約10cmを測る。体部が外反ぎみに緩やかに広がり、口縁端部は尖る。調整は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。250は口径約10cmを測る。外面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。251は口径約11cmを測る。口縁部外側に沈線を持つ。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密である。焼成は良い。252～254は土師器皿の大型品の口縁部破片であり、255は底部破片である。いずれも手づくね成形である。252は口径約14cmを測る。内面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。253は口径約15cmを測る。体部が内厚して立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面に撫でを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。254は口径約18cmを測る。内外面に撫でを施し、撫での部分が外反する。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密である。255は底径約7cmを測る。かなりの大型品である。内面底部に撫で調整を施す。色調は黄灰色を呈し、胎土は緻密である。

(河合 忍)

**肥前系陶器**（256）：17世紀後半から18世紀初頭と考えられる椀の口縁部破片であり、口径は約10cmを測る。体部上方からやや開き気味である。内外面に釉調を施しており、外面は青灰色をし、内面は外面に比べ白色にちかい。焼成は良好であり、胎土は緻密である。

**越中瀬戸**（257・262～264・266・271）：257は椀の口縁部破片であり、口径は約10cmを測る。内外面には鉄釉を施している。264は椀の底部破片であり、底径は約5cmを測る。内外面に薄い鉄釉を施しており、高台周辺は露胎である。262は皿であり、内外面に灰釉を施す。釉調は淡緑色であるが二次焼成を受け口縁部を中心に釉が禿げ落ち、体部下半を露胎にしている。兔割り痕が顕著である。263は皿であり底径は約5cmを測る。外面には鉄釉が付着しており、高台は断面三角形を呈している。近代のものと考えられる。266は砂や鉢の底部破片であり、底径は約12cmを測る。内外面に鉄釉を施し、底部外面に回転糸切痕を残す。271はすり鉢であり、内外面に鉄釉を施す。おろし目は緻密であり、内底面はいちじるしく磨滅している。外面の下半部には紐状の圧痕が残り、体部に木の葉状の篦引きを施している。

**瀬戸**（258・259）：258は椀であり、口径は約9cmを測る。体部下方に丸みを持ち、立ち上がる。体部中央に鉄釉を施した後、内外面に灰釉を施す。内底面にはトチンの痕跡が二箇所残る。259はほぼ完形の椀であり、口径は約9cmを測る。緩やかに立ち上がり、口

#### 芦崎守室堂遺跡

縁端部で内彎する。また鉄釉を施した後、内外面に灰釉を施してある。高台周辺は露胎にしている。258・259とも焼成は良好であり、胎土は緻密である。

**京焼系（260・261）**：260は、完形の碗であり、口径は約11cmを測る。体部下方は丸みを帯びるが、上方はゆるやかに外反する。鉄釉で格子と白色釉で花文様を施した後、灰釉を内外面に施している。また高台周辺は露胎にしている。261は碗であり、口径は約9cmを測る。鉄釉で体部上方に唐草紋を施した後、内外面に灰釉を施す。高台周辺は露胎にしている。内底面にはトチンの痕跡が二個所残る。

**伊万里青磁（265）**：完形の香炉である。高台がつき、3箇所に形骸化した三足がつく。また接地面と内底面に重ね焼きの砂が付着している。内底面の高台径は1.8cmとやや小さく、より小さいものを重ね焼きしていると考えられる。

**珠洲（267）**：壺の体部破片である。叩きは綾杉状に施す。3cm当たりの叩き密度は9条であり、13世紀後半を前後すると思われる。

**不明陶器（268）**：壺であり、口縁部はくびれて玉縁状になる。口径は約19cmを測る。内外面に鉄釉を施した後、口縁部附近に灰釉をかけている。

**鉄製品（269・270）**：269は釣り手金具と考えられる。270は鉄釘である。（福海貴子）

#### 石垣黄褐色粘質土直上（図版34の272～283）

**土師器皿（272～283）**：口径は9～12cmのものが多く（274～281）、272・273は口径約7～8cmの小型品、282・283は口径約13～14cmの大型品である。色調は282は灰白色であるが、多くのものは淡黄灰色、黄灰色である。胎土は精良なもの（273～275・277・278・280～282）、粗いもの（272・276・279・283）がある。全ての破片の口縁部内外面に一段の横撫で調整を施している。口縁部は外反傾向にあるもの（274～276・283）、内彎傾向にあるもの（273・276・277）、直線的に立ち上がるものの（279～282）がある。また272は直立気味に立ち上がっている。281の口縁端部はやや丸みを帯びているが、口縁端部を鋭く仕上げるものが多い。275には口縁部内外面に、277・280には内外面全体に煤が付着している。283は外面全体に、272は外面と内面口縁部に煤が付着している。

#### 石垣裏込内（図版34の284～289）

**土師器皿（284～289）**：口径は主に約10～12cmであり、289は口径約14cmの大型品である。色調は288が乳灰色であるが主として黄灰色、淡黄灰色を呈す。胎土は精良なもの（284・288）、粗いもの（285～287・289）がある。すべての破片の口縁部内外面に一段の横撫で調整を施している。287と289は手づくね成形であり、287には明瞭な指当て痕を残す。284は纏模成形であり、底部に糸切り痕がある。285～287の口縁部は内彎気味である。289は口縁端部を短く外反させており、284の口縁部は直立気味に立ちあがっている。285の口縁端部はやや丸みを帯びているが、多くは口縁端部を鋭く仕上げている。（武田昌明）

**石垣暗茶褐色質土** (図版35の420)

**金銅製品** (420) : 420は金銅製壺串で上半部に一箇所の穿孔がある。祭祀のための結界を定めるのに使用されたと思われる。 (松原和也)

**石垣炭混黒褐色粘質土**

**下層出土遺物** (図版34の290~293)

**土師器皿** (290~292) : 291・292は土師器皿の口縁部破片であり、290は口縁から底部までの破片である。口径は290・291は約10cm、292は約14cmを測る大型品である。色調は、290・291が淡黄灰色、292が明褐色を呈す。胎土は精良である。全ての破片の口縁部外外面に一段の横撫で調整を施している。すべて手づくね成形であり、指当え痕を残す。290の底部には指頭によるへこみがある。また290は器厚約3mmと薄い。口縁部は内済気味に立ちあがっている。口縁端部はいずれも鋭い。

**越中瀬戸** (293) : 越中瀬戸花瓶の口縁部破片である。口径約9cm、鉄軸をかけ、釉調は暗灰褐色を呈す。胎土は精良であり、色調は明褐色を呈す。時期は16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

**罐内及び罐下部出土遺物** (図版34の294~326)

**土師器皿** (294~317) : すべて手づくね成形であり、口縁部に一段の横撫で調整を施し、体部外間に指押え痕をとどめる。法量は口径約8cm~12cm、14cmのものがあるが、9cm、10cm、11cmが主である。この内、口縁罐部に煤がタール状に付着するものは303・311・312であり、灯明皿として使用されたものである。294・295はゆるやかに開く体部から口縁部が弱く屈曲して立ち上がるるものである。296~298・300~303は丸底であり、内済気味に立ち上がる。296の口縁部内外面には煤が付着する。また平底状の底部から口縁部が短く直立気味に立ち上がり端部を丸める300や、底部を屈曲させて直線的に開く304・306・307などがある。299・305は口縁部が直線的に開く。308~314は口縁部を若干外反気味に立ち上げたもの、315・316はその外反の強いものである。314の口縁部に煤が付着し黒褐色を呈す。317は口径約14cm・器厚8mmをはかる大型品であり、口縁部に一段の横撫で調整を施しきく外に開く。色調は明褐色であり、焼成は良好である。胎土に径約1mm前後の砂粒を少量含む。

**越中瀬戸** (318・319) : 318は鉄軸を施す碗の腰部である。体部下半に薄い鏽軸を鬼板掛けした後に鉄軸を内面まで施す。釉調は茶褐色に近く胎土は精良であり焼成は良好である。大山窯の製品と推定でき、17世紀第2四半期に位置付けることができる。319は鉄軸の半底皿で口径約12cmをはかる。體爐成形で底部に回転糸切り痕を残し体部は直線的に開く。口縁部は棒状あるいは範状の工具を用いて成形しており、端部に丁寧に面をとる。釉調は暗茶褐色に近く、内外面に薄く施す。外面体部下半及び底部外側は露胎である。内面

見込み部中央に重ね焼きのトチン痕が残る。

**鉄製品** (320~326) : 320・325は刀子の刀身部破片である。326は刀子の柄部でわずかだが柄の木質部分が残存する。321・322は角釘であり、322には木塊が付着している。323・324は用途不明の鉄板であり、何れも厚さ約1cm程度である。 (中田書矢)

**上層出土遺物** (図版34の327~355)

**土師器皿** (327~351) :すべて手づくね成形である。ほとんどのものの口縁端部に一段の横撫で調整を施し、体部外面に指押え痕をとどめる。法量は口径約7~12cmのものがあり、7cm・9cm・10cm・11cmが主体を占める。327は底部平底であり、口縁部が短く直立気味に立つものである。口縁部に一段の撫で調整を施して端部を丸くしあげる。口唇部にタール状の煤が付着する。328~330・333~335・350は口縁部が内唇気味にゆるやかに立ち上がり、端部を尖らせる丸底皿である。328の口縁端部には煤がタール状に付着する。また平底状の底部から屈曲して直線的に開く336などもある。336の体部外面には煤が付着する。337はやや内唇する口縁の端部外面を面取りする。338~340は口縁部が直線的にのびるものである。口縁部下でわずかに外反させものには341~343・349がある。345・346は器厚が約7mm~8mmとやや厚手の製品であり、口縁部外面に一段の撫で調整を施す。このうち、345・346は口縁部下に撫で調整による明瞭な段を有する。色調は明茶褐色で焼成は良くない。351は口径約14cm、器厚約6cmをはかる大型品であり、一段の横撫で調整を施し、口縁部下で大きく外反させ、体部外面を撫で上げる。口唇部は丸めておさめている。色調は灰白色で胎土・焼成ともにあまり良くない。

**瀬戸・美濃** (352・355) : 352は灰釉を施す香炉の口縁部破片である。口縁端部をわずかに引き出し、突帯をめぐらせる。底部外面には回転箝削り調整がみられる。体部外面下半は露胎である。355は灰釉を施す平楕であり、口径約15cmをはかる。釉調は淡黄緑色であり、外面に薄く施す。体部外面下半は露胎である。胎土・焼成ともに良好である。

**珠洲** (353・354) : 353は橈轆壺の底部であり、底面に糸切り痕を残す。色調は青灰色で胎土は緻密であり、焼成良好である。354は叩皿の胴部破片であり、外面に絞形状叩打を施す。叩きの条数は3cmあたり9条を数える。胎土に砂粒を多く含む。 (中田書矢)

**石垣茶褐色粘質土** (図版35の359~419)

**土師器皿** (359~379) : 359~379は土師器皿の口縁部破片である。口径は約7~12cmを測る。焼成は酸化軟質である。色調は359が暗灰色である他は明褐色あるいは灰白色であるが、360・362・366・370・372・374・375・377には煤が、そのうち360・362・372・375・377にはタールが付着し、黒色である。灯明皿として使用されたものと推定される。すべて手づくね成形であり体部外面に指頭圧痕を残すもの、また口縁外面から体部内面にかけて横位の撫で調整を施しているものがある。概ね口縁は緩やかに内彎し端部は尖らせてい

る。その他の器形としては372・379は口縁がやや外反し、363は口縁が弱く屈曲し端部を丸くおさめ、364は器厚が他に比べて厚い。

**越中瀬戸** (380・383・386・391・392・394~396・398・402・406) : 380は越中瀬戸の灰釉小皿であり、口径は約8cmを測る。輪轆成形であり、体部外面下位に施す。焼成は還元硬質であり、色調は外面下位の露胎部が灰白色、釉は淡緑色だが二次焼成のため釉が剥落し、大半の部分は白色を呈する。高台は内反りの貼り付け高台であり、断面三角形である。383は灯明台であり、体部内外面に茶褐色に発色する鉄軸を施す。底部には回転糸切り痕を残す。また外面上部にタールが付着する。386・391・392・394・395・396・398・402は鉄軸碗である。多くは口径約10cm、高台径は5ないし6cmである。輪轆成形であり、外面下半に回転施削り調整を施す。高台は輪高台であり、断面方形を呈する。392・395は付け高台であり、396は削り高台と思われる。396は高台底面に糸切り痕を残す。また外面下部に露胎部を残し体部内外面に茶褐色に発色する鉄軸を施す。ただし392・393は黒褐色であり、部分的に茶褐色に発色している。また394・402には、トチン痕が残る。406は越中瀬戸の壺で口径は約9cmを測る。外面に茶褐色の鉄軸を施す。また体部内面に回転施削り調整を施している。

**京焼系陶器** (381・382・383・385・397・399・404) : 381・382は京焼系陶器の皿であり、口径は約11cmである。輪轆成形で回転撫で調整を体部外面に施す。釉は灰白色のものを内面に施す。また重ね焼きのためのトチン痕が底部内面に381には2つ、382には1つある。384は灯明台であり、内面に灰白色の釉を施す。385は碗であり、口径は約10cmである。口縁端部は外反し内外面に明灰色の釉を施す。397は碗であり、高台径は約3.5cmを測る。内外面に青灰色の釉を施す。また内面底部にトチン痕を残す。399も碗であり、高台径は約5cmを測る。釉は黄褐色であり、内外面に加え底面外部に施している。また外面に数条に釉だまりができる。404は急須である。外面下半に回転施削り調整を、外面上半部に黄褐色の釉を施す。外面下位は露胎になっている。

**肥前系陶器** (387・389) : 387は碗であり、口径は約11cmを測る。色調は暗灰色を呈し釉は体部内外面に施す。389は磁器である。口径約12cmの碗であり、外面に染付けを施している。明白色の釉を内外面に施す。

**唐津** (390・393) : 390・393は碗の底部破片である。高台径は、390が約4.5cmであり、392は約5cmである。390・393とともに、白色の釉を体部内外面と底部外面に施している。

**瀬戸** (401・403) : 401・403は掛け分け碗の完形品である。401は口径約9.5cmであり、外面下位に顕著な回転施削り調整を施す。釉は体部外面上部と内面は青灰色、外面下半部は茶褐色を呈する。高台は断面方形の貼り付け高台である。403は口径約9cmを測る。釉は内外面に明茶褐色のものが、外面の一部分に茶褐色のものを施している。また外面中央

に2、3条の袖だまりができている。

**伊万里** (405) : 405は伊万里青磁の花瓶である。淡緑色の釉を外面から頸部上方内面にかけて施している。

**陶器** (388・400) : 388・400は近代の陶器であり、黄褐色の釉を内面から外面中位にかけて施している。

**鉄製品** (407~417・419) : 407~414は鉄釘である。いずれも角釘であり、412は比較的大きいものである。415・416は刀子と思われる鉄製品。417は木質を鉄でまいてある製品である。用途は不明である。419は鉄鍋であり、口径は約25cmを測る。口縁部は断面が三角形である。

**銅鏡** (418) : 418は寛永通宝である。

(松原和也)

**その他の遺物** (図版50の427・図版52の421~426)

421・422はガラス製の薬瓶である。器高6.5cmあまりで透明の紫色を呈する。調査区より出土した同様の小瓶は16片を数える。体部外面に「神薬」の文字を判読できるものが数点ある。製造元については広貫堂と資生堂の2社を確認できる。広貫堂では、大正から昭和第2次大戦前まで、この型式のものを販売していたとのことである。

423~426は石垣表土から出土したガラス瓶であり、すべて昭和期の遺物である。423には「DAINIPPON BREWERY」、424には「山田市小川商店製造」の文字がある。425の底部には三ツ矢のマークがある。426の肩部には「線」の文字を判読できる。

427は北室で表探した鉄鍬である。近代以降のものと考えられる。

以上はいずれも近代から現代にいたる立山信仰の隆盛を物語る資料である。

(中田書矢)

#### 4 玉殿窟・虚空蔵窟測量調査

##### (a) 測量の方法

玉殿窟・虚空蔵窟は、室堂の東約100mの地点に存在する。従来簡単な実測図が紹介されているが(富山県教育委員会1971)、正確な位置を地図上で把握できおらず、充分な実測調査もなされていない。今回は、光波測距儀を使用した簡易閉鎖トラバース測量で、それぞれの洞窟の地点を押さえ、各基準点を中心に三次元測量の方法で実測図を作成した。

トラバース測量の原点( $x = 0$ ,  $y = 0$ )を測量点1におき、単位をメートルとし、磁北方向にY軸、東西方向にX軸を設定した。測量点2が $x = 116.10$ ,  $y = -47.6$ 、測量点3が $x = 224.10$ ,  $y = 73.76$ 、玉殿窟が $x = 113.37$ ,  $y = 22.59$ 、虚空蔵窟が $x = 123.34$ ,  $y = 20.62$ を測った。この結果は、光波アリダードを使用した平板測量の結果ともほぼ一致した。

その後、玉殿窟と虚空藏窟の基準杭の上に光波測距儀を設置し、測点と測量点2との間の角度と水平・垂直距離を測ることによって三次元測量を実施した。なお、各石や洞窟の主な点を測っているが、岡化は現場スケッチを参考としつつおこなった。

#### (b) 測量調査の成果 (図版28・29)

立山縁起にある開山者、佐伯有頼は、逃がした白鷹と弓で射た大熊を追い岩穴に入ろうとしたところ、白鷹と大熊は実はそれぞれ刀尾権現(不動明王)と阿弥陀如来であることを知った。そのお告げを受けて豪勢上人のもとで仏道の修業に励み、やがて立山を開山したとされている。この岩穴が玉殿岩窟にあたり、特別な聖地とされた。玉殿岩窟は宿泊の場所として使用され、虚空藏窟は仏像安置の場として使用されたようである。しかし、神社の伝承によれば、室堂の創設以前は玉殿岩窟は越中国の、虚空藏窟は他国(?)の登拝者が宿泊したともある。

両窟は室堂の東方に位置し、室堂平の浄土沢を望む安山岩からなる急斜面の断崖にある。標高は約2,410~2,415mを測る。東に位置するのが虚空藏窟であり、そこから約10m西に玉殿岩窟がある。また玉殿岩窟の西約18mの断崖には、戒堂の方の雪渓から流れる水が滝となって流れ落ちており、北側は沢の向こうにそびえたつ立山三山を真前に望むことができる。

玉殿岩窟はほぼ北方に向かって開いており、窟の中心軸は磁北より13度東にふれている。奥行は基本杭から約4.1mである。幅は入口では約2m、奥では約1.5mである。高さは入口では約0.9m、奥では約0.7mである。床面は基本杭から窟奥へむかって8度の傾斜でゆるやかに上っている。奥には上部が平らな石台が階段状に3段組まれている。一番奥の石台には首のおれた阿弥陀坐1体を含む石仏5体が並べられていたが、多くは近代になってから持込まれたものであろう。今回の調査で基本杭から南東に約0.7mの地点で寛永通宝1点を表探した。

虚空藏窟は北東に向かって開いており、窟の中心軸は磁北より約28度東にふれている。奥行は基本杭から約3.8mである。幅は入口で約3.7m、奥で約2.3mである。高さは入口では約1.2m、奥では約0.6mである。床面は基本杭から窟奥へむかって9度の傾斜でゆるやかに上っている。奥には上部が平らな石台が階段状に2段組んでいる。一番奥の大きな石台の周りには像高約0.5mの石造の十六羅漢や石地蔵が10体あり、その東部の大きな石台にも2体安置してある。落石と思われる大小の石と土が床を覆っている。今回の調査で基本杭から南南西に約0.8mの地点で懸仏、南南西に約1mの地点で土師器皿1点・鉄仏1点を表探した。

これらの両窟は明治初年と1962年に発掘調査が行われている(富山県教育委員会1971)。1962年に岡崎卯一氏が中心となって実施した調査では、玉殿岩窟では永楽通宝1点、寛永

#### 芦崎寺室堂遺跡

通宝 1 点、白色薄手の皿の断片と考えられる土器 1 片、茶色がかった黄褐色の土器 5 片、壇具の六器のようにして用いたと思われる赤色薄手の土器 2 点と地下 1 m の所から炭化物がわずかであるが検出されている。虚空蔵窟では寛永通宝 4 点、治平元宝 1 点、至和元宝 1 点、不明の古銭 1 点と、壇具の六器のようにして用いたと思われる土器 1 点、動物の骨と思われる小片が数個検出されている。そのほとんどは入口近くからの検出であり、ここでは炭化物も多量に確認されている。

(野中由希子・尾野寺克実)

## 第4章 考察

発掘・測量調査の成果について、以上に示したが、ここでは遺物・遺構について、より詳細な考察を加え、立山信仰の歴史を考える基礎資料としよう。

### 1 遺物

整理に際しては、第1・2次調査で出土した遺物1592点のすべてについて、出土地点、遺構・層位、種類・器種、分類、法量、口縁部個体数・破片数を記録し、種々の計量的な分析を試みた。

出土遺物1592点の内わけは、土器・陶磁器片1289点、金銅製品1点、銅製品5点、鉄製品・鉄片214点、焼印3点、貨幣類55点、ガラス瓶等9点、ガラス製薬瓶16点である。また土器・陶磁器の内わけは、土師器1065片、須恵器2片、珠洲16片、越中瀬戸128片、唐津7片、京焼11片、瀬戸系陶器10片、伊万里系磁器10片、不明陶器16片、不明磁器24片である。

これら出土遺物の様相を把握するために、まず土器・陶磁器類を中心とした食器資料についてデータベースを作成した（第1～4表参照）。その分析の結果、食器の様相にはそれを用いた社会の特色が強く現れていることが判明してきた。

まず今回の発掘調査において出土量が最も多かった土師器について計量的な分析を行ない、次いで層位別に土器・陶磁器の組成を算出して比較する。最後に年代を判定できた遺物の時期別の出土量と構成比率とを算出し、人々の活動の盛衰を探る資料とする。

なお以下に示すグラフは、基本的に口縁部個体数に基づくものである。

#### (a) 土師器

室堂遺跡から出土した土師器皿について計量的な分析を行なった。

**成形技法**：まず出土した土師器全体について、手づくね成形のものと、輪轆成形のものとの比率を算出した（第2図）。その結果、手づくね成形品が94.6%であるのに対し、輪轆成形のものは5.4%と極端に少ないという数値を得た。室堂遺跡の土師器皿は中・近世を通じてほとんどが手づくね成形によるものであり、このことは後に述べるが、本遺跡の性格を考えるうえで重要な特徴の一つになるであろう。

**煤付着品の比率**：土師器皿について、口縁部にタール状の煤が付着する燈明皿に使用したものと、煤が付着しないものとの比率を算出した（第3図）。扱った資料は、中世前期の土坑SK1出土品と、近世初期の石垣炭混黒褐色粘質土出土品である。まずSK1出土品においては、煤が付着するものは全資料の8.5%であり、石垣炭混黒褐色粘質土出土品

第1表 室堂遺跡出土食器の種類器種別組成表（12世紀～15世紀）

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	108	9.02 (100.0%)
	小計	108	9.02 [ 98.3% ]
珠洲	壺(T種)	5	0 ( * % )
	壺(R種)	1	0 ( * % )
	甕	1	0 ( * % )
すり鉢		8	0.16 (100.0%)
	小計	15	0.16 [ 1.7% ]
総計		123破片	9.18個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。)

第2表 室堂遺跡出土食器の種類用途別組成表（12世紀～15世紀）

種類	器種	破片数	個体数
食膳具	土師器	108	9.02 (100.0%)
	小計	108	9.02 [ 98.3% ]
貯蔵具	珠洲	7	0 ( * % )
	小計	7	0 ( * % )
調理具	珠洲	8	0.16 (100.0%)
	小計	15	0.16 [ 1.7% ]
総計		123破片	9.18個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。)

第3表 室堂遺跡出土食器の種類器種別組成表(17世紀~19世紀)

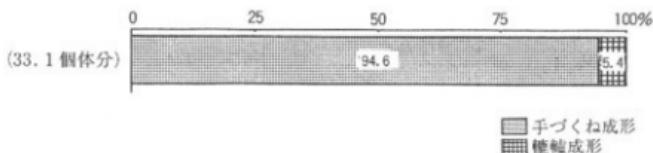
種類	器種	破片数	個体数
土師器	甌	506	24.08 (100.0%)
	小計	506	24.08 [ 53.9% ]
越中瀬戸	甌	49	12.0 ( 75.7%)
	皿	38	2.69 ( 17.0%)
	壺	3	0.30 ( 1.9%)
	甕	6	0.29 ( 1.8%)
	すり鉢	7	0.15 ( 0.9%)
	花瓶	3	0 ( * % )
	匝鉢	5	0.10 ( 0.6%)
	灯明台	1	0.34 ( 2.1%)
	不明	10	0 ( * % )
	小計	122	15.87 [ 35.6% ]
唐津	甌	6	0.07 (100.0%)
	不明	1	0 ( * % )
	小計	7	0.07 [ 0.2% ]
京焼	甌	5	0.10 ( 8.7%)
	皿	3	0.66 ( 58.0%)
	きゅうす	2	0.38 ( 33.3%)
	灯明台	1	0 ( * % )
	小計	11	1.14 [ 2.6% ]
瀬戸系	甌	1	0.77 ( 82.8%)
	香炉	4	0.16 ( 17.2%)
	小計	5	0.93 [ 2.0% ]
伊万里系	甌	3	0.48 ( 19.4%)
	花瓶	1	1.00 ( 40.3%)
	香炉	1	1.00 ( 40.3%)
	不明	5	0 ( * % )
	小計	10	2.48 [ 5.7% ]
不明陶器	甌	1	0 ( * % )
	不明	7	0 ( * % )
	小計	8	0 [ * % ]
不明磁器	不明	1	0 ( * % )
	小計	1	0 [ * % ]
鉄製品	鍋	2	0 [ * % ]
総計		672 破片	44.57 個体分

(個体数は全て口縁部計測法による。)

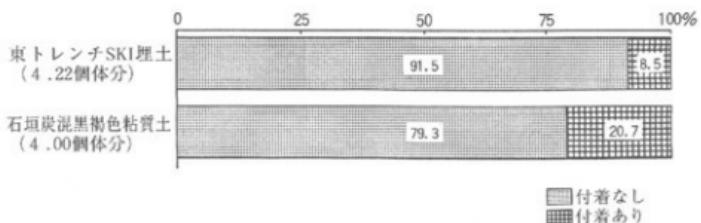
第4表 室堂遺跡出土食器の用途別組成表（17世紀～19世紀）

種類	器種	破片数	個体数
食膳具	土師器	508	24.08 ( 58.8%)
	越中瀬戸	87	14.69 ( 36.0%)
	唐津	6	0.07 ( 0.2%)
	京焼	8	0.76 ( 1.9%)
	瀬戸系	1	0.77 ( 1.9%)
	伊万里系	3	0.48 ( 1.2%)
	不明陶器	1	0 ( * %)
	小計	614	40.85 [ 91.8%]
貯蔵具	越中瀬戸	9	0.59 ( * %)
	小計	9	0.59 [ 1.3%]
調理具	越中瀬戸	7	0.15 (100.0%)
	鉄製品	2	0 ( * %)
	小計	9	0.15 [ 0.3%]
宗教具	越中瀬戸	3	0 ( * %)
	瀬戸系	4	0.16 ( 7.4%)
	伊万里系	2	2.00 ( 92.6%)
	小計	9	2.16 [ 4.8%]
その他	越中瀬戸	6	0.44 ( 53.7%)
	京焼	3	0.38 ( 46.3%)
	小計	9	0.82 [ 1.8%]
総計		650破片	44.57個体分

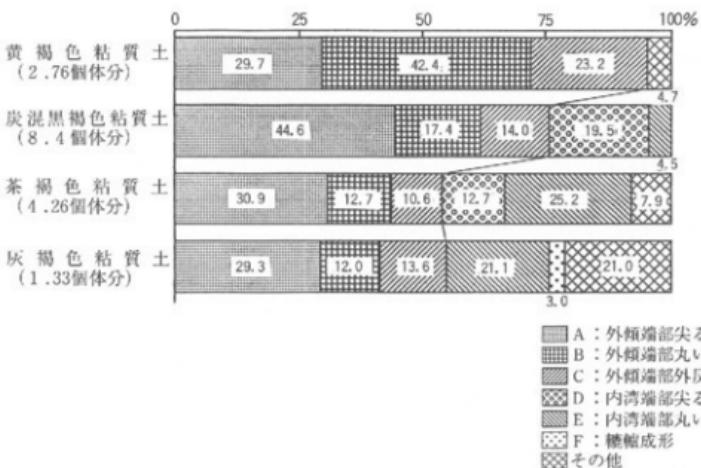
(個体数は全て口縁部計測法による。)



第2図 室堂遺跡出土土師器皿の成形技法 (個体数)

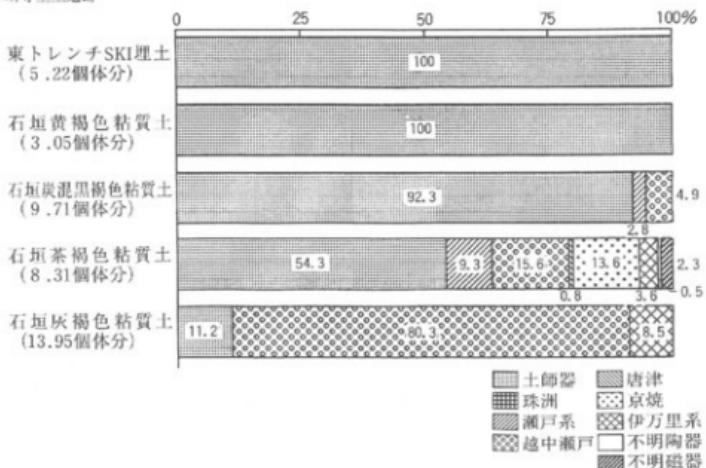


第3図 煤付着土師器皿の比率 (個体数)

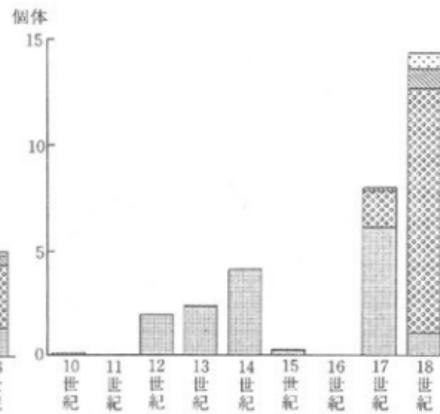
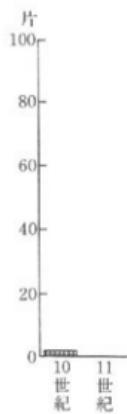


第4図 石垣層位毎の近世土師器皿の分類別比率 (個体数)

芦崎寺室堂遺跡



第5図 遺構・層位別の土器構成比(個体数)



第6図 室堂遺跡の時期別遺物出土量(破片数)

第7図 室堂遺跡の時期別遺物出土量(個体数)



では20.7%のものに煤が付着していた。近世初期の資料では、中世前期のものより、煤の付着率はやや高いが、いずれの場合も煤が付着する製品は少数派である。このことは、室堂遺跡において土師器皿を使用する主な目的は灯明用ではなく、食膳おそらくは儀式・祭的な色彩の強い食膳に用いたことを示唆しているのであろう。

なお全出土遺物中で土師器皿以外の、例えば越中瀬戸皿などに煤が付着している例は存在しない。そして18世紀以後には、少量であるが京焼系陶器證明台を使用した。

**層位毎の近世土師器皿分類別比率**：室堂遺跡石垣の発掘によって得た近世土師器の層位資料に基づいて型式学的な考察を加える。まず土師器皿を形態と調整によって以下のように分類して計測した。第4図は下に示した分類別土師器皿の層位別の構成比である。

- A類：体部は外傾して口縁端部が尖るもの
- B類：体部は外傾して端部が丸いもの
- C類：体部は外傾して端部が外反するもの
- D類：体部は内湾して端部が尖るもの
- E類：体部が内湾して端部が丸いもの
- F類：橢円成形のもの

石垣黄褐色粘質土（石垣造築時の面で石垣最下層）、炭混黒褐色粘質土（黄褐色粘質土の上層であり大量の土師皿が炭と共に一括出土した層、第3層）、茶褐色粘質土（第2層）、灰褐色粘質土（石垣最上層、第1層）について比較を行なう。なお石垣最下層の資料は元和3年（1617）の、室堂再興に伴うものと推定できるものであり、茶褐色粘質土は18世紀を中心とする時期のものと推定している。

石垣の下層においては体部が外傾するA類・B類・C類が高い比率を示すが、上層の茶褐色粘質土ではそれぞれ30.9%、12.7%、10.6%と減少し、灰褐色粘質土でも一定の比率を保つ（3類あわせて54.9%）。特に分類中、型式的に16世紀末の白鳥城出土土師器（宇野1991）の系譜をひくと考えられるC類は最下層で一定量（23.2%）を占めるが、炭混黒褐色14.0%、茶褐色10.6%と上層にゆくにしたがって、その比率を減少させている。

これに対してD類・E類など体部を内湾させるものは炭混黒褐色粘質土で24%、茶褐色粘質土で37.9%と増加している。さらに体部が内湾するタイプの中でも、端部を尖らせるD類が、炭混黒褐色粘質土における19.5%から茶褐色粘質土での12.7%へと減少傾向を示し、端部を丸めるE類は逆に25%前後まで増加してきている。

以上のように、石垣下層では体部が外傾するものがほとんどであったが、茶褐色粘質土を境として上層ではこれが減少し、体部が内湾するものが主体を占めるようになる。また体部が内傾するものの中でも端部を尖らせるものから丸いものへと移る傾向に年代的な変

化が表れているようである。ただし本資料には層位資料という限界もあり、より具体的な型式学的変化や法量分化については、今後、より良い一括遺物を得て提示したい。

なお京都の近世土師器は、底部内面周縁に強い凹線、次いで沈線を施す特徴をもつが、このような特徴は室堂遺跡ではみることができない。このような在り方は、金沢城下の近世土師器が京都の土師器と間わりの深い型式をもつことと対照的である（増山 1992）。今後、このような現象の意味も考えていくたい。

#### (b) 土器・陶磁器の構成比率

第2次調査東トレンドで検出した上坑SK1、及び石垣から層位的に出土した資料をもとにして、各層の土器・陶磁器の組成を算出して比較した（第5図）。なお石垣茶褐色粘質土・石垣灰褐色粘質土出土品は一括性がやや乏しいが、その出土傾向はある程度把握できる資料である。

SK1では土師器皿が100%を占める。この土坑は、年代幅のある資料を含むかたづけ土坑であるため、越中中世土師器編年（宮田 1992）に従って、年代別に仕分けると、12世紀のもの31.9%、13世紀のもの26.4%、14世紀代のもの37.2%、不明4.5%となった。

石垣黄褐色粘質土でも土師器皿が100%を占めるが、これらは全て近世初期に属するものである。その上層の石垣炭混黒褐色土では、これに若干の瀬戸香炉（2.8%）越中瀬戸皿（4.9%）が加わるが、依然として土師器皿が90%以上を占めている。

さらに上層の茶褐色粘質土では土師器の比率が54.3%と減少し、代って越中瀬戸（15.6%）、唐津（0.8%）、京焼（13.6%）、瀬戸系陶器（9.3%）、伊万里系磁器（3.6%）と近世国産陶磁器類が増加する。出土品には年代幅のあるものを含んでいるが、これは17世紀末から18世紀にかけての頃の在り方を示すものであろう。

石垣最上層の灰褐色粘質土では土師器は11.2%と激減し、越中瀬戸の割合が飛躍的に増加する（80.3%）。この土層からは17世紀末から近代に至る時期の遺物が出土しているが中心は18世紀後半～19世紀前半頃にあるであろう。

以上、石垣においては炭混黒褐色粘質土と茶褐色粘質土の境の上層と下層とで土器・陶磁器の組成が大きく異なることが判明した。

これら中世前期の遺構出土資料、近世の層位資料の組成は、以下で述べる時期別に仕分けた資料の組成の傾向ともほぼ一致し、一定程度に有効な数値であると評価している。

#### (c) 時期別の出土量と組成

第6・7図は出土土器・陶磁器のうち、生産地での編年（宮田 1992、富山大学考古学研究室・石川考古学研究会 1993、吉岡康暢 1994）などによって年代を把握できたもの235片について、100年を単位としての出土量の変化を示したものである。第7図が口縁部計測法による個体数、第6図が破片数を用いた図である。ここではこの2種の図を用いながら

ら考察する。

室堂遺跡における遺物出土の盛期は2度ある。一つは14世紀をピークとする中世前期であり、もう一つは17世紀以降の近世である。そして最古の遺物は、越中上木窯産の須恵器2点であり、これは10世紀初めを中心とする時期の遺物である。11世紀の遺物は、今回の調査では確認できなかった。

そして12世紀中頃から遺物が安定して存在するようになり、14世紀にかけて遺物量は増加する傾向にある。その内容はほとんどが手づくね成形の土師器皿である。なお12世紀の土師器皿は、手づくね成形であり二段撫で、あるいは一段撫で口縁端部面取りをするなど、京都系土師器の影響が強く受けたものであるが、13世紀以後はその影響力は若干低下する。

またこれと並行して12世紀中頃から14世紀にかけて生産・流通量を増加させる石川県珠洲窯の壺・甕・すり鉢が序々に増加し、出土量の10%前後を占めるようになる。

そして遺物出土量は、14世紀にピークを迎えた後、15世紀には著しく減少する。とくに15世紀世纪末ないし16世紀初頭の土師器皿・珠洲すり鉢が少量存在して以後、16世紀の遺物は確認できず、空白期となっている。

17世紀には遺物量が著しく増加し、土師器皿を中心とした組成が復活する。また17世紀前半を中心とする越中瀬戸灰釉皿、大山窯の鉄釉碗などが21.4%を占めるようになった。

18世紀以後には越中瀬戸の占める比率が急増し、伊万里青磁花瓶・香炉、瀬戸の尾呂茶碗など様々な近世陶磁器類も出土するようになった。この時期には土師器皿の比率は7.6%と著しく低下する。18世紀の土師器皿と確認できたものは石垣最上層などで出土した底部と体部の境が明確であり、端部を撫でによってつまみ上げ尖らせて仕上げる大型品である。なお破片数による割合では18世紀代の遺物量が少ないが、これは越中瀬戸の年代を破片では正確に把握できないため、時期別データ化しえなかつたためである。

#### (d) 小　結

以上で検討した室堂遺跡出土遺物の様相をまとめておこう（第1～4表参照）。

出土土器の中では土師器が最大の比率を占めており、遺物の出土量が増加した中世前期はほとんど土師器一色の世界であると言ってもよい。これは中国製陶磁器類が珍しくない平野部の一般的な集落とは、やや異なる在り方である。これは中世室堂遺跡の特別な性格を反映しているのであろう。またその中世初期の土師器皿が京都の影響を特に強く受けていることも12世紀の頃に、当遺跡あるいは当地域と京都と間に密接な社会的関係が成立したことを示唆している。

15世紀になると遺物量が減少する傾向が生じ、16世紀は遺物の空白期である。そして、近世期になって再び遺物量が増加した。

17世紀、つまり近世初期以後には越中瀬戸、瀬戸など各種陶磁器が流入し近世的な様相

### 芦崎寺室堂遺跡

が表れてくる。しかしそれでも室堂遺跡では、17世紀においては土師器皿を中心とした世界を形成している。近世土師器の型式も京都系土師器の影響を直接的に受けたものではないが、なお中世以来の京都系土師皿の技法を残した手づくり成形の土師器皿が大半を占める。下界の遺跡の多くで土師器の役割が急速に低下していく時期に、中世と同様の土師器を主体とした特殊空間をつくりあげていることが、近世初期における本遺跡の特色を示していると言えるであろう。そして中・近世を通じて煤の付着する土師器皿の比率は低く、土師器皿は儀礼的な食膳具として使用されていたと考える。

18世紀にはこのような在り方が急速に変わってくる。すなわちこの頃を画期として土師器の比率が激減し、多様な陶磁器類にいろいろとされた近世的様相に変化しているのである。それは土師器の使用に象徴される中世的な儀礼・宗教性の払拭であったであろう。ただし、18世紀以後においても、越中瀬戸や伊万里の花瓶・香炉などの仏器を中心であり、染付類がほとんど存在しないこと等に遺跡の性格が表れており、近世室堂の宗教的世界を象徴している。

(中田書矢)

## 2 遺構

芦崎寺室堂遺跡において実施した第1・2次発掘調査によって、現存する室堂建物の建立年代とその変遷、また室堂を取り囲む石垣の築造年代、さらには17世紀以前の小礎石建物の存在が明らかになった。以下にその成果をまとめ、文献・絵画資料に表われる室堂建物との関係を考察しよう。

### (a) 北室礎石建物

現存する4間×5間の礎石建物は、17世紀初頭に2間×3間の建物として建立し、その後、18世紀初めの頃には4間×5間に拡張・再建したことが判明した。

その根拠としては、中央部の2間×3間の礎石堀形から17世紀初め頃の土師器が出土したのに対し、外側1間分の礎石堀形から18世紀前後の越中瀬戸が出土すること、北室の敷地内の東側と西側において、拡張に伴うとみられる顯著な盛土整地が看取されたこと、中央と外側では礎石や礎石堀形の大きさ、根石の配置、堀形埋土の色調が異なることが挙げられる。とりわけ、初期の建物は規模は小さいが、立体的に大きな礎石を使用していることが特徴的である。

なお2間×3間の建物については、その中心部の礎石が外側の拡張された際の礎石と同様の小さなものであることから、総柱ではなく、側柱建物であった可能性が高い。

近世において、総柱建物は極めて例外的なものであるが、本例は当初から総柱に計画されたものではなく、冬の積雪が10mを越える厳しい条件の中で建物を増築するために工夫されたものであることが判明したことは、大きな成果であった。

## (b) 北室下層遺構

北室の下層では上層とは異なる建物の礎石を検出した。個々の礎石は上層のものに比べてかなり小さく、それから推定される建物も2間×2間が一棟と、2間×1間以上のものが一棟というように小規模である。この建物は総柱建物であることから小規模な堂宇であった可能性がある。

またこの時期に伴なうものとして配石遺構と灰溜め土坑を検出した。灰溜め土坑からは15世紀末～16世紀初頭の土師器が出土し、建物もこの時期のものと推定できる。

## (c) 南室礎石建物

4間×5間の礎石堀形の多くから、寛永通宝・土師器・越中瀬戸・鉄製品・炭等が出土した。そして北室礎石建物のように、17世紀初めの土師器がまとまって出土する礎石堀形はなく、当初から大型総柱建物として、北室の増築と相前後する時期に建立したものであることが判明した。

また南室の南辺から、この建物に付属したであろう竹管と木製の連結具を用いた水道施設を検出した。これは室堂山莊の当主が知らない施設であるが、アラビア数字の番付があり、明治期頃のものと推定した。なおこのような水道施設には近世の例があり、室堂建物の増築時に設置して、改修してきたものである可能性が高いであろう。

この地区では、これ以前の建物の遺構は検出できなかった。なおこの地区の包含層からは立山町上末席で焼成した10世紀初め頃の須恵器杯の破片2点と、13世紀初め頃の和鏡の破片1点が出土している。これらは室堂再興以前の古代・中世における宗教活動の遺物である。

## (d) 土 坑 (SK1)

南室の南辺からは廐棄土坑と考える土坑を検出した。その中からは12世紀から14世紀にかけての多くの土師器皿と懸仏の破片が出土した。これらの遺物は室堂の礎石建物に関係したものではないが、前述の須恵器や和鏡と同じく近世における室堂再興以前の宗教活動を考える上で、大きな手掛かりになるものである。

## (e) 石 垣

石垣の調査からは、それが近世初頭に築造されたものであること、またその築造工事に際しては、土師器・中国銭・火（炭化物から）を用いた地鎮を行なっていることが判明した。のことによって、近世初頭の加賀藩の肝入りによる室堂再興が、かなり大規模なものであったことが明かとなった。

さらに石垣の下層からは珠洲などの中世前期に遡る遺物が出土し、この周辺に石垣築造以前の遺構が存在することが予想されたが、今回の調査では検出できなかった。

## (f) 文献・絵画資料との比較

発掘調査成果の他に、室堂の変遷を辿るもう一つの手段として文献や絵画資料がある。

## 芦崎寺室堂遺跡

今回これらの資料と発掘調査の結果を照らし合せることにより、より細かな年代と時代背景を推察することができた。まず文献上に残されている室堂の記録としては、下記のようなものがある。

- |               |  |
|---------------|--|
| 元和3年（1617）    | 「前藩主前田利長夫人正泉院が立山室堂を再興した」（「加賀藩資料」2）                                     |
| 寛文7年（1667）    | 「（加賀）藩主が建立（再建？）した」（「越中立山古文書」岩崎寺文書157）                                  |
| 正徳3年（1713）    | 「室堂4間5間、3棟」（「和漢三才図絵」地誌立山権現条）   |
| 宝曆2年（1752）    | 「加賀藩8代藩主前田重熙が寄進したものであり、室堂の管理は別当として岩崎寺の各坊の所管であった」（「越中国立山大権現諸參詣之室堂再建棟札」） |
| 文政9年（1826）    | 戊3月「一室堂三つ、内壇つ中絶」（「越中立山古文書」芦崎寺文書227）                                    |
| 明治9年県提出払い下げ願書 | 「北室は享保11年（1726）に、南室は明和8年（1771）に再建した」                                   |

これらの文献に残る室堂の記録と調査結果を照合してみると、まず北室の中央部2間×3間の建物と石垣は、元和3年（1617）の再建時に建立されたもの考えることができる。

そして北室を4間×5間に増築して、同規模の南室を増設した時期は、考古学的には土師器の量比が低下して越中瀬戸が増加する時期であり、寛永通寶発行以後のことである。それは今のところ、17世紀後半から18世紀初めの頃としか限定できない。文献資料と対比することによって、それはおそらく寛文7年（1667）から、正徳3年（1713）までの間のことであったと考えてよいであろう。以後は、同じ礎石の上で再建・補修を加えながら近代に至ったものであろう。

このように芦崎寺室堂が増改築を繰り返して拡大していく背景には、近世以降、立山が加賀前田家との結びつきを深め、加賀藩の肝入りによって諸堂舎を修築し、参詣者を多く集めるようになっていくという立山信仰の隆盛期の姿があると考えられる。

次に、絵画・立山曼陀羅に描く室堂の図と対比したい（第8・9図）。玉林坊本と呼ばれる19世紀前期の曼陀羅をはじめとして室堂に三棟の建物を描くものが多い。この内、妻を接して並ぶ2棟が拡張後の北室・南室であるとみなしてよいであろう。他の一棟は室堂前面の道路埋設工事によって失われている可能性が高い。この第3の建物は文政9年（1826）には廃絶していたものである。すなわち、これらの曼陀羅は立山信仰が大いに盛んとなった18世紀を中心とする時期の状況を描いていると考え得るのである。（大野淳也）



第8図 立山曼荼羅・玉林坊本写真（富山县立山博物館 1991より）



第9図 立山曼荼羅・玉林坊本部分拡大写真

### 3 立山信仰の時期区分

近年になって山岳宗教関係の遺跡の調査が進みつつあり、これらの物質資料を考古学的方法で分析することによって、新しい山岳宗教史を描くことが可能となってきた。このような中で今回の芦嶠寺室堂遺跡の発掘調査を行ない、信仰に関係した多くの遺構・遺物を得たのである。

ここではこの発掘資料と、従来から知られている立山連峰の既発見遺構・遺物を総合して、その時期別の在り方から、立山信仰の軌跡をたどっていきたい。これら遺構・遺物の分布状況や遺物の出土量などから立山における宗教活動を、以下の5期に大別した。

#### 立山1期（8世紀後半～9世紀）

剣岳山頂遺跡と大日岳の周辺から、8世紀後半～9世紀初めと考えられる銅製錫杖頭などが出土しており、この時期には立山連峰山中における宗教活動が始まったと考えることができる。

この時期の遺物は剣岳と大日岳の山系に限って分布していることや、剣岳と大日岳の立地関係（大日岳は剣岳に比して低山であり、奥大日岳の周辺からは谷を挟んで剣岳の山容が間近に望まれる）などから、立山1期において信仰の対象となったのは剣岳であり、大日岳は剣岳を遙拝する場として機能していたと考えられる。また、この時期の宗教活動の内容は、堂舎の遺構が発見されておらず、遺物の出土量も少ないとから、大日岳の周辺にある行者窟や剣岳山頂の岩窟などをを利用して籠山修業をおこなう小規模なものであったであろう。

#### 立山2期（10世紀～12世紀初め）

芦嶠寺室堂遺跡から10世紀初め頃の立山町上末窯で焼成した須恵器杯の破片2点が出土しており、この時期に室堂平への修業者の進出があったことを推測できる。この時期に該当する確実な資料はこの須恵器以外には見当たらないが、昭和37年の富山県教育委員会による玉殿・虚空蔵両窟の調査の際の出土品中に「茶色がかった黄褐色のものあり」「焼成は固く須恵の系統を引くものであった」と記述されるものがある。今回の調査で出土した須恵器杯とあわせて考えるならば、これが須恵器であった可能性は高いであろう。そして玉殿窟から須恵器が出土したとするならば、玉殿窟の使用開始時期の下限を10世紀とすることが可能である。

このような時期の遺物が、雄山を遙拝する室堂平とその周辺の地から出土したことは、後に確立した雄山を中心とする立山信仰の成立を考える上で重要であり、その初期的段階に位置づけ得るものと考える。また、剣岳からは現在のところ立山1期以降の遺物が発見されておらず、この時期の遺物が室堂平とその周辺にのみ分布している状況などから、2

期には登拝・修業の場の中心が劍岳から室堂平の周辺に移動したことが考えられる。

なお劍岳の裏・黒部峡谷の仙人谷にある仙人岩屋から南北朝期の石仏が発見されているが、これは劍岳とは別の性格のものであろう。そして劍岳に対する遙拝は立山1期以降も続いたが、劍岳を積極的に行場とすることは少なくなっていたと考える。

上記の遺物が室堂平にもたらされた9世紀末～10世紀初頭の時期はまた、「伊呂波字類抄」(10巻本)において立山開山の祖とする佐伯有若や、「師資相承」に「越中立山建立」の業績を記す天台宗寺門派の祖・康済が実在した時期であり、さらには『新猿樂記』に立山が「大駿者次郎修練の場」であると記すなど、立山登拝の事実が文献上に反映され始めた時期でもあった。

11世紀～12世紀初頭にかけての時期に該当する確実な遺物は室堂平周辺からは発見されていないが、長久4年(1043)の『本朝法華駿記』や12世紀前半の『今昔物語集』に立山の地獄に関する説話があることから(立山町1977)，この頃にも室堂周辺に修業者が往来していたことを推察できる。

#### 立山3期(12世紀中頃～14世紀)

芦峠寺室堂遺跡SK1出土遺物の分析から、12世紀中頃から14世紀にかけて、土師器を主体とした遺物量が増加することが判明した。また、虚空藏窟から出土した北宋銭(治平元宝・至和元宝)や、地獄谷で確認された14世紀に遡ると考えられる宝篋印塔や青石地蔵などの石造物、雄山三の越から採集された12～13世紀の珠洲経筒外容器破片などの遺物がこの時期に該当するであろう。

これらの遺物から、12世紀頃から室堂平とその周辺での僧侶・修業者の宗教活動が活発化し始め、14世紀まで盛んとなっていったこと、また雄山への登拝も遅くとも13世紀頃までには行われたことを推察できる。

#### 立山4期(15世紀～16世紀)

今回の発掘結果から、芦峠寺室堂遺跡の地には15世紀末頃には小規模な建物が建立されていたことが判明したが、出土遺物の分析結果からは15世紀にはいると遺物量が減少し、16世紀には遺物がほとんど存在しなくなったことが判った。

室堂周辺においてこの時期に該当する遺物としては、15世紀のものと考えられる地獄谷の組合せ式宝篋印塔や雄山山頂から発見された大永四年(1524)在銘の金銅製法華經納札などがあるが、これらを合せて山中における遺物量は立山3期に比べて少量である。

今後の調査によっては、当期に該当する遺物や遺構が増加する可能性も残されているが、現在の時点では遺物量の減少という現象から、この時期の立山山中における宗教活動は衰退傾向にあったと推察したい。

### 立山5期（17世紀～19世紀中頃）

芦嶺寺室堂遺跡では17世紀初頭と考えられる2間×3間の礎石建物の建立と石垣の築造にともなって再び遺物量が増加し、その後18世紀初めには実在した礎石建物の増改築にともなって、異なる発展があった。それは室堂の整備によって一度に多くの人の宿泊が可能となった結果、登拝者の数が激増したことを示すと考えられる。あるいは登拝者の増加に対応するために、室堂を整備したと考えることも可能であろう。周辺の石仏なども近世のものが激増しているのは、こうした背景によるものと推察できる。

室堂遺跡の出土遺物の分析によって、18世紀を境として土師器の使用量が激減し、代って陶磁器類の使用が増加したことが判明している。それらは、まだ下界の様相とは性質を異にするところが多いが、立山における登拝の宗教的な意味が変質しつつあったことを感じさせるものである。

（大野淳也）

## 4 結 語

富山県の東に連なる立山連峰は、北アルプスの3000m級の山々から成る。中でもひとときわ観く聲える剣岳と、なだらかで優しさを感じさせる立山は、今も四季を通じて人の心を打ち、呼び寄せる靈力を失っていない。

立山登山は、若者の成人式にあるという宗教的な意味が最近まであり、今も山伏姿で登山する修験の末裔の方々がいる。またそこには林業・狩猟をはじめとする各種の山の営みがあり、山麓では越中瀬戸の窯場が今も煙を絶やさない。そして米所富山の農業生産は、山に降り積もる雪が融けて流れ落ちる水の恵みによるものであり、その年の収穫の豊凶を積雪の深さで占う神事がある。

調査地に現存した、立山芦嶺寺室堂は18世紀に建築され、つい最近まで使用されていた山岳宗教関係建築物である。標高約2450mの室堂平の奥にあるこの大型総柱建物は、人間界と靈界を分かつ布橋を渡った人々が最後に到着する宿坊であった。そして参詣者はここで業を積み、また山頂の雄山神社本殿にむけて出立した。

冬の10mを越す積雪と風速50m以上の強風に300年間近くも耐えてきたこの建物を解体修理するに際して、発掘調査を実施した結果、私達は遺構・遺物から、山と人の関わりとその変容の歴史の一端に触れることができ、前述のようにそれを5期に分けて理解した。ここで若干の歴史的な背景を含めて、その成果を再掲しておこう。

立山1期は8世紀後半から9世紀である。越中新川郡の、立山（多知夜麻）に、うしはきいます神がいることを歌に詠んだのは8世紀中頃に越中に国司として赴任した大伴家持であった。発掘調査地区ではこの時期の資料は出土しなかったが、これに後続する時期の銅製錫杖が、剣岳山頂と大日岳で得られている。この頃の「たち山」は立山ではなく剣岳

であり、立山芦峅寺室堂遺跡とは同じ標高の大日岳山頂が、それを遥拝する聖地であったのであろう。

立山信仰の始まりがいつのことであるかを確定することは難しいが、室堂遺跡で遺構・遺物が未発見であるが立山連峰に仏教関係遺物が現われはじめるのが8世紀後半～末の頃である。この時期に雪山を下界から仰ぎ見るだけではなく、立山連峰でも最も急速な3000m級の山の山頂部まで、人おそらくは錫杖をもった僧侶が登ったと考えられる。

8世紀中頃は、東大寺大仏を鋳造し、全国に国分寺を造営した時代であった。そこで活動するような僧侶、また私度僧も含めて、教学をおさめると同時に肉体的な山林修業を行なうことを必要としたことが、人が深山に入った第一の理由であったであろう。北陸においても、石川県金沢市三子牛ハバ遺跡をはじめとして、この頃から山中の仏教遺跡が目立つようになってくる。しかし、宗教的な問題だけが開山の理由ではなかったであろう。

律令国家は、金・銅・鉄・木材・黒糸を初めとする山林資源の開発を積極的におこなっている。劍岳山頂に登山する事は、簡単にできるものではなく、山を知悉するか、知悉した人々の助力を得なければならぬ。その過程で、山麓から山頂に至る山の資源情報が得られたことは、想像に難くない。律令国家は、僧侶自身の活動そのものは、得度・布教・土地所有を含めて厳しく制限しているが、官的な僧を山に派遣することによって、このような山の情報をつかんだものと推察したい。

仏教以前から存在したであろう山を畏敬する神祇信仰と、山林修業を行なう仏教とは、古代においてはかなり性質を異にするものであった。7世紀以後、古墳を営んでいたような場所に、手工業生産地を編成するというような事例が増加してくるが、律令国家の基本的な課題の一つは、仏教を有力な梃として、在来宗教の聖地まで国家政策の場として組み込むことにあるであらう。

すなわちこの頃の開山とは、その山並の最も険しい場所にまで僧侶が実際に足を踏み入れることであり、山の神々を仏の権威の下に位置づけるという性質のものであったであらう。山岳宗教の開山伝承のはとんどが律令国家または国家仏教の確立期である7世紀末・8世紀前半頃に集中するのは、事実か否かは別として理由のあることに違いない。「たち山」においても、8世紀後半～9世紀の頃には、このような状況があった。そしてそれがさらに遡るか否かが、大伴家持の歌の意味を理解する鍵ともなるであらう。

立山2期は、9世紀末・10世紀初め頃から12世紀初め頃にかけての時期である。ごくわずかではあるが、室堂遺跡において遺物が出土するようになり、立山が開山されたことを示唆する。まだ資料は乏しいが、それは山頂の雄山神社付近を淨土と仰ぎ、地獄谷と対比しつつ、王殿窟・流付近で修業するという、一つの山で完結する形態をとるものであったであらう。

## 芦軒寺室堂遺跡

9世紀末・10世紀初めという時期は、立山縁起に名を残す越中守佐伯有若や、立山建立を伝える天台宗寺門派康済律師の活躍期と一致する。その開山の詳細は明らかではないが、力を蓄えつつある在地有力者と、新興の大台密教という新しい時代を担う人々が関与して立山を開いたものであろう。

鶴岳は、今も遭難者が絶えない険しい山であるが、立山は美女平や室堂平という広い高原があるなどらかな山であり、最近では年間100万人を越える人々が訪れている。開山当時に、このような将来のことを予測していたとは思えないが、信仰の場を選地する考えは、立山1期とは大きく変わってきている。おそらく、より裾野の広い独自の宗教活動を行なうことを意図していたのであろう。その宗教の内容は、密教を基調としつつ神仏が習合して、山を畏敬する性格をもつものであったに違いない。

室堂遺跡で出土したこの時期の資料はごくわずかであり、立山2期の宗教活動の実態については、山頂部や窟周辺また山麓施設の調査に待たなければならない。しかし中世において立山の山岳宗教勢力が無視できない力を持つようになる出発点は、当期の新しい動向にあったであろう。

立山3期は、12世紀中頃～14世紀である。近世以前では、出土資料が最も多い時期である。すなわち12世紀の頃から遺物は安定して存在するようになり、14世紀にかけて漸増していく傾向がある。遺構は、土坑が一基のみではあるが、これらの出土資料は室堂平における石造物とあわせて、人々の活動が活発化してきたことを示すに充分なものがある。

この時期には、立山地獄が『今昔物語』等に現われるだけではなく、立山芦軒寺と岩峰寺が、しばしば莊園・軍事関係文書に登場する。山岳宗教は、山を拠点としつつ世俗的な力ももつ勢力として、当時の全国的な社会情勢に関わるまでに成長していたのであろう。

この時期の出土品中には、和鏡・懸仏破片のように直接に宗教的な器物を含んでいるが、特に土器類の構成に山岳宗教の場としての特色が表われている。すなわち、中世の各期を通じて、土器（土師器）食膳具と珠洲貯蔵・調理具という極めて簡素な構成をとる。この時期、下界では、中国製の施釉陶磁器類が珍しくないことを考へるならば、無釉の土器・陶器の宗教的な側面、また窯業と宗教勢力との関わりを示すものであろう。その土器は、約95%が京都系のものであり、立山山岳宗教勢力の性格の一端を示している。この傾向は、下界とも連動し、北陸は畿内以外では、京都系土器が最も多い地域となっている。

立山4期は15・16世紀である。この時期に、確認できる資料は、著しく少なくなった。とりわけ、15世紀末・16世紀初め頃に、若干の遺物と小型礎石建物（2間×2間）が存在して以後、16世紀はほとんど空白期となっている。塔堂本尊に寄進された天文16年（1547年）銘黄銅製仏頭鉢等から、この時期にも山岳宗教の活動は続いていることは疑えない。ただしこの頃に、立山全体でも確認できる資料が少なくなる。またこの時期、一向一揆や

武家勢力が力を増して、白山・医王山・立山に代表される北陸の山岳宗教勢力は、社会的影響力をかなり後退させている。新たな時代の動向の影響を受けつつ、山岳宗教の活動が、相対的に低下したものと推定しておきたい。

立山5期は17世紀～19世紀中頃である。17世紀初め頃、室堂遺跡発掘地区に造成を加えて、現存する石垣を築いた。そして大型の礎石を用いた2間×3間の建物を1棟建築している。出土土器の年代からみてそれらが、元和3年（1617）に加賀藩前藩主前田利長夫人玉泉院が立山室堂を再興したとする記録に関係するものであることはほぼ間違いない。この時点から、立山信仰は飛躍的に発展していくこととなる。

次いで上記の礎石建物を4間×5間の総柱建物として拡張し、その南に同規模の建物を増設した。これが室堂北室・南室であり、さらに1棟が存在した可能性が高い。その拡張・増設の時期の判定は、難しいところがあるが、「和漢三才図絵」立山権現条に「室堂4間5間、3棟」と記す正徳3年（1713）には、今に近い姿となっていたであろう。このような建物の変化と出土遺物量の増加は、ここに訪れる人々が急増したことを示している。

室堂再興期の出土土器類では、土器が大多数を占めている。下界では、この頃、国産施釉陶器が主流であることが多くなることと比較して、やはり宗教色が濃厚であると言えるであろう。ただし創業されて間もない山籠の越中瀬戸窯の施釉陶器が少量ではあるが、加わってきていることは大きな変化である。そして、室堂建物の拡張時に設置した礎石脇形内の出土品では、多くが越中瀬戸窯の製品となった。それは中世的な宗教色が薄れて、近代の観光登山へのはしりが生じてきたとも位置づけることができるものであろう。

ただし近世を通じて、この場が大衆化しつつも近世的な宗教性を保持したことは、無地の食器を基本として、また德利がないことからうかがえる。17世紀後半以後の下界では、伊万里染付類が定量存在するのが常であるが、ここでは染付は非常に例外的であり、伊万里は青磁器類がほとんどを占める。そして大多数は黒一色である越中瀬戸の鉄釉製品であり、同様の性格をもつ瀬戸・京焼類が少量存在した。宿坊に伝世された漆器食膳具が、朱一色か黒一色の製品を基本としていることも同じ理由からであろう。

近代初頭に至ると、廢仏毀釈・修驗禁止等の国の政策によって立山信仰も大きく変わってくる。これ以後現代までを立山6期としてよいであろう。この間、山岳宗教は雄山神社を中心として展開し、観光登山の山として発展してきた。そして、室堂建物は払い下げられて、日本最古の山小屋として、さらに多くの人々が宿泊することになった。発掘調査出土品には、第2次大戦以前の、ビール・清涼飲料・薬品の瓶類や、堀川小学校の校章、登山ガイドの鑑札はじめ、近代の立山登山の特色を示す色々のものが含まれている。

今、室堂の横には室堂の後身建物である室堂山荘があり、さらに多くの人々で賑わっている。私達がここに宿泊して立山信仰の遺跡を発掘したこと、この地の歴史のひとコマ

となるであろう。

以上のように、立山信仰は世俗と別の世界にあったのではなく、律令国家期以後、現代に至るまで、その時々の日本の社会の動向と密接に連動して生成し、山岳宗教史上に一つの典型例を提供しているのである。 (宇野隆夫・前川 要・三鍋秀典)

## 付 章 自然科学的調査の成果

- 焚火実験による焼成領域の電磁気調査
- 立山室堂における山岳宗教遺跡の電磁気調査

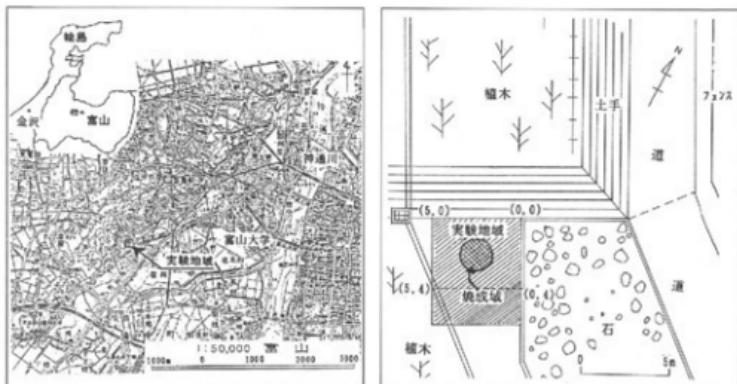


# 焚火実験による焼成領域の電磁気調査

富山大学理学部 酒井英男, 平井 徹, 山田剛士  
中国上海市地質局 張 忠良, 田中保士

## 1.はじめに

縄文時代の野焼き遺構や旧人類の埋葬場等は、焼成温度が低く考古学調査による遺構の確認は困難な場合も多い。そうした遺構の焼土の領域は、電磁気物性の違いから調査できる可能性がある(真鍋:1986, 井口ほか:1986, 加藤ほか:1988)。本研究では、野焼き等に伴う土壤の磁気物性の変化および電磁気探査による焼成域の検出方法の開発を目的として、焚火による焼成実験を行った。実験地は富山大学教育学部附属の自然観察センターの敷地内(図1)であり、土壤は火山岩起源の細粒粒子を含む(小林武彦教授・私信)。焼成前後の電磁気探査と焼土の磁化測定を実施した。



第1図 焼成実験を行った富山大学自然観察センターの実験地の概略図

## 2. 焚火を用いた焼成実験

平坦地の直径約2mの範囲で薪や葉を2時間燃やした。実験中にアルメル・クロメル熱電対による温度測定を焼成域の幾つかの地点の地下5cmで行った所、火力が強い時で、最高250°Cの温度上昇が認められた。焼成後に各種の探査を、焚火中心を開む4m×5mの範

## 芦嶺寺室堂遺跡

開において25cm間隔の精度で行った。探査実施後に磁化測定用の試料を定位で採集した。

探査としてEM-38型（Geonics社）装置による電磁法探査と、磁気探査を実施した。磁気探査では、プロトン磁力計（Barringer GM-122型）、フラックスゲート磁力計（Geoscan FM-18型）および帯磁率計（Bartington MS-2型）を使用した。手法と装置の詳細は他の文献（例えばClark：1990、酒井ほか：1991、1993）等を参照されたい。

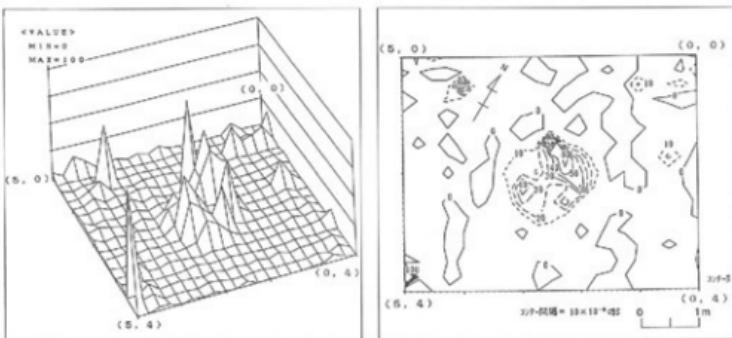
### 3. 調査結果

#### 3-1. 全磁力探査と磁気傾度探査

プロトン磁力計（センサー高度40cm）による全磁力探査とフラックスゲート磁力計で得た磁気傾度調査では、探査地域東側の側溝の影響が大きかった。焼成前後の差で側溝の異常は取り除ける筈だが、測定座標の再現性の誤差の為に結果には側溝の影響が残ったと考える。焼成に伴う明確な磁気異常は認められなかった。

#### 3-2. 帯磁率探査

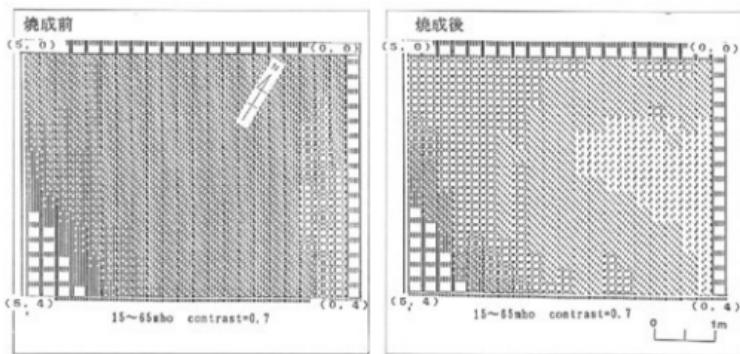
焼成前の帯磁率は、殆どの地域で  $1 \times 10^{-5}$  cgs程度と比較的平坦な分布を示したが、局所的に高い領域があった。焼成後に焼成域の帯磁率は約10倍強くなった。図2は焼成前後の差を示すが焼成中心部の帯磁率変化が顕著に認められる。焼成前の局所的な高帯磁率の領域は一部ノイズとして残っており、測定座標の再現誤差と考えられる。



第2図 焼成前後の帯磁率の差の三次元投影図（左図）と平面図（右図）

#### 3-3. 電磁法探査（導電率調査）

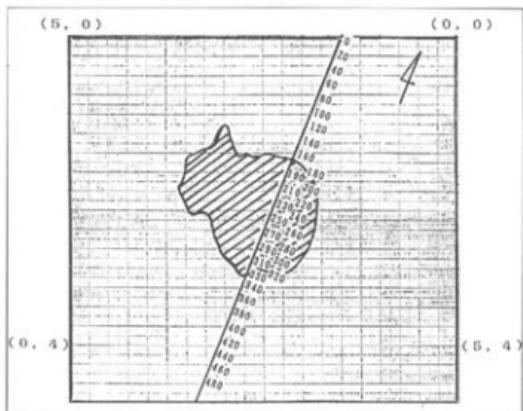
焼成前の導電率の分布は、北東側に30mho/mと低い地域が認められたが全体として40~50mho/mを示した。焼成後には、中心から北東側の導電率が10~20mho/mと低くなっている（図3）。焼成により導電率の低下が生じたと言える。



第3図 焼成前後の導電率変化を示す。ドットの濃淡は導電率の変化の高低を示す。

### 3-4. 残留磁化及び帯磁率測定

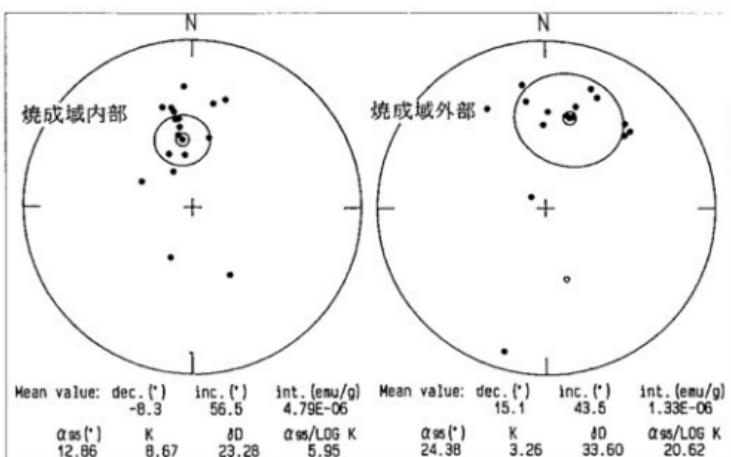
焼成部のはば中心を通る南北測線上で、焼成域内部は10cm間隔で、外部は20cm間隔で磁化測定試料を採取した(図4)。試料はポリカーボネイト製のキューブ(10.7cc)で採集した。また地下への熱影響の調査の為に、250cm地点において地下5cmと10cmの深度の試料も採集した。図4は計35試料の採取地点を焼成部のスケッチと共に示している。



第4図 焼成部分(斜線)と南北測線上の試料採取地点

試料は焼成実験3ヶ月後に採取しており、土壌は雨や風雪等で乱され二次磁化の付着も懸念されたが、古代の焼成遺構でも同様な条件が考えられる。図5には超伝導磁力計(CCL

GM-122型)による各試料の磁化の測定結果を、焼成域内部と外部とに分けてシュミットネットに投影した。表1は磁化測定の結果を示す。



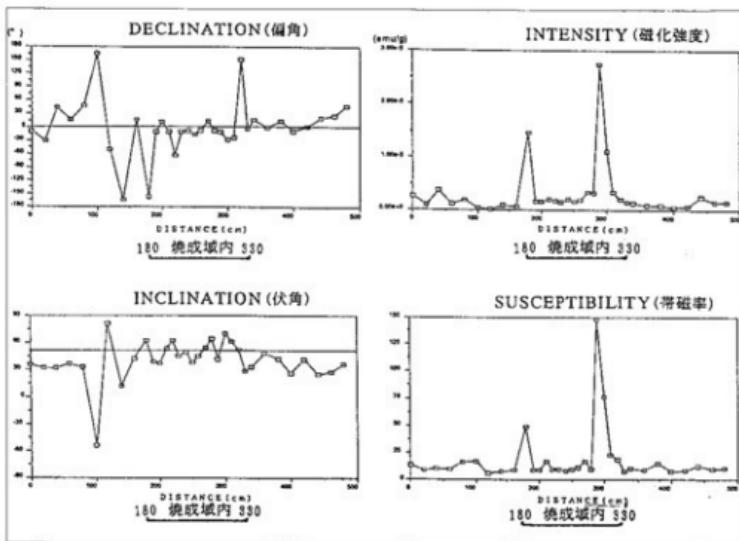
第5図 焼成域内部と外部の自然残留磁化のシュミット投影図

第1表 土壤の磁化測定結果。偏角、伏角、磁化強度および磁化方向の統計的な集中度を示す。

	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (Am <sup>2</sup> /kg) x 10 <sup>-6</sup>	$\alpha_{95}$ (°)	K	$\delta D$	$\alpha_{95}/\log K$
焼成域内	-8.3	56.5	4.79	12.9	8.7	23.3	6.0
焼成域外	15.1	43.5	1.33	24.4	3.3	33.6	20.6
250cm 深度 2.5cm	-16.7	37.8	1.58				
5.0cm	-9.4	32.1	2.05				
10.0cm	12.6	54.8	1.54				

焼成域内は外部に比べ磁化は集中しており、磁化方位は現在の地磁気方向に近い。磁化強度も強くなっているが、焼成域内の平均 $4.79 \times 10^{-6}$  (Am<sup>2</sup>/kg) の値は熱残留磁化としては弱く、試料は十分に高温まで焼成されていないと考えられる。磁化強度・帯磁率・偏角・伏角を縦軸に、採集地点の距離を横軸にとって変化をみた(図6)。180cm~330cmの範囲が焼成域内にあたる。磁化強度は180, 290, 300cm地点で強いが、それ以外では焼成域内の磁化は外部より僅かに強い程度である。帯磁率も同様な変化を示した。偏角はばらつき

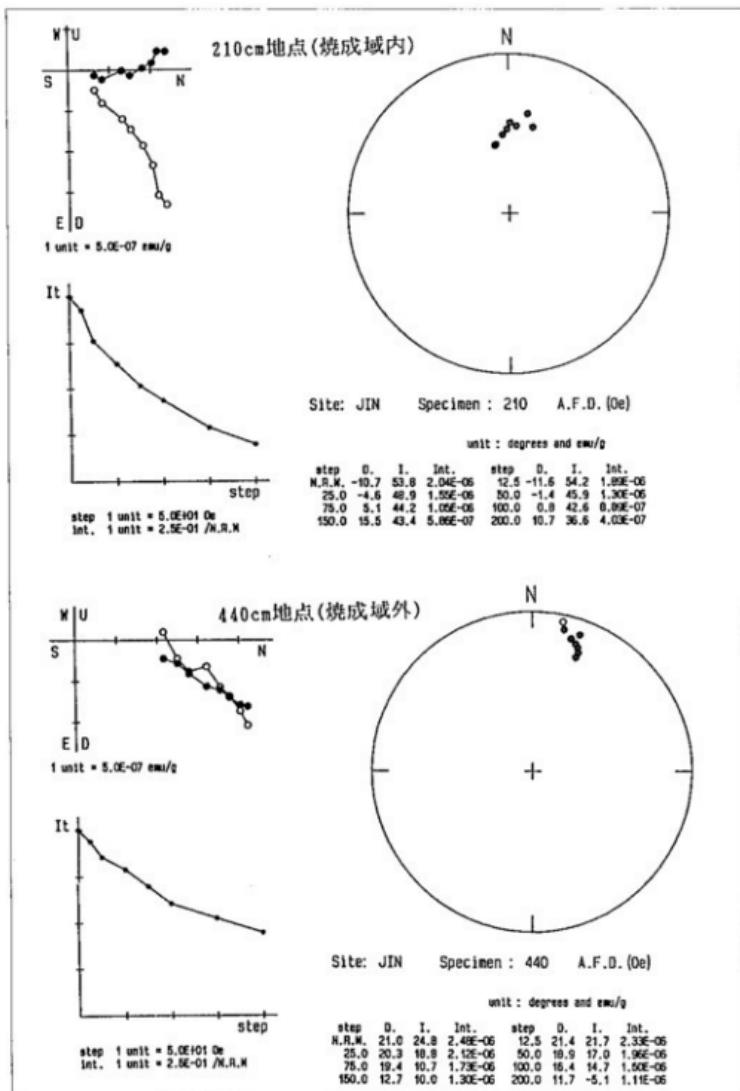
が多いものの、焼成域内の方位は磁北に近い。伏角は焼成域内で現在値 ( $50^{\circ} 12'$ ) に近いが、外部は100cmを除いて30~40°付近を示した。100cm地点の試料の逆帯磁は採集時の方位付けのミスと思われる。



第6図 右には磁化強度(上図)と帶磁率(下図)の変化を、左には偏角(上図)と伏角(下図)を示す。

250cm地点の残留磁化の深度変化を表1に示している。深度が浅いほど磁化も強いと予想されたが、深度5cmの値が僅かに強いものの磁化強度の変化は余りない。焼成時の熱の影響は地表下へはあまり及んでいないと考えられる。

段階交流消磁を、焼成域内の4試料(210, 240, 300, 330cm地点)と外部の3試料(40, 100, 440cm地点)について行った。交流消磁は1.25, 2.5, 5, 7.5, 10, 15, 20mTのステップで行った。図7は焼成域内部と外側試料の交流消磁の代表的な例を示している。各試料のザイダーベルト図(各消磁段階の磁化ベクトルの端点を鉛直面および水平面に投影したもの)をみると、焼成域内部はかなり高い消磁段階まで磁化方向は現在の地磁気方向に近い。これは焼成域内の土壤の磁化はかなりの部分が焼成時に置き変わっていることを示唆する。磁化強度の変化では焼成内部の土壤の磁化が外部の土壤より交流消磁され易い傾向が見られた。



第7図 焼成域内(210cm地点)と外部(440cm地点)の磁化の交流消磁実験の結果。  
各結果を、サイダーベルト図(左上)、磁化強度変化図(左下)とシュミットネット投影図(右)で示している。

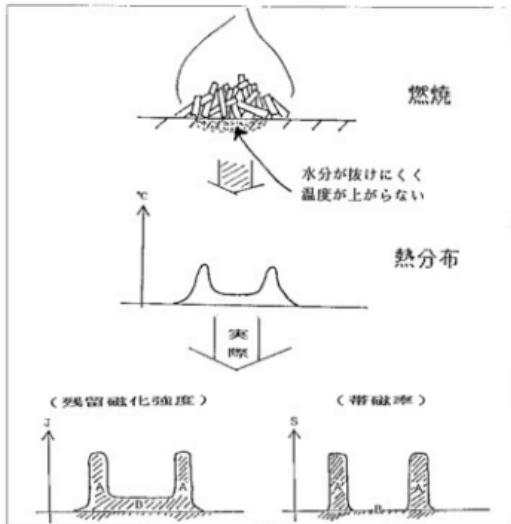
#### 4. 考察とまとめ

直径 2 m の範囲で 2 時間の焚火実験を行い焼成域の電磁気調査を実施した。

全磁力探査と磁気傾斜探査では明確な変化は認められなかった。これは、側溝の磁化の影響および磁力センサーが地表から離れ過ぎていたことが理由と考える。

帯磁率探査では、焼成後に直径 1 ~ 2 m の明確な変化 ( $\sim 100 \times 10^{-6}$  cgs) が現れ、焼成部と良く対応した。帯磁率探査ではセンサーを地表に当てており、表面の僅かな磁化特性の変化を捉えたと考えられる。この帯磁率変化は、土壤中の水酸化鉄 (FeOOH) などの非磁性鉱物が加熱によりマグネタイト ( $Fe_3O_4$ ) やヘマタイト ( $Fe_2O_3$ ) 等の磁性鉱物に変化して生じたと考える。

現地で採集した土壤試料の磁化強度を比較すると、焼成域の周縁部の磁化が中心部より強い傾向がある。帯磁率にも同様な傾向が認められる。これは、灰をかぶり中心部の土壤の温度が上がりにくかったことと合わせ、空気の流通が良い周縁部の方が非磁性の水酸化鉄から磁性を持つ鉱物への変化が大きい為と考える。つまり中心付近は土壤中の水分が抜ける上記の変化が余り進行しなかったと考える（図 8）。焼成域内と外側の土壤の磁化を比較すると焼成を被った磁化が交流消磁がされ易くなっている、これは磁性鉱物としてマグネタイトが形成された可能性を示唆する（図 7）。



第 8 図 焼成による熱分布および帯磁率と磁化強度の変化

## 芦崎寺室堂遺跡

EM-38電磁法による導電率探査で、焼成部は導電率の低い領域として捉えられた。同手法の詳細な調査は加熱による含水率の低下を検討できる手段となる可能性があり、磁化特性の変化との比較を今後の課題と考えている。

今回の実験では採集した試料の帯磁率と残留磁化の測定は、土壤の磁気物性の変化の調査に有効であった。探査では帯磁率探査が焼成部を良く捉えた。ただ、帯磁率の探査深度は浅いので、地中の埋没遺構の調査では探査精度は落ちると考えられる。EM-38装置のような導電率の測定、他の磁気探査においてセンサー高度を低くした調査法の検討も今後必要である。

焚火実験において加熱時間の延長および焼成の反復を行い、縄文時代の野焼き等により近い状況を想定した実験も必要と考える。

## 謝 辞

富山大学の広岡公夫教授には有益なアドバイスを頂いた。同大学の宇野隆夫教授と前川要助教授には、実験試料およびそれに関する多くの情報を提供して頂き、小林武彦教授には、実験地の土壤について御教示頂いた。研究調査に“田村財团研究助成金”を使用した。以上の方々に感謝申し上げる。

## 参考文献

- Clark A. (1990) : Seeing beneath the soil -- prospecting methods in archaeology --, B.T. Blatsford Ltd, London, 1990, pp176.
- 井口博夫・森永達夫・足立泰久・安川克乙・久保弘幸・藤田淳・井森徳男 (1986) : 古地磁気学的手法による旧石器遺跡の焚火跡推定, 地球電磁気学会予稿集.
- 真鍋健一 (1986) : 馬場壇A遺跡第20層上面の残留磁気測定, 馬場壇A遺跡I (東北歴史資料館資料集16), 東北歴史資料館・石器文化談話会, 151-153.
- 加藤隆司・小宮雅幸・並倉勉・酒井英男・広岡公夫 (1988) : 馬場壇A遺跡第20層上面における全磁力探査及び残留磁化測定, 馬場壇A遺跡II (東北歴史資料館資料集236), 東北歴史資料館・石器文化談話会, 93-101.
- 酒井英男・小林剛・広岡公夫・田中保士・東順一・胡麻景子 (1991) : 石川県羽咋市滝・柴垣製塩遺跡における電磁探査, 「能登滝・柴垣製塩遺跡群」, 富山大学考古学研究, 5, 真陽社, 115-127.
- 酒井英男・平井徹・広岡公夫 (1991) : 磁化測定による考古学遺物の熱履歴の検討, 「能登滝・柴垣製塩遺跡群」, 富山大学考古学研究, 5, 真陽社, 157-165.
- 酒井英男・平井徹 (1993) : 磁化から推定された登り窯の窯壁, 床面および周囲土壤の熱履歴, 「珠洲大畠窯」, 富山大学考古学研究, 6, 真陽社, 76-89.

# 立山室堂における山岳宗教遺跡の電磁気探査

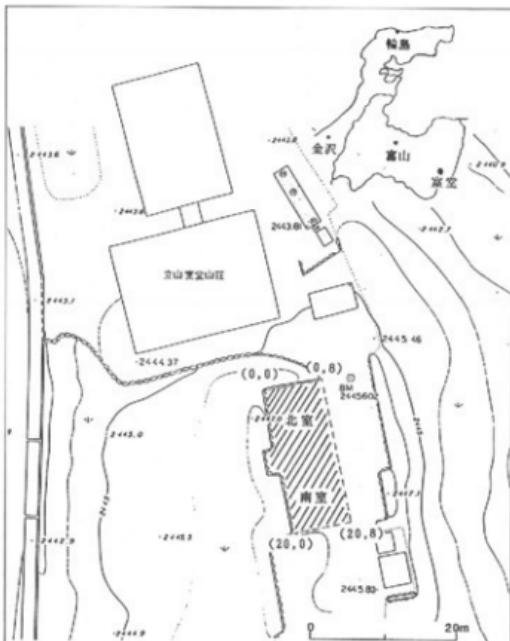
富山大学理学部 酒井英男, 山田剛士  
田中地質コンサルタント 田中保士

## 1. はじめに

標高2450mの高所に位置する室堂は、立山登山の出発点として毎年8月上旬をピークに全国各地からの人々で賑わっている。この室堂には、約270年前に建てられ現存の山小屋では日本最古といわれる、富山県指定文化財「立山の室堂」(室堂山荘、佐伯昇氏所有)がある。山荘の解体復元に伴い、同地域からその原型となる建物の礎石が発見された。1992年と1993年の夏に、立山町教育委員会と富山大学考古学教室による調査と発掘が行われることとなった。

1992年の発掘に先立ち電磁気探査を行った。探査は北室と南室(それぞれ約10m×8mの大きさ)を含む範囲で実施し(図1), 発掘調査と照合した。

探査法として磁気探査、電磁法探査と電気探査を利用した。磁気探査では、プロトン磁力計(Barringer GM-122型)による全磁力探査と、フラックスゲート磁力計(Bartington FM-18型)による磁場の鉛直勾配探査を実施した。電磁法探査(Geonics EM-38型)では導電率分布を、電気



第1図 立山室堂と探査地域(斜線部)の概略図。  
図中の座標(x, y)は図2~図5の探査結果と対応する。

## 芦崎寺室堂遺跡

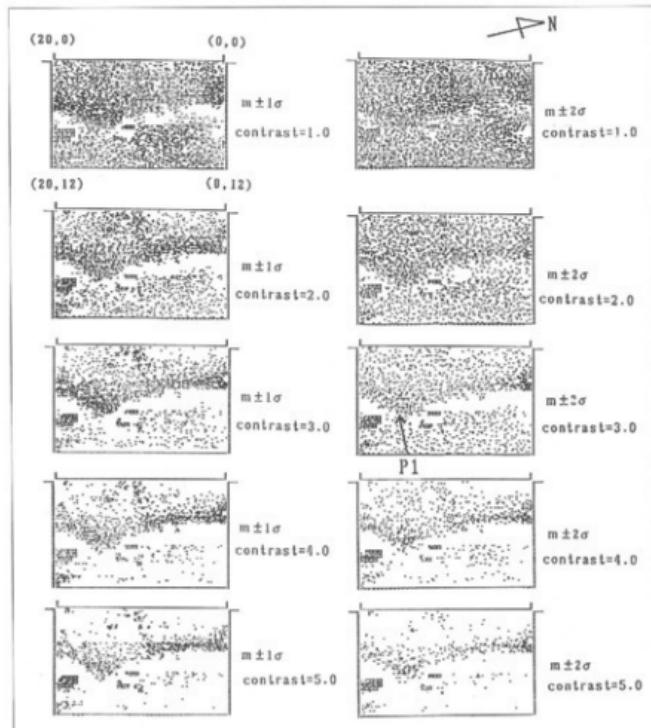
探査 (Geoscan RM-15型) では 2 極法を用いて比抵抗分布を調査した。調査手法の詳細は Clark (1990) や酒井ほか (1991, 1993) 等を参照されたい。

探査の際には、調査地域の釘などの金属は探査のノイズ源となるので事前に可能な限り排除した。

## 2. 探査結果

### 2-1 磁気探査

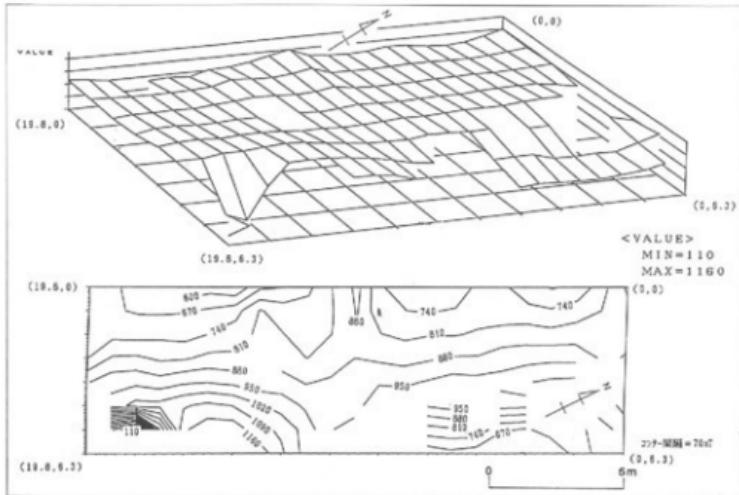
フラックスゲート磁気探査は範囲 ( $20\text{m} \times 12\text{m}$ ) を間隔50cmにて960点測定した。図2には得られた磁気傾度の分布をドットの濃淡で示した。磁気傾度の強い領域は濃く現れている。中央部をほぼ南北に伸びる強い磁場の領域と、その東側に帯状の弱い磁場の領域が認められ、地下の遺構を示唆する。また図2のP1地点に磁気異常の歪みが認められる。



第2図 フラックスゲート磁力計で得られた磁気傾度の分布をドットの濃淡で示した。  
各パターンは、解析条件のデータ範囲 (標準偏差 $\sigma$ と平均値 $m$ ) と、コントラストを変えて出力している。

探査範囲の東側 4 m にある現在の歩道の影響は認められない。

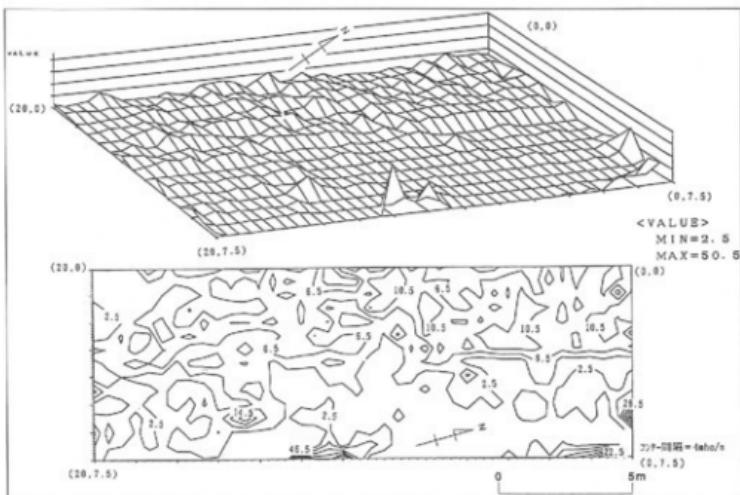
プロトン磁力計による全磁力探査は範囲 ( $19.8\text{m} \times 6.3\text{m}$ ) を間隔 90cm にて約 180 点で行った。磁気センサー高度は 100cm に設定した。地磁気は日変動しており、探査結果の解釈に必要なこの地磁気日変動の補正是、京大防災研・西天生観測点の観測記録を参照して行った。図 3 は探査から得られた全磁力分布を示す。フラックスゲート磁気探査と同様に、探査地域のはば中央を南北に伸びる磁場の強い領域が認められる。



第 3 図 全磁力の等磁力線分布の 3 次元図（上）と平面図（下）

## 2-2. 電磁法・導電率探査

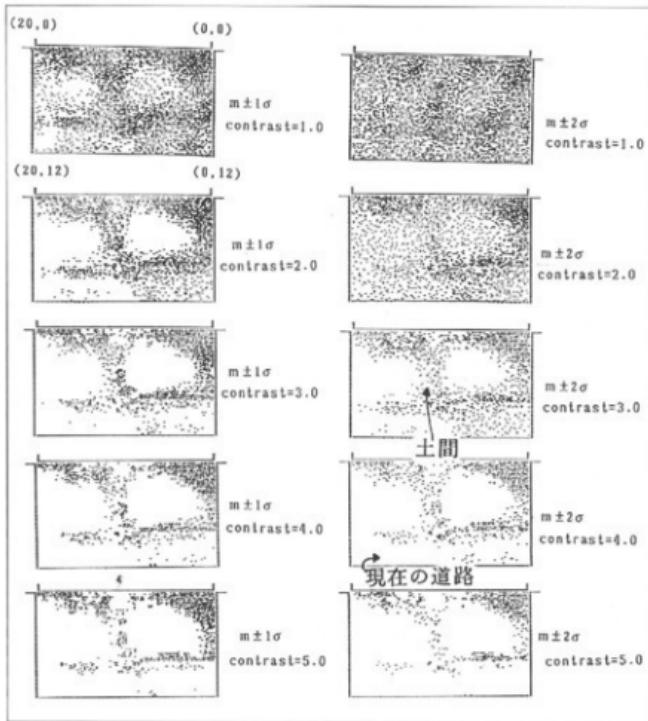
電磁法探査は範囲 ( $20\text{m} \times 7.5\text{m}$ ) を 50cm 間隔で行った。測点数は 600 点である。図 4 は探査から得られた導電率分布を示す。三次元投影図で特に明確に現れているが、探査範囲の西側が全体的に導電率が高い。これは調査地の西側と北側を囲む石垣の影響が考えられたが、石垣からの距離に伴う導電率の変化は認められず、石垣の影響ではない。つまり、導電率の高い地域は地下に周囲より電気比抵抗が高い領域があり二次磁場を発生していると考える。



第4図 導電率分布の三次元投影図（上図）と平面図（下図）

### 2-3. 電気探査

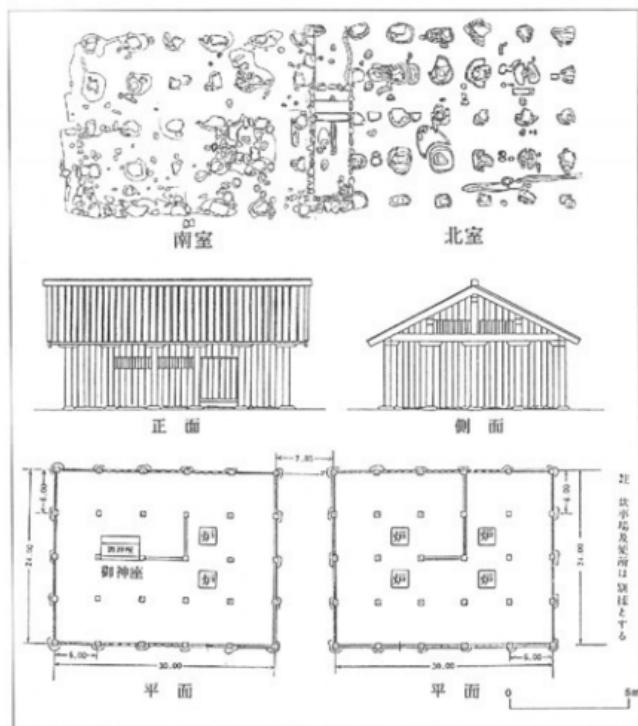
RM-15型装置による電気比抵抗の探査は範囲 ( $20\text{m} \times 12\text{m}$ ) を $50\text{cm}$ 間隔で行った。図5は、解析条件であるデータ範囲（平均値 $m$ と標準偏差 $\sigma$ ）と出力のコントラストを変えて得られた電気比抵抗の分布を示す。探査の数時間前から雨が降っており、地面の含水率増加の影響が懸念されたが<sup>6</sup>、結果を見る限り影響は無い。図中の白い部分は電気比抵抗の低い領域を示す。楕円形の低比抵抗の領域（長軸 $8\text{m}$ 、短軸 $5\text{m}$ ）が探査地域の東側と西側に現われている。この二領域に挟まれて出現した高比抵抗の帯状領域は発掘から土間と判明した。また現在の歩道は、低比抵抗域として認められた。こうした電気比抵抗の違いは地層の構成鉱物の種類、鉱物粒子間の孔隙を満たす水のイオン濃度や量などに依存すると考えられる。



第5図 電気比抵抗分布を平面図にドットの濃淡で示した。  
各パターンは、解析条件（平均値 $m$ と標準偏差 $\sigma$ ）のコントラストを変えている。

#### 4. 考 察

探査後の発掘から18世紀前後の越中瀬戸焼が見つかり、また敷地内の内側と外側で礎石の大きさや礎石の穴の大きさが違っていた（図6上）。発掘で得られた以上の知見と文献史料（加賀藩史料、越中立山古文書、和漢三才図鑑など）から、立山室堂が中央部（2間×3間）を17世紀初頭に再建され、更に18世紀初頭に外側四方に約1.8m広げられた（4間×5間）総柱建物であると考えられた。図6下は川上貢氏による室堂復元図（富山県教育委員会、1971）を表わしている。



第6図 立山室堂発掘図（上図）および立山室堂復元図（下図；富山県教育委員会 1971）

図2と図3に示す磁気探査で認められた中央部の磁場の強い領域は、図6の復元図で示される数か所の炉跡と対応した。加熱により土壤が獲得した強い熱残留磁化の影響と考えられる。また図2には、強く磁化した中央部に接して帯状の磁場の弱い領域が認められるが、18世紀前後の基壇再建の際に以前の基壇より外側に拡張された1間分の領域と一致している。基壇拡張の際に使用された土壤の磁化が周囲土壤より弱い為と考えられる。図3上には中央部から北西に統く、磁場の強い領域が認められ土間に対応した。発掘では土間が数回貼直されていることが確認されており、磁気異常は周囲土壤より土間の磁化強度が強くなっている為に生じたと解釈される。

電気探査では図5に示す格円状分布の低い電気比抵抗の領域が検出され、高床式建物の床下部分との対応が考えられた。また土間部は高比抵抗の領域として識別された。この差

は、踏み縮めの強弱が電気比抵抗に反映した為と考える。掘立柱建物には、土間で生活する平地式建物と床張りの高床式建物がある。また高床式建物でも、入口が上間である場合があったと考えられる。この二者は格式あるいは機能を大きく異なるもので、建物の性格や集落の構造を考える上で重要な要素になる。しかし従来は、この二者を実証的に区別することが難しく、建物の入口の場所すら判らないことが多かった（宇野隆夫教授・私信）。そのため今回の探査の成果は、画期的なものであると言ってよい。

電磁法探査では、探査範囲の西側半分の導電率が高い傾向が認められたが、発掘調査では対応する遺構構造は見られなかった。探査範囲が他の探査に比べ狭く、周囲の導電率との比較が十分でなかった可能性がある。

## 5. まとめ

標高2450mの山岳宗教遺跡における住居址の探査を行い、電気比抵抗の違いにより建築構造の相違をかなり識別できることが立証された。また、磁気探査も、基壇土壌の磁気的相違から建物再建の歴史について究明でき、生活空間の様子（炉など）を推測することができる、という利点を明らかにした。

以上の有効な手法は考古学において切望されていたもので、発掘調査の範囲、作業手順など効率に関わるだけでなく、遺跡の整備・保存計画の策定にも役立つ。今後、今回の様な電磁気探査と古地磁気測定（酒井ほか、1993）の併用で、掘立柱住居の上部構造、その中の生活空間と作業空間、あるいは火所を復元可能と考える。

遺跡探査は、対象物の違いにより有効な探査法も違う。各探査法の特徴を生かし、更に厳密な調査・解析を行えば、より現実味を帯びた成果を得、古代人類が我々に残してくれた有益な情報を明らかにすることが可能となり、考古学、更には人類学に対する貢献は大きいと考えられる。

## 謝 辞

富山大学人文学部の宇野隆夫教授と前川要助教授には、探査の便宜を図って頂き、また発掘結果との比較で議論を頂いた。立山町教育委員会の方々にも探査に際してお世話になった。地磁気日変動の補正に、京都大学防災研究所地盤予知センター・上宝観測所の記録を使用させて頂いた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

調査の一部に文部省科学研究費“重点領域・遺跡探査”を使用した。

参考文献

Clark A. (1990) : Seeing beneath the soil — prospecting methods in archaeology —, B.T. Blatsford Ltd, London, 1990, pp176.

酒井英男, 小林剛, 広岡公大, 胡麻景子, 東順一, 田中保士 (1991) : 石川県羽咋市滝・柴垣海岸の製塩遺跡における電磁気探査, 『能登滝・柴垣製塩遺跡群』, 富山大学考古学研究教室, 5, 真陽社, 115-127.

酒井英男, 小林剛, 山田剛士, 田中保士 (1993) : 石川県珠洲市大畠遺跡における登り窯の磁気探査, 『珠洲大畠窯』, 富山大学考古学研究, 6, 真陽社, 67-75.

酒井英男, 平井徹 (1993) : 磁化から推定された登り窯の窯壁, 床面および周囲土壌の熱履歴, 『珠洲大畠窯』, 富山大学考古学研究, 6, 真陽社, 76-89.

## 参考文献 (50音順)

- 石田 茂作 1967 「越中日石寺裏山経塚」『考古学雑誌』第42巻4号
- 石原 与作 1964 「立山信仰史に関する提言」『富山県地学地理学研究論集』第4集
- 宇野 隆夫 1991 「5白鳥城」「6安田城」「城館遺跡出土の土器・陶磁器」
- 宇野 隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
- 宇野 隆夫 1993 「日本海における中世の生産と流通」「遺跡にさぐる北日本」  
第14回祭博フォーラム'93市浦シンポジウム資料
- 宇野 隆夫 1994 「芦崎寺室堂遺跡第2次発掘調査の成果」「富山考古学会総会発表資料」
- 大和久震平 1989 「古式の錫杖」「山岳修験」第5号 山岳修験学会
- 大和久震平 1990 「古代山岳信仰遺跡の研究」  
—日光山地を中心とする山頂遺跡の一考察—
- 川上 貢 1987 「総柱建て・株持柱をもつ建物の遺構—越中立山の室堂—」  
『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立五周年記念誌—
- 京田 良志 1977 「石造美術」『立山町史』上巻 立山町
- 京田 良志 1976 「富山の石造美術」 富山文庫 5 巧玄出版
- 国学院大学白山山頂学術調査団 1988 「白山山頂学術調査報告」  
『国学院大学考古学資料館紀要』第4輯
- 後藤 玉樹 1993 「室堂山荘修復レポート よみがえる『拝殿』」『WOOD・PRO』No.20
- 高木 寂 1980 「立山に残る梵字の石碑」「日本の石仏」第14号
- 高瀬 重雄 1977 「立山信仰の歴史と文化」名著出版
- 立山町 1977 「立山町史」上巻
- 富山県福光町・医王山文化調査委員会 1993 「医王は語る」
- 富山県立山博物館 1991 「常設展示総合解説」
- 富山県教育委員会 1971 「風土記の丘(信仰遺産)」
- 富山県立山博物館 1991 「立山のこころとカタチ 立山曼荼羅の世界」
- 富山大学考古学研究室・石川考古学研究会 1993 「珠洲人窯」
- 富山大学考古学研究室 1989 「越中上末窯」
- 廣瀬 誠 1984 「立山黒部奥山の歴史と伝承」 桂書房
- 古川 知明 1984 「白鳥城跡調査概報」((4))
- 増山 仁 1992 「金沢城下出土の土師器(予報)」  
『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』

#### 参考文献

- 宮田 進一 1992 「越中における中世土師器の編年」  
『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
- 宮本 哲郎 1993 「立山採集遺物について」『大境』第15号 富山考古学会
- 山内 賢一・久々忠義 1988 「立山大狗平で採集された石鏡について」  
『大境』第12号 富山考古学会
- 山元 重男 1990 「立山信仰」「大山の歴史」
- 吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」古川弘文館

REPORT UPON ARCHAEOLOGICAL RESEARCH  
BY THE TATEYAMA TOWN VOL.18

## ASHIKURAJI MURODO SITE

A REPORT OF THE EXCAVATION OF THE  
MOUNTAIN BUDDHIST TEMPLE AND SHRINE SITE  
TOYAMA, JAPAN

BY

TAKAO UNO  
KANAME MAEKAWA  
HIDENORI MINABE  
JUNYA ÔNO  
KAKUYA NAKATA

### CONTENTS

- CHAPTER I Progress of research work
- II Geographical and historical environment
- III Excavation of Ashikuraji Murodo site and  
Measurement of Tamadono and Kokuzo cave  
site for ascetic practice
- IV Discussion and Conclusion
- V Natural scientific study

THE BOARD OF EDUCATION OF TATEYAMA TOWN  
THE TOYAMA UNIVERSITY  
1994



## Excavation at the Ashikuraji Murodo site

—Mountain Buddhist Temple and Shrine since 10th century to Modern times—

### Introduction

The Tateyama mountains are situated at the eastern part of Tateyama prefecture. And the Mount Tateyama (3003m above the sea level) is one of the three famous holy mountains in Japan (Mount Fuji, Mount Hakusan, Mount Tateyama). And the Ashikuraji Murodo site is situated at the Murodo Heights 2450m above the sea level of Mount Tateyama. The Murodo (室堂) was the last exercise hall and accommodation for climbing worshippers until recent times. And the architectures of Murodo were planed to dissolve and reconstruct at 1991, therefore we intended to excavate this site.

### Excavation

The excavation was carried out from 24th August to 3rd September 1992 and from 20th August to 30th August 1993. We found the 4 structures and one pit. And we excavated 1289 sherds of pottery and ceramics, 214 iron implements, 1 gilt bronze implement, 5 bronze implements, 3 stamps, 55 coins and 25 glass containers.

By our survey following important points are clarified:

- (1) The Ashikuraji Murodo site started at the early 10th century.
- (2) The Ashikuraji Murodo site was prospered from the mid 12th century to the 14th century.
- (3) The Ashikuraji Murodo site was revived at the early 17th century and prospered until Modern times. The architecture of Murodo was constructed at the early 17th century and extended at the early 18th century and used until recent times.

### Conclusion

The power of mountain buddhist temples and shrines played important part of Japanese history. And by our survey and other archaeological remains, we can divide the history of the religion of Tateyama mountains into 5 phases.

The 1st phase (From the mid 8th century to the 9th century): The Mount Turugi (2998m above sea level) the most steep mountain in Tateyama mountains was worshipped.

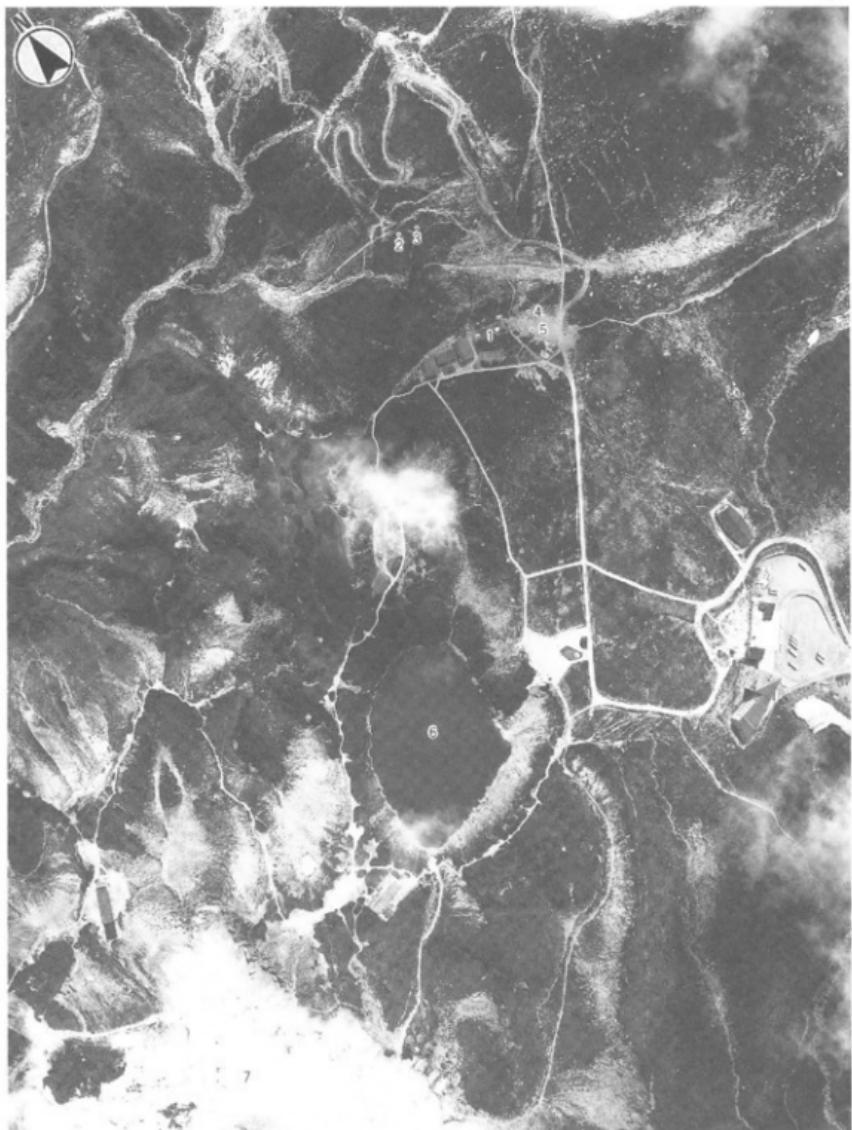
The 2nd phase (From the 10th century to the early 12th century): The Mount Tateyama the gently-sloping mountain was worshipped. And the popularization of religion of mountains were started.

The 3rd phase (From the mid 12th century to the 14th century): The power of religious organization of Mount Tateyama was allied with the court nobles of high standing in Kyoto. And They prospered flowery and described in medieval texts.

The 4th phase (From the 15th century to the 16th century): The power of religious organization was oppressed by warrior aristocracy (Samurai class). And the religious power of Mount Tateyama was declined.

The 5th phase (From the early 17th century to modern times): The feudal lord of Kaga clan started to promote the religious organization of Mount Tateyama. And the facilities of Mount Tateyama were revived and prospered until modern times.

# 図 版



1. 立山室堂遺跡 2. 玉殿岩屋 3. 虚空藏窟 4. 真言石 5. 名号碑 6. みくりが池 7. 地獄谷  
(縮尺: 約1/6700)

図版二 調査周辺遺跡分布図



1 芦嶠寺室堂遺跡 2 三ノ越 3 雄山山頂 4 鉤岳 5 行者窟  
6 七福図岩屋 7 大日岳 (■ 古代, ● 中世, ○ 近世)



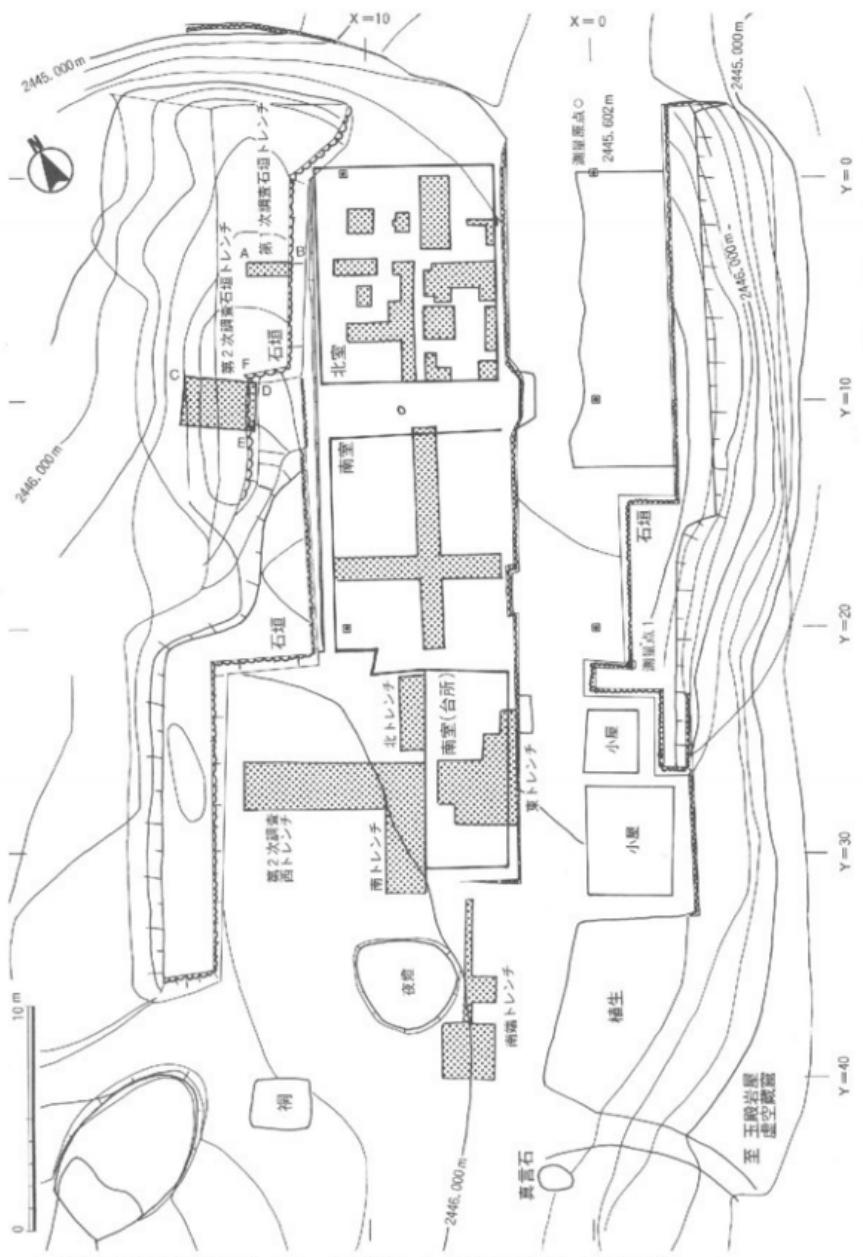
1 室堂全景写真（南西より）



2 室堂北室写真（北東より）

図版四

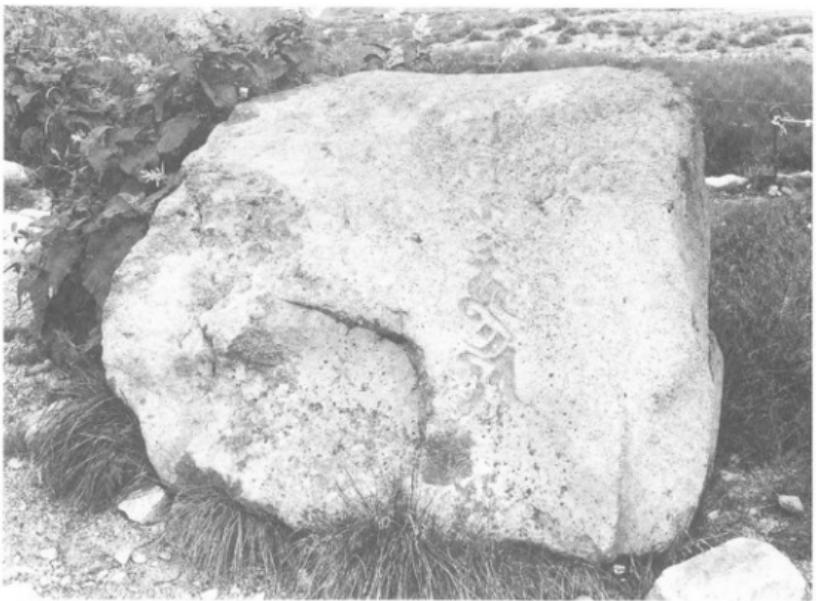
調査地区周辺の地形と発掘区位置図



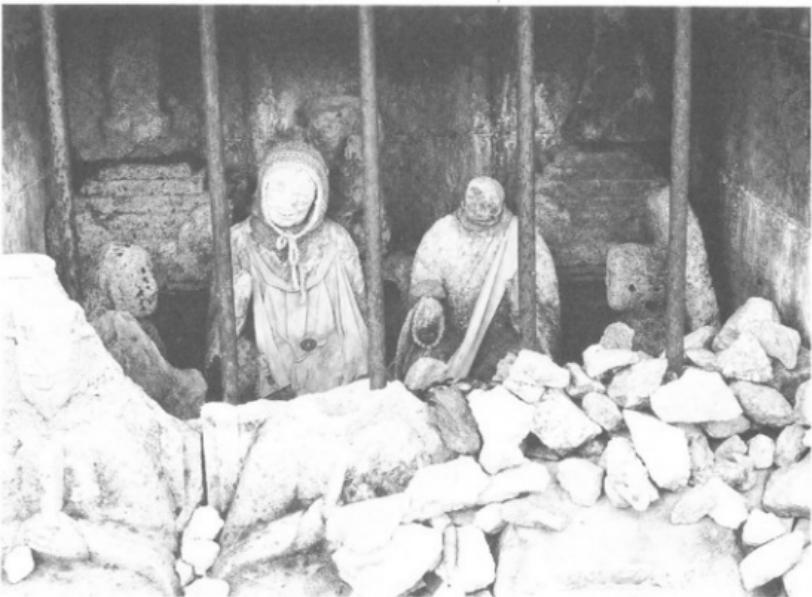
1 調査地区地形図（スクリーントーン部分は、トレンチ設定地図、縮尺 1/250）



1 立山雄山遠景写真（西より）



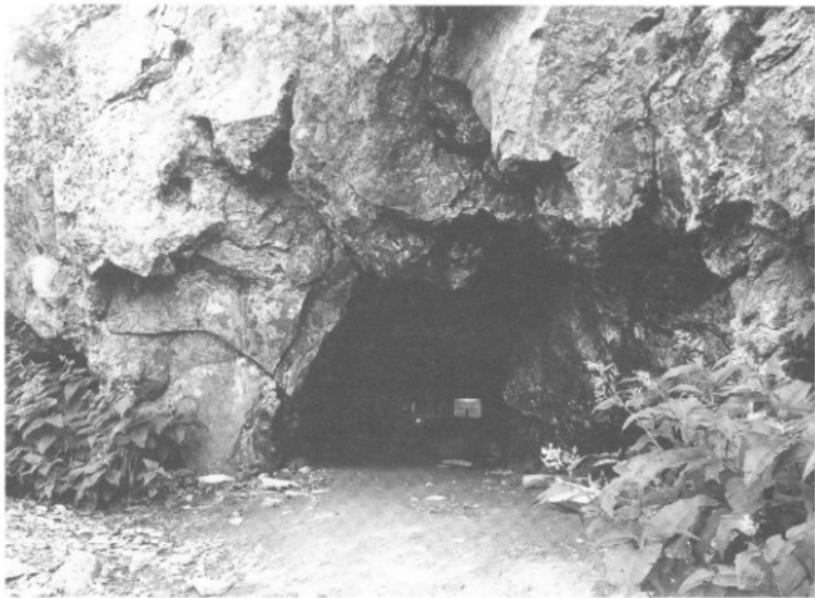
2 真言石写真（西より）



1 神内石造物写真（北より）



2 宝篋印塔残欠写真（北より）



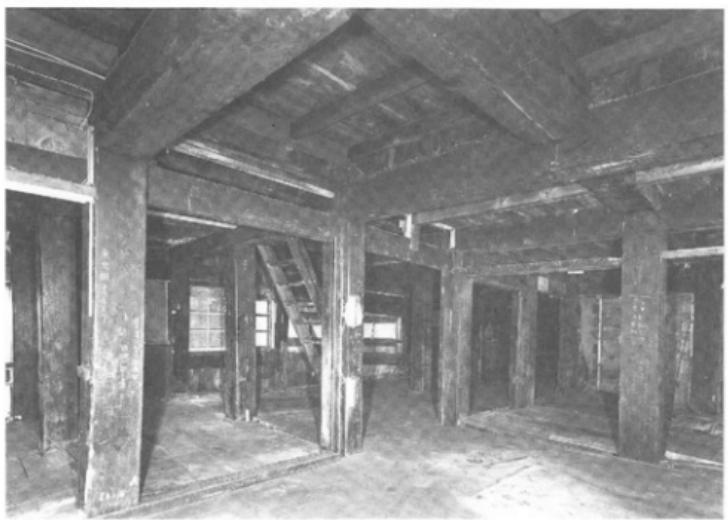
1 玉殿窟全景写真（東より）



2 虚空藏窟全景写真（東より）



1 北室建物内写真（北東より）



2 南室建物内写真（南東より）



1 北室全景写真（東より）



2 北室完掘写真（東より）



1 土層断面写真（東より）



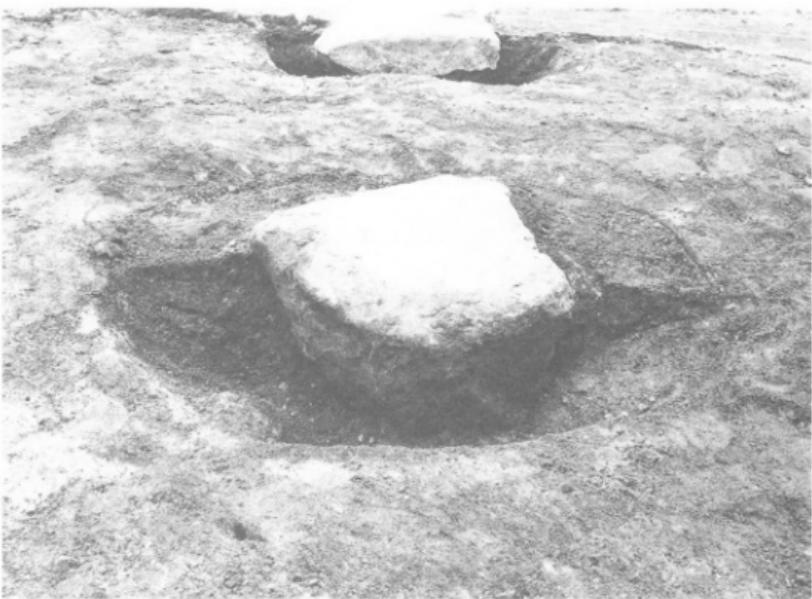
2 下層遺構礎石写真（東より）



1 土間完掘写真（東より）



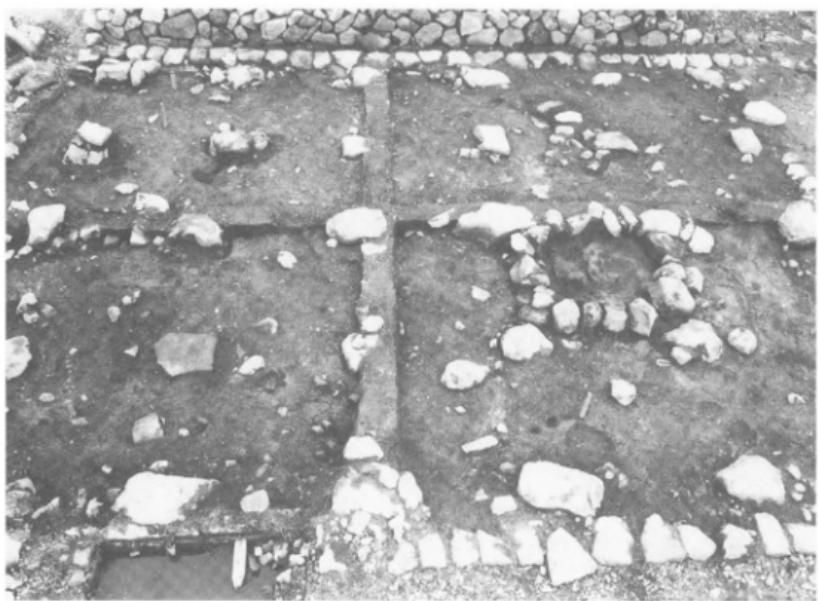
2 石垣裏込完掘写真（東より）



1 硙石掘形半掘写真（東より）



2 硙石掘形全掘写真（東より）



1 南室全景写真（東より）



2 南室礎石攝影写真（東より）



1 調査前写真（北東より）



2 茶褐色粘質土除去後写真（西より）



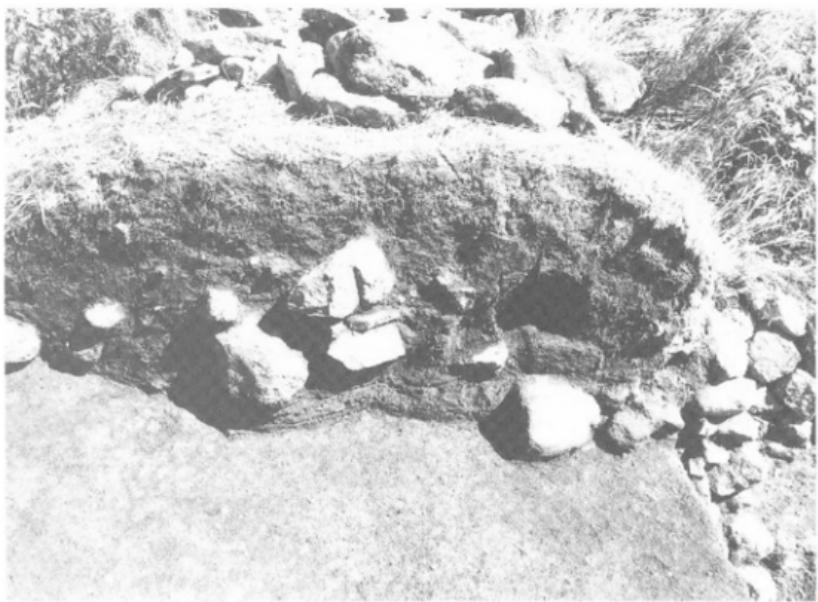
1 土層断面写真（東より）



2 石垣裏込完掘写真（西より）



1 石垣裏込写真（南より）



2 石垣裏込土層断面写真（南より）

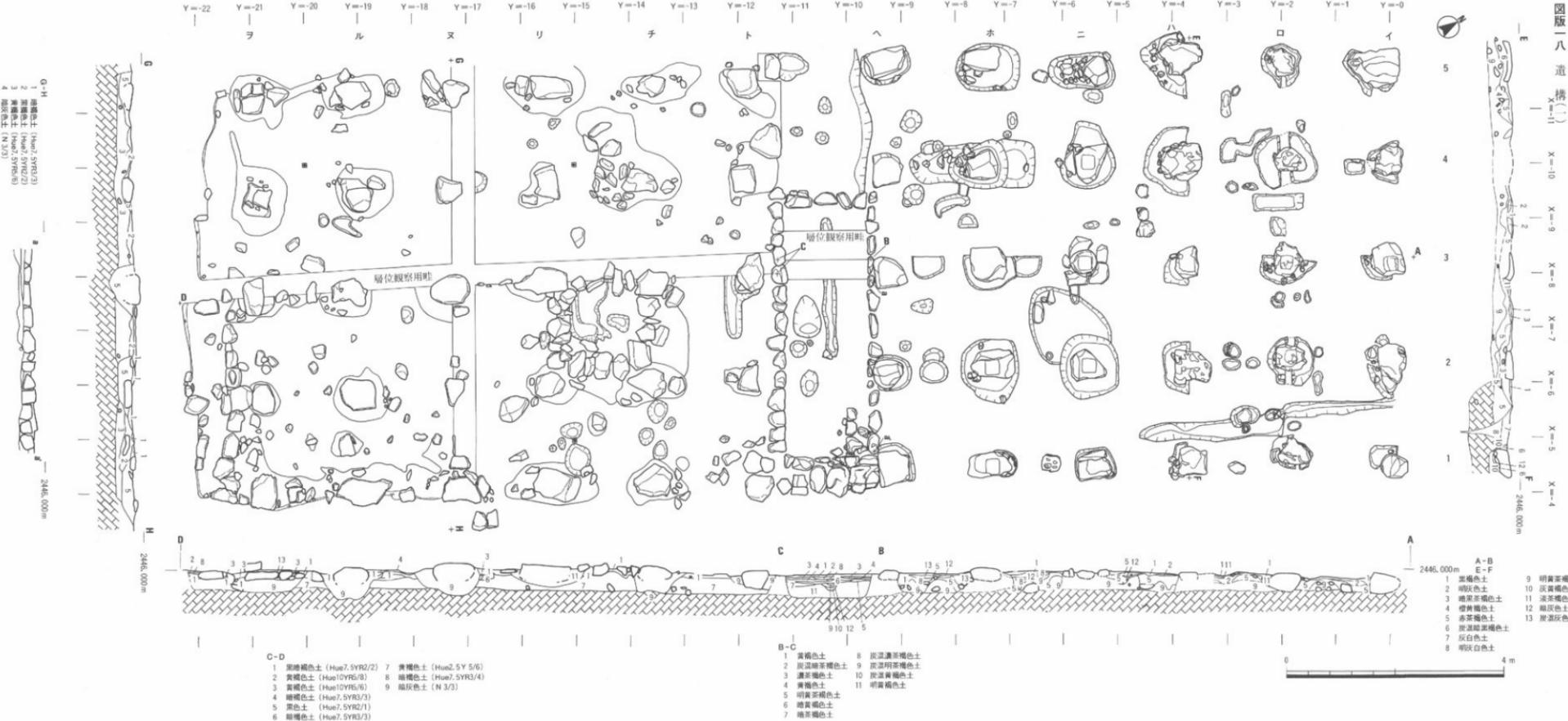


1 木桶検出写真（北東より）

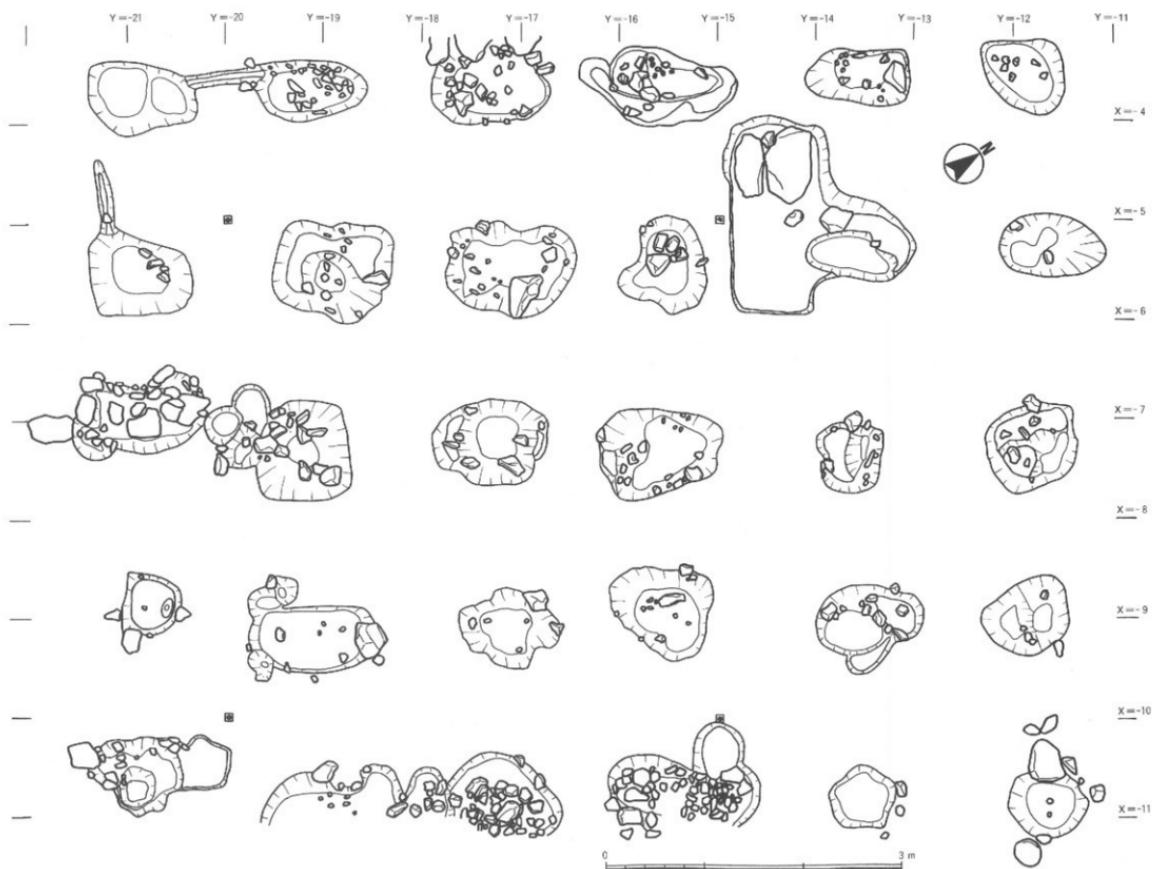


2 土坑1 (SKI) 検出上面写真（北東より）

圖版一八 道 携(一)

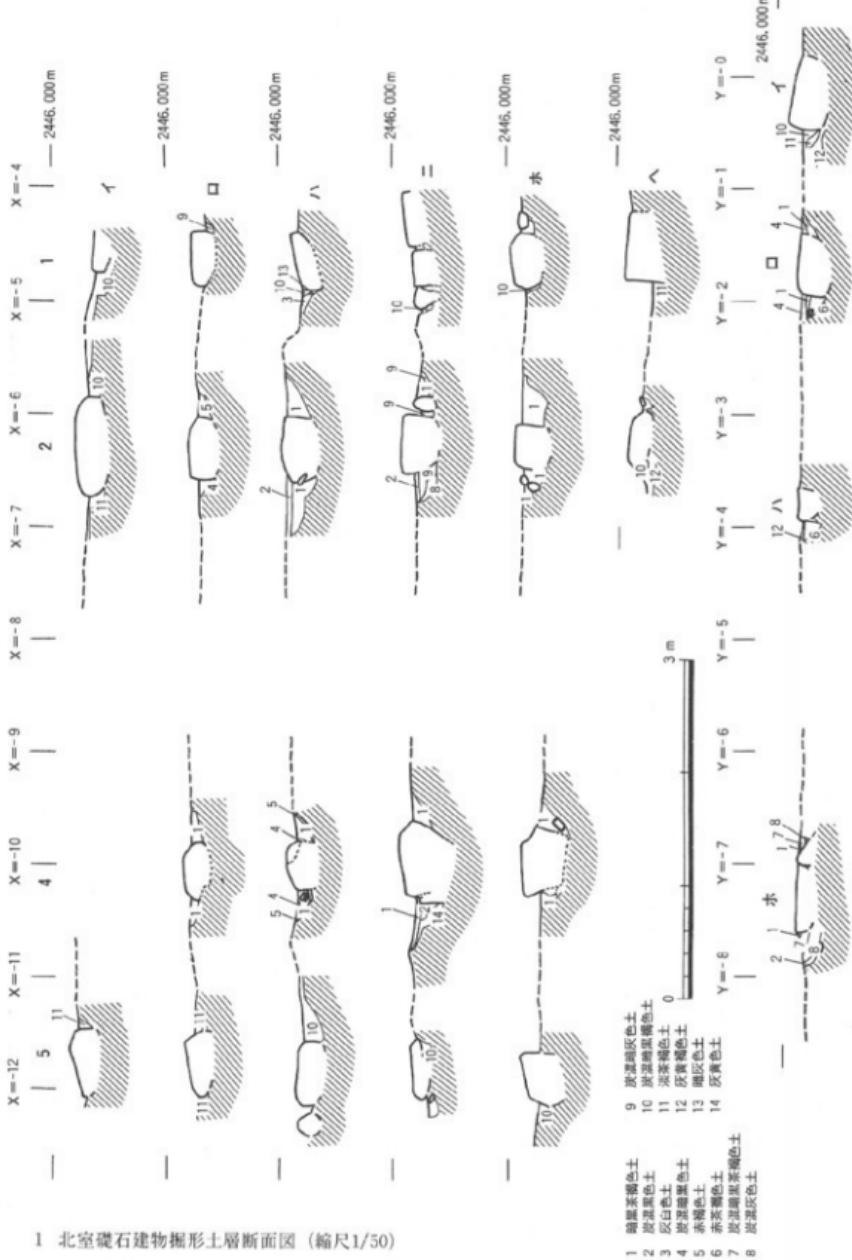


1 北室・南室遺構平面図・土層断面図

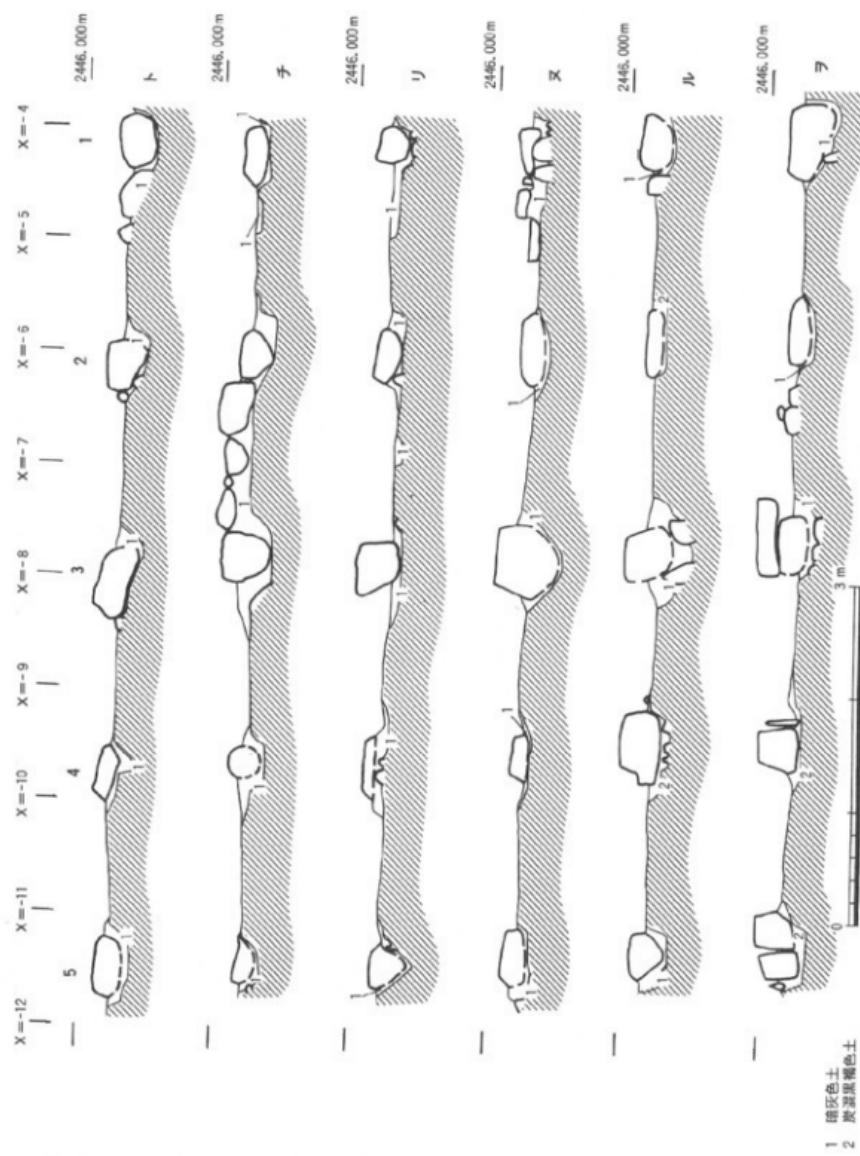


1 南室攝影全貌平面圖 (縮尺1/40)

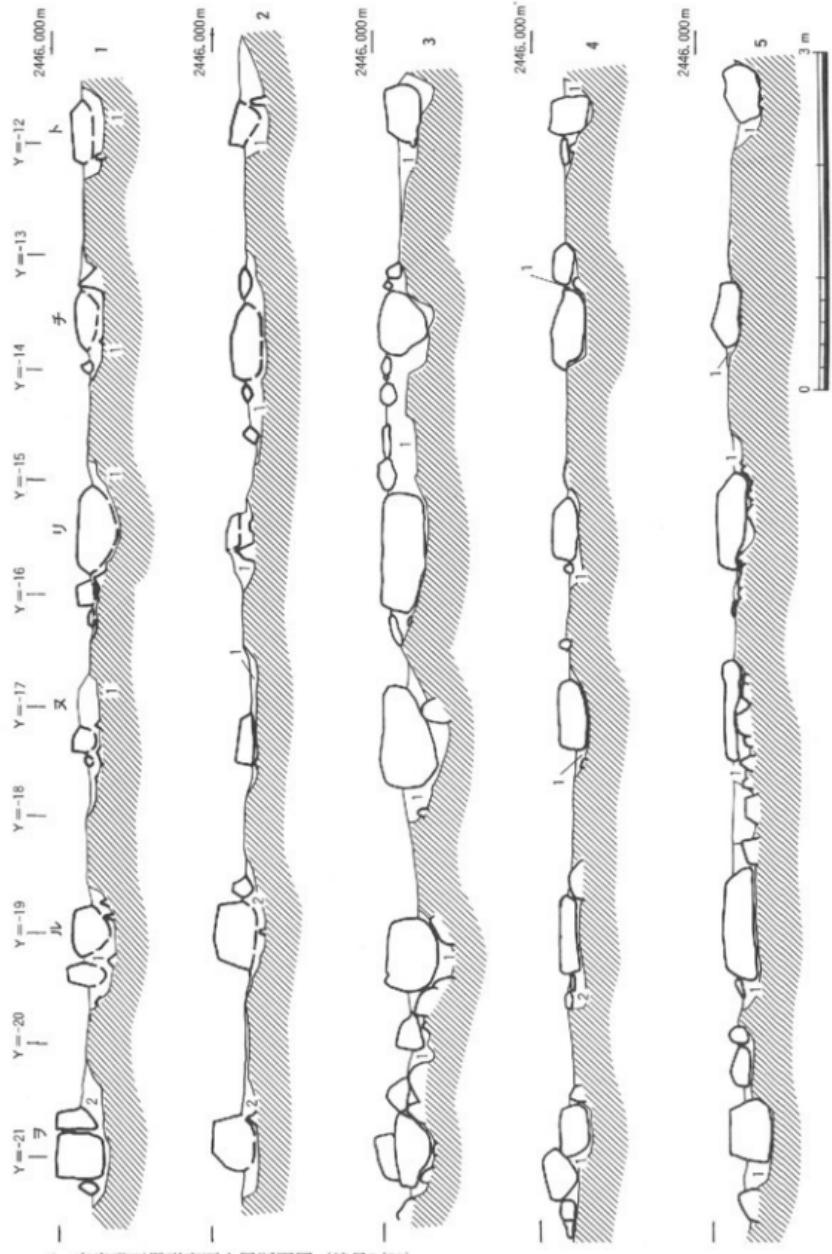
図 II-1 遺構(1)(1)



1 北室礎石建物掘形土層断面図 (縮尺1/50)

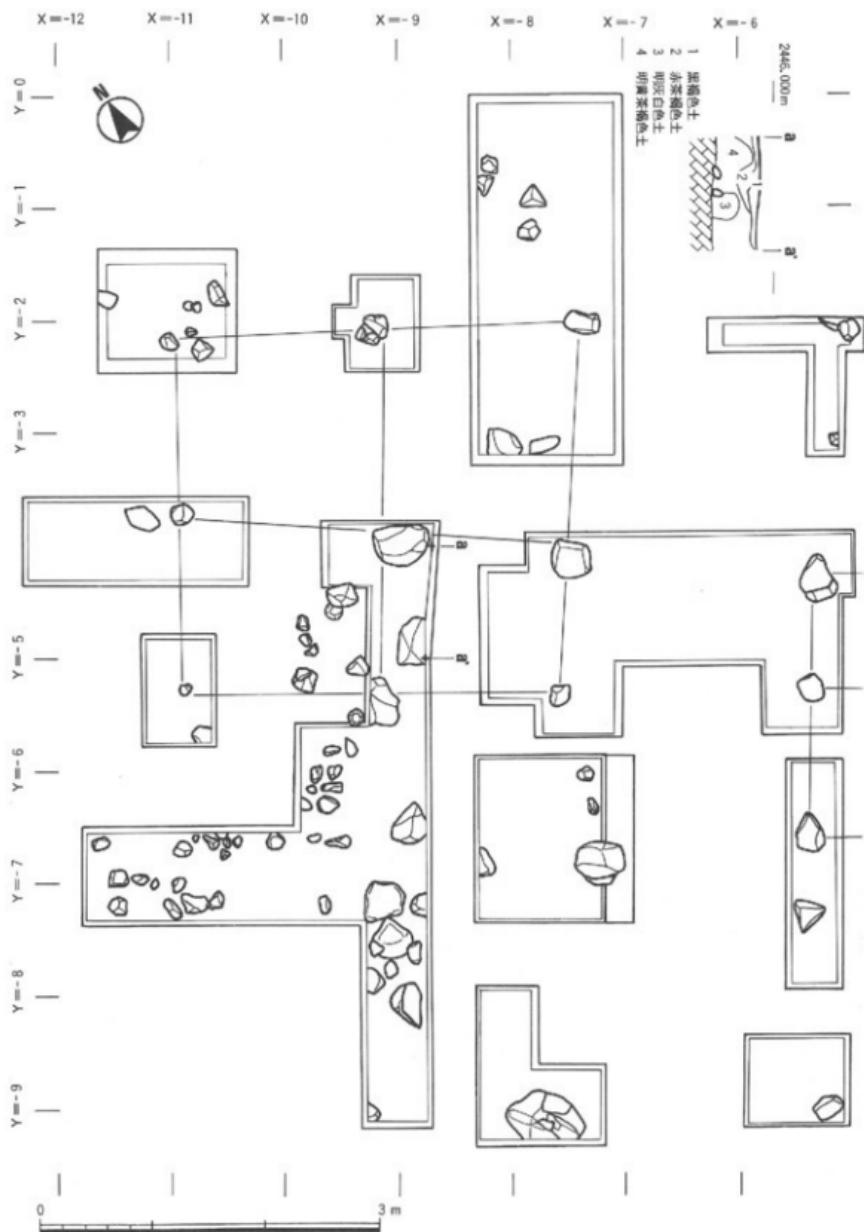


1 南室礎石建物掘形南北土層断面図 (縮尺1/50)

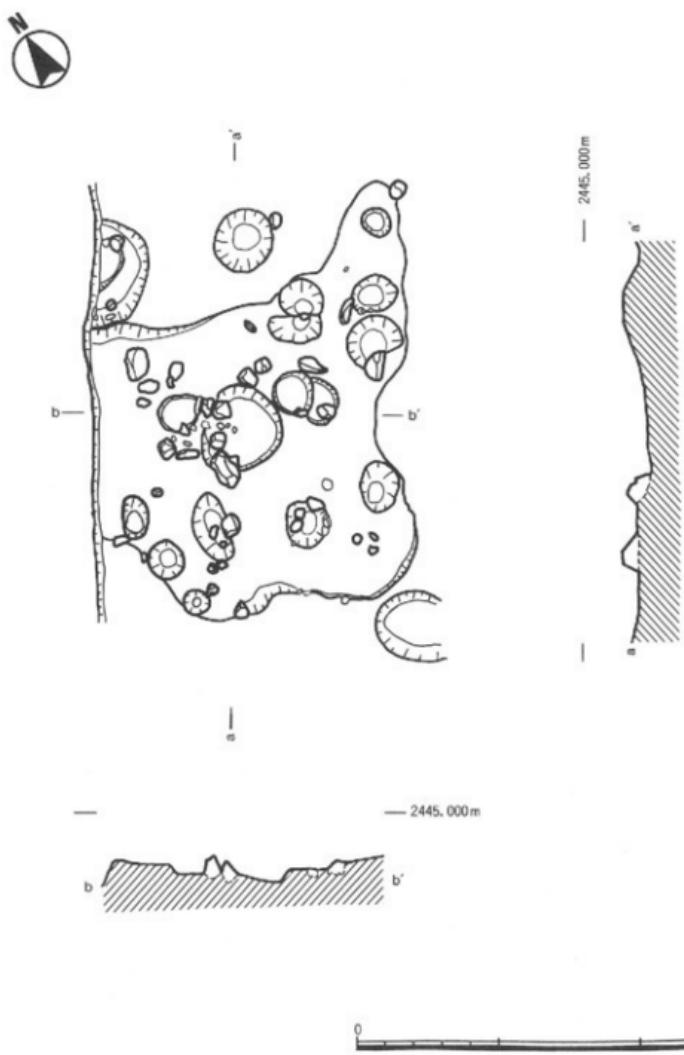


1 南室礫石壠形東西土層斷面図 (縮尺1/50)

図版III-III 遺構(六)

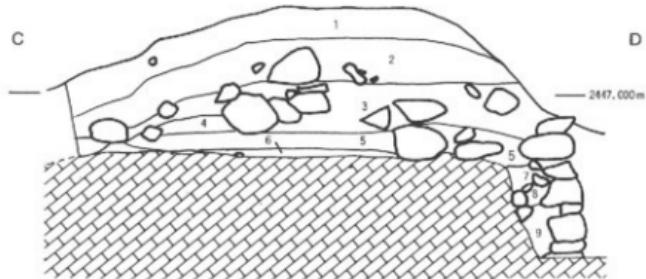


1 北室下層遺構平面図（縮尺1/50）

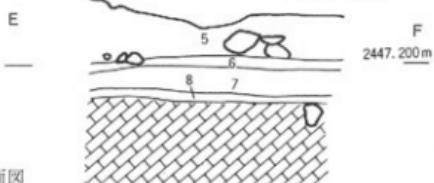
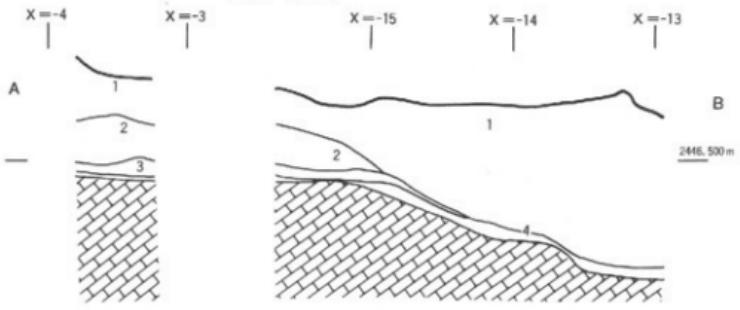


1 南室炉跡平面図・エレベーション図（縮尺1/40）

1 第2次調査石垣トレンチ北壁土層断面図 (縮尺 1/40)

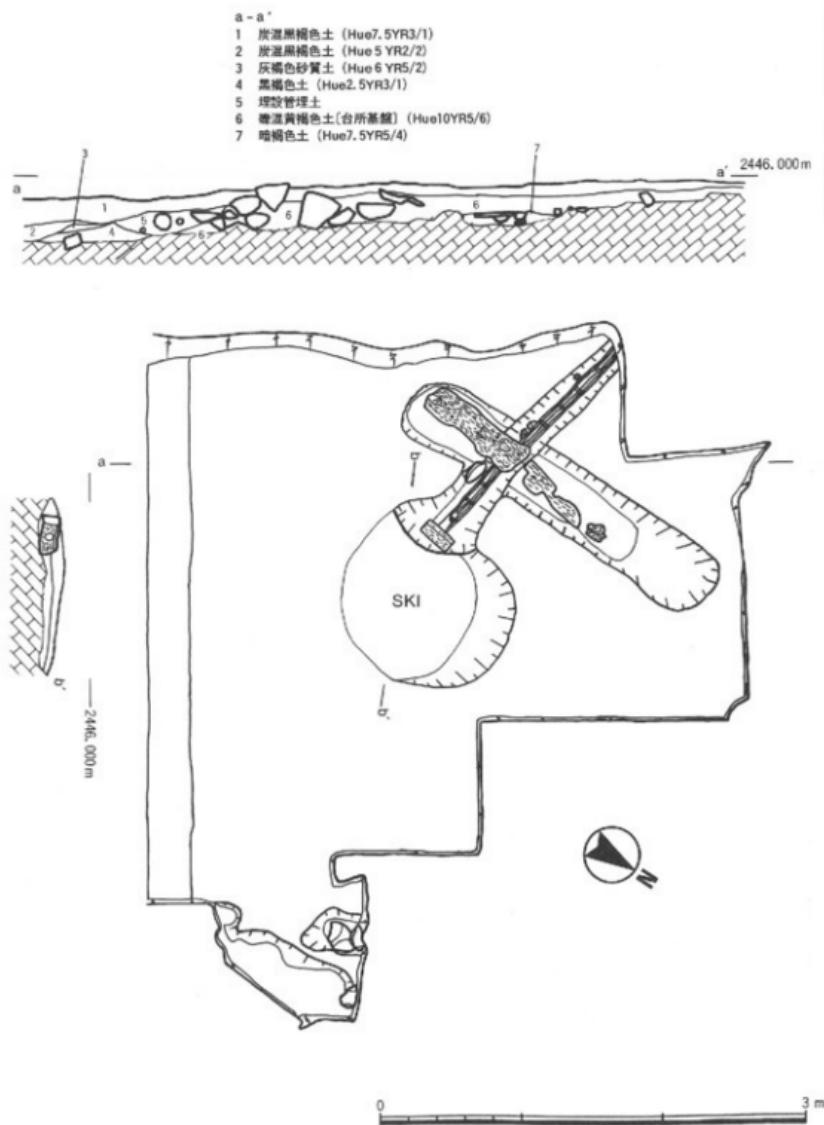


- 1 黄褐色土(Hue 2.5Y6/8)  
 2 茶褐色粘質土(Hue 10YR3/2)  
 3 黑茶褐色粘質土(Hue 10YR2/1)  
 4 底深黒褐色粘質土(Hue 10YR2/2)  
 5 黄褐色粘質土(Hue 10YR5/4)  
 6 暗茶褐色粘質土(Hue 10YR3/4)  
 7 小石混黄褐色土(Hue 5Y6/6)  
 8 赤褐色土(Hue 7.5YR5/8)  
 9 小石混底深褐色粘質土(Hue 10YR7/8)

2 第2次調査石垣トレンチ土層断面図  
(縮尺 1/40)3 第1次調査石垣トレンチ土層断面図  
(縮尺 1/40)

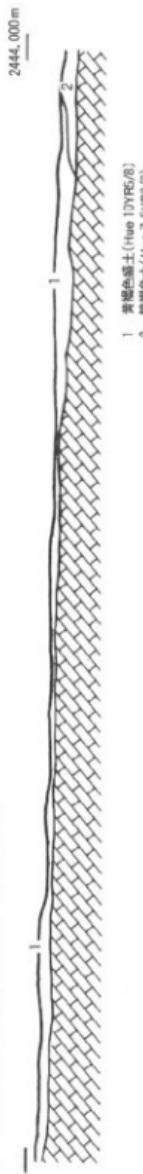
- 1 暗褐色土  
 2 淡茶褐色土  
 3 底深暗褐色土  
 4 黄褐色土



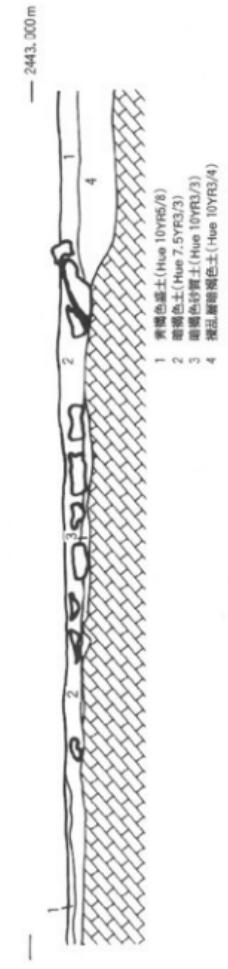


1 東トレンチ造構平面図・土層断面図 (縮尺1/40)

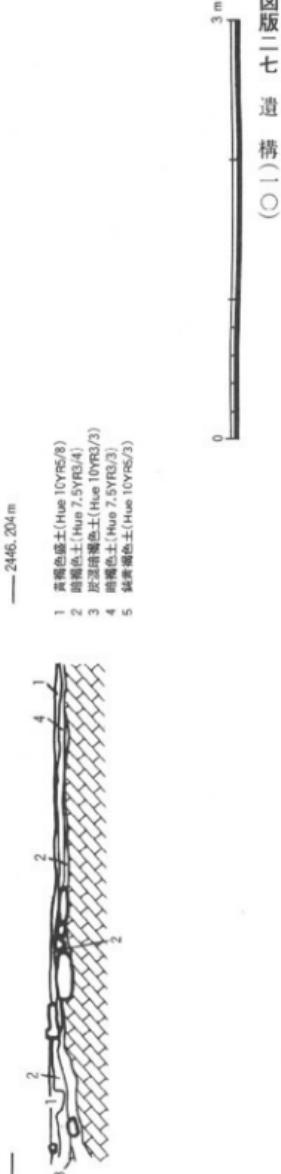
1 西トレンチ北壁土層断面図 (縮尺 1/40)

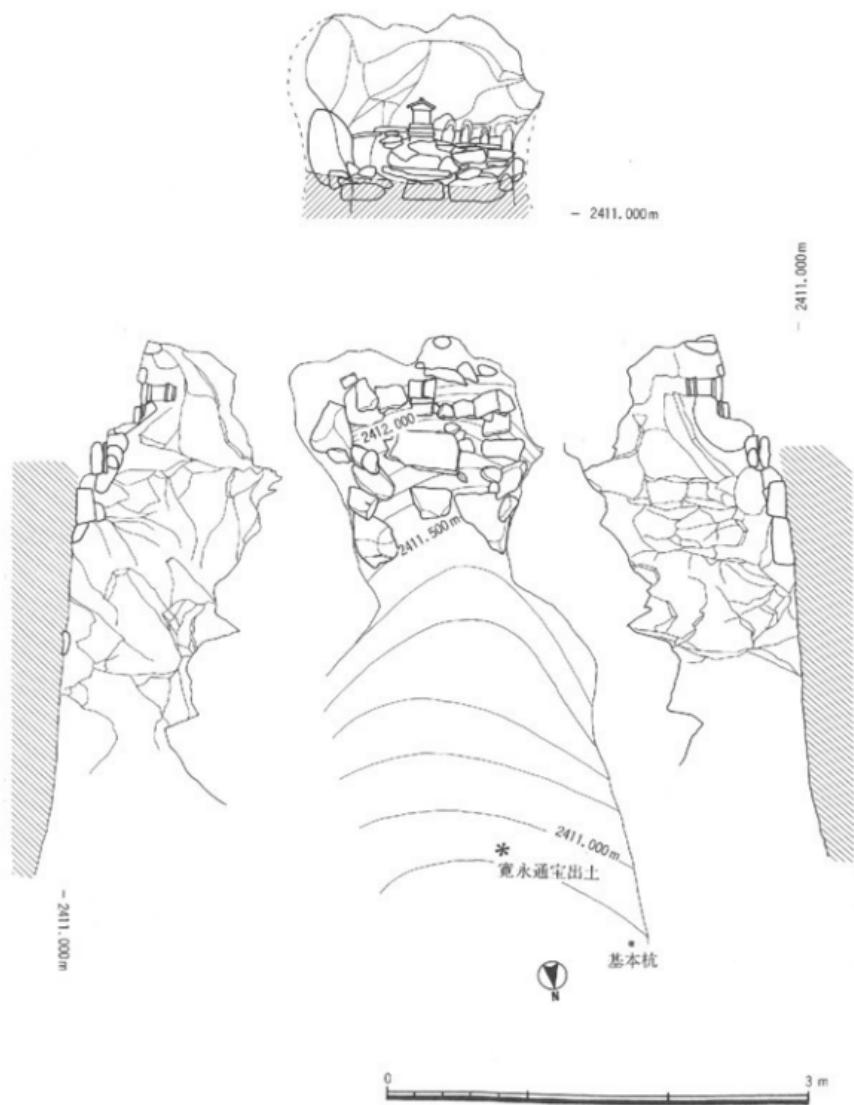


2 南トレンチ東壁土層断面図 (縮尺 1/40)



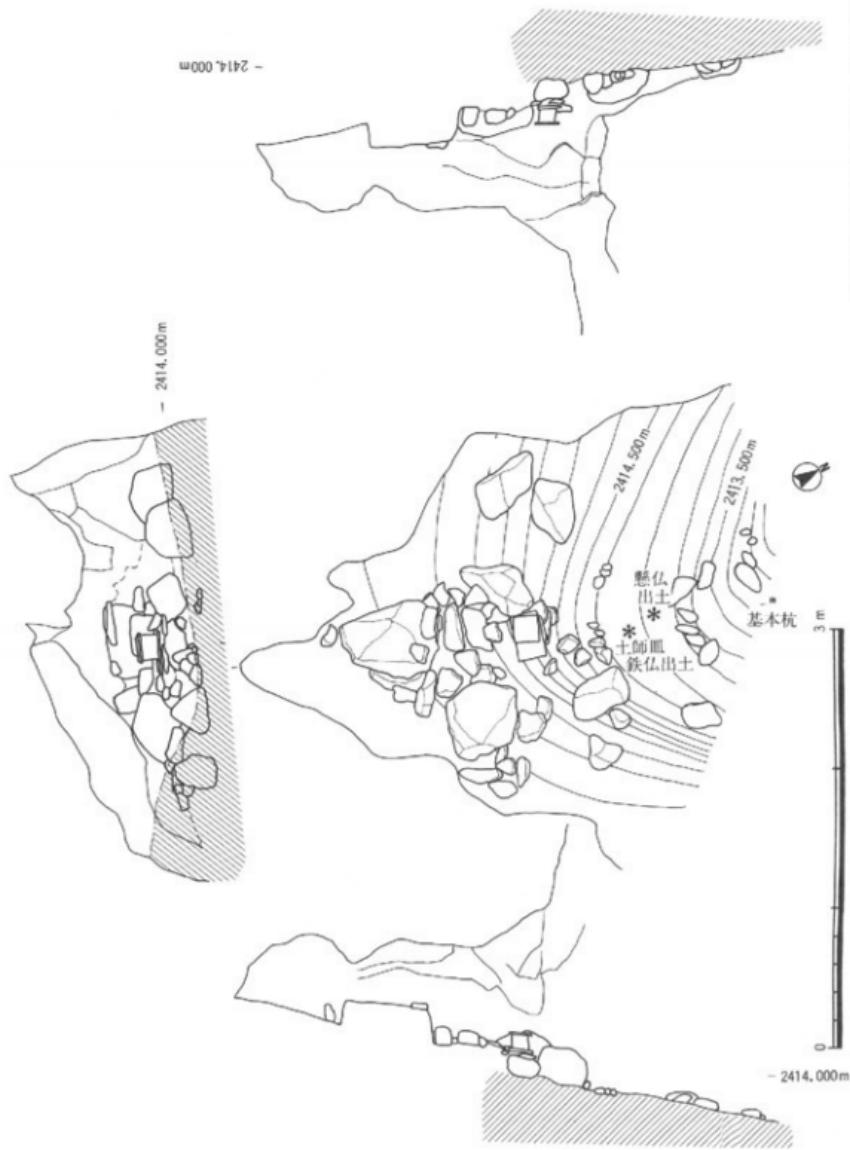
3 北トレンチ東壁土層断面図 (縮尺 1/40)





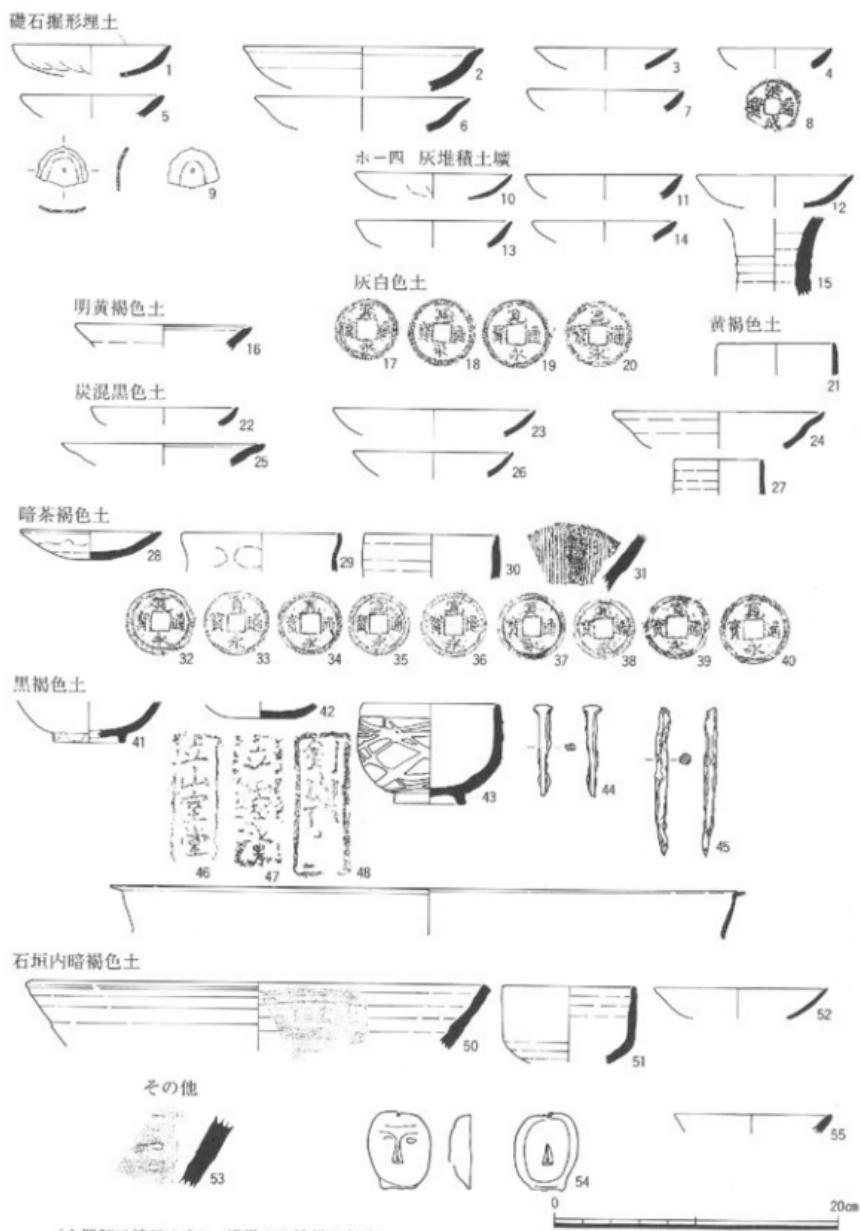
1 玉殿窟平面図・エレベーション図 (縮尺1/40)

図版二九  
遺跡周辺関連遺構(五)

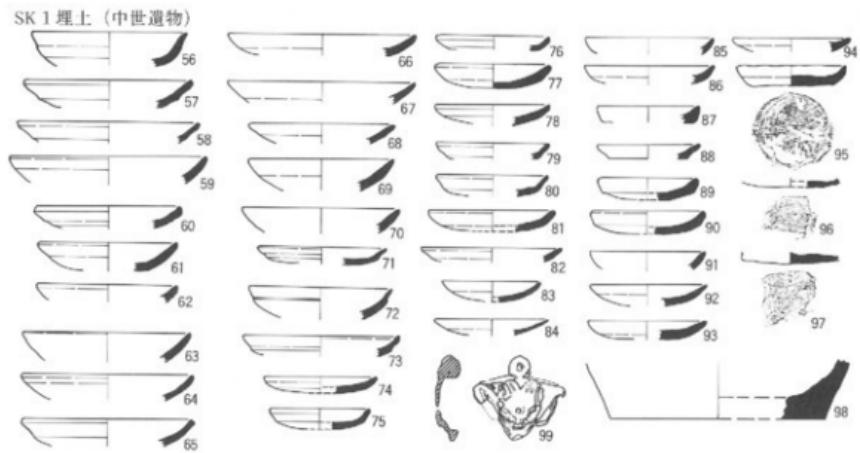


1 虚空蔵窟平面図・エレベーション図（縮尺1/40）

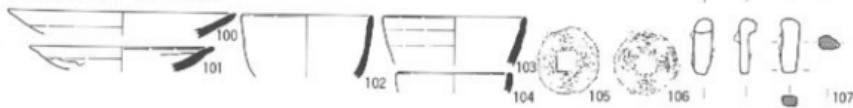
図版三〇 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(二)



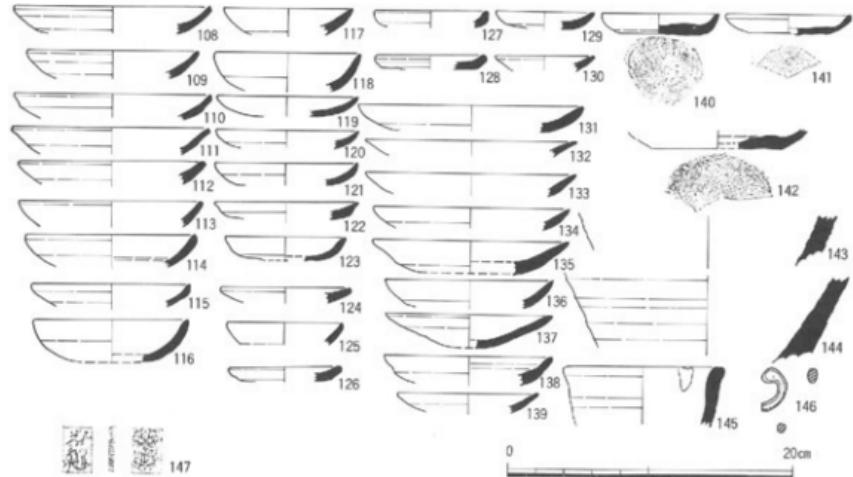
図版三一 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(二)



SK 1 墓土上面 (近世遺物)

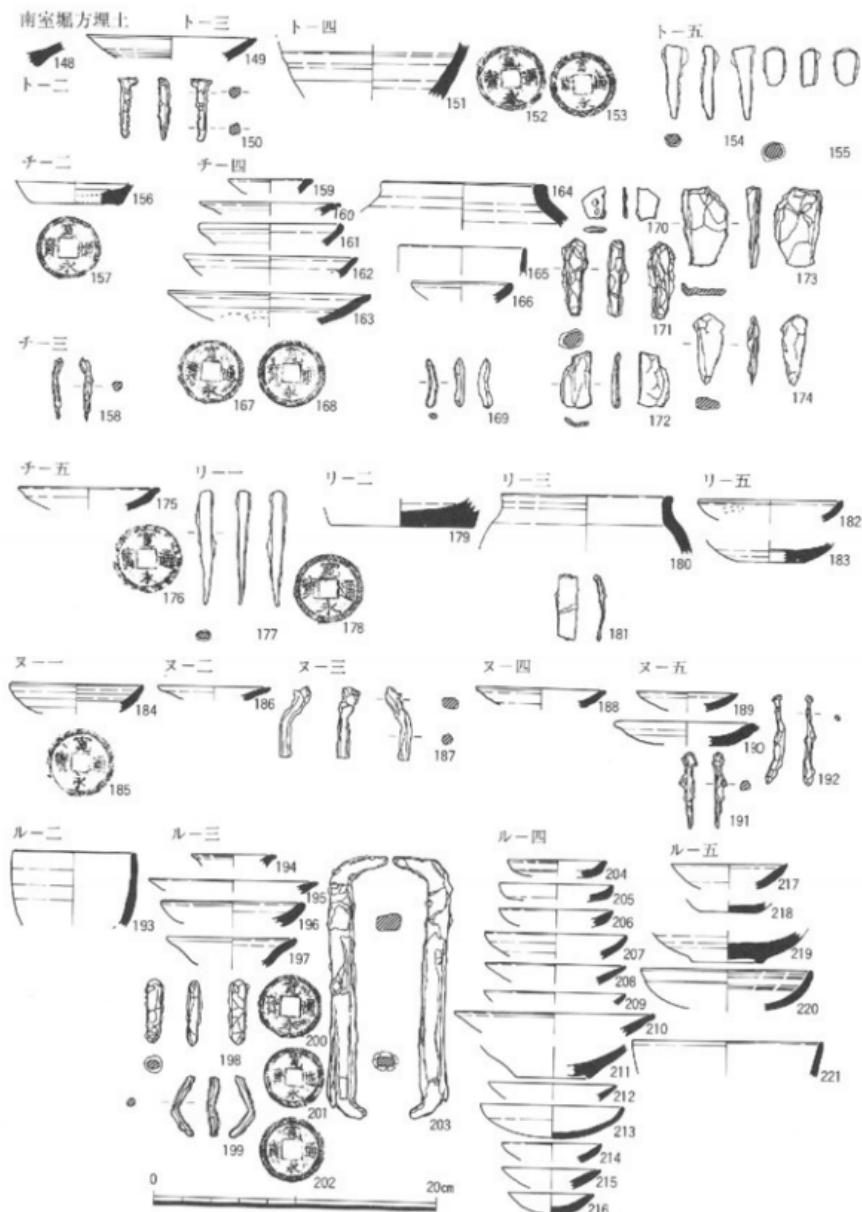


東トレンチ包岩層



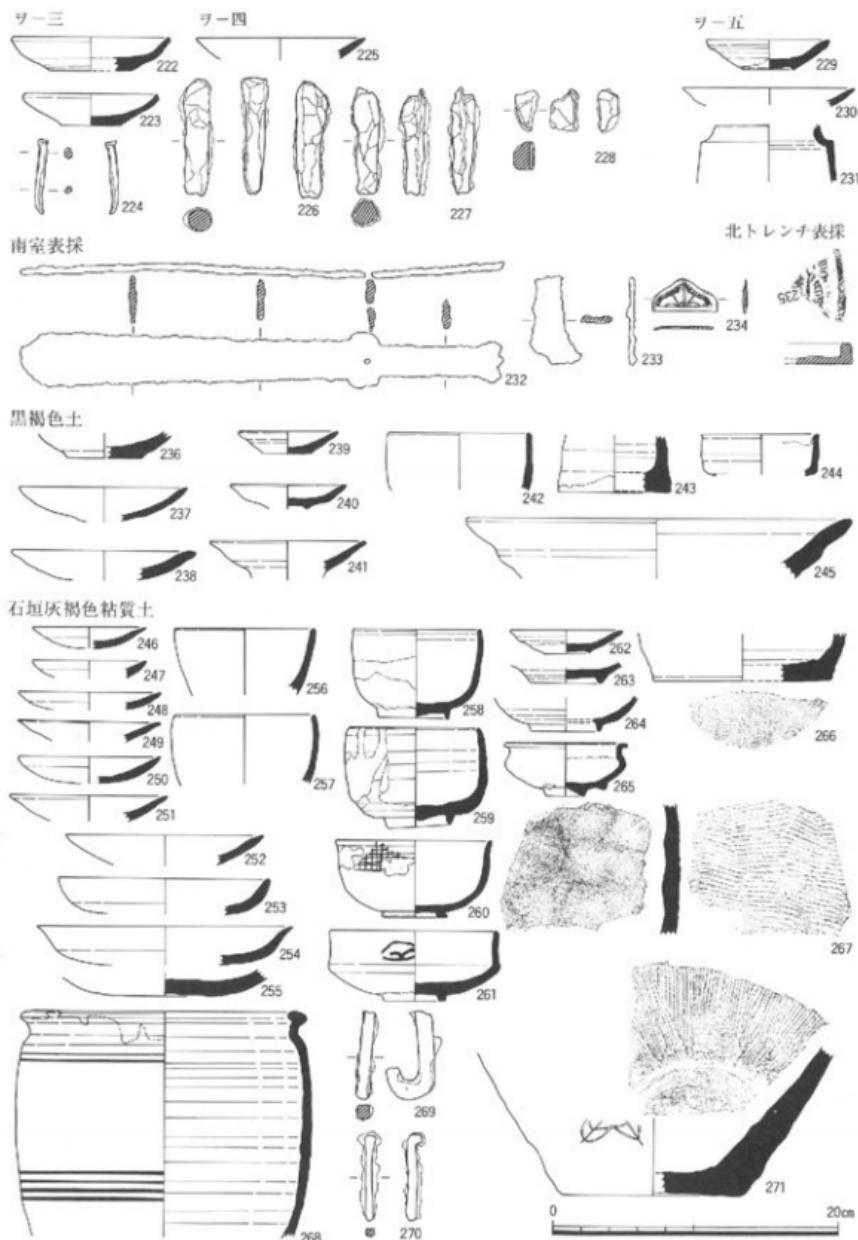
(土器類は縮尺1/4, 錢貨のみ縮尺1/2)

図版三三 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(三)



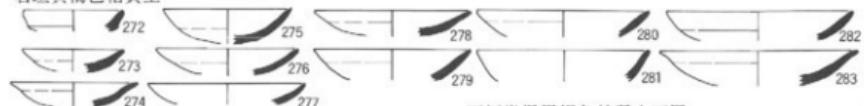
(土器類は縮尺1/4、銭貨のみ縮尺1/2)

図版三三  
芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(四)

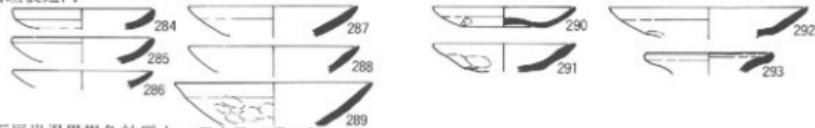


(縮尺 1/4)

## 石垣黄褐色粘質土



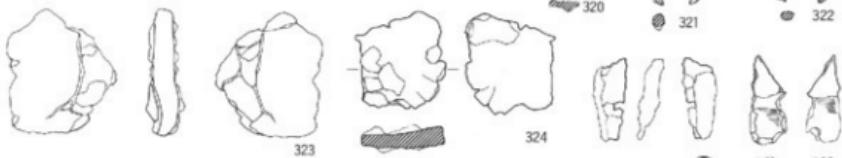
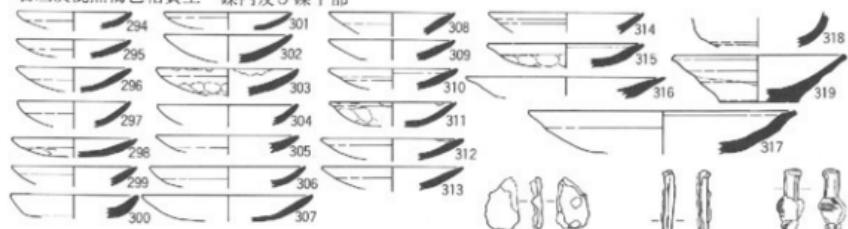
## 石垣裏辺内



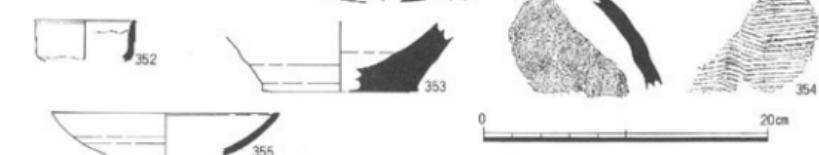
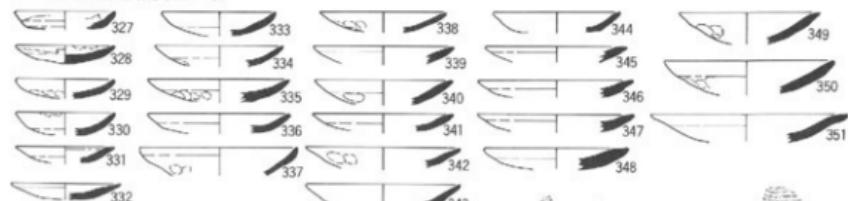
## 石垣炭混黒褐色粘質土下層



## 石垣炭混黒褐色粘質土 窯内及び窯下部



## 石垣炭混黒褐色粘質土上層

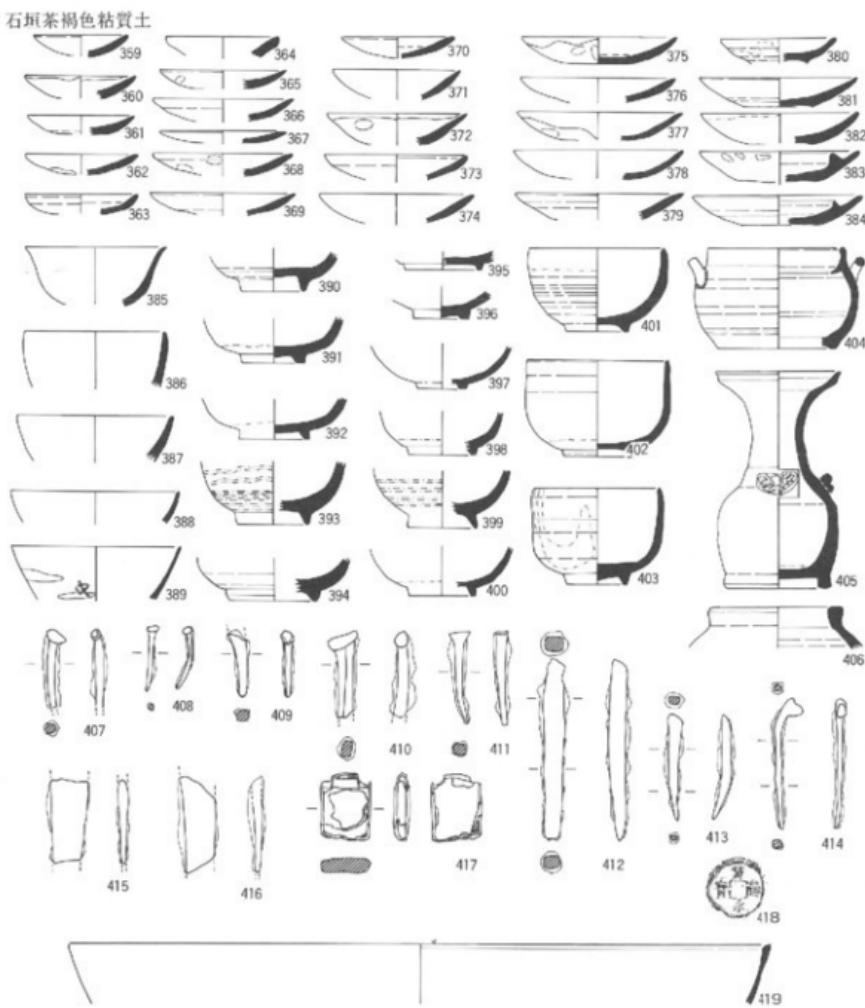


0 20cm

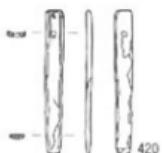
## SK 1 墳土



(縮尺 1/4)



石垣暗茶褐色粘質土



(縮尺 1 / 4 )

0 20cm

ただし、貨幣類のみ縮尺 1 / 2

図版三六 芦嶋寺室堂遺跡出土遺物実測図(七)

